

小宮は、空つとぼけるやうな龍子の様子を見ながら苦笑した。

「そして、しばらく、雙方黙まりでゐたが、急に龍子は、呼鈴の紐をひき寄せようとした。小宮は衝つと遮つて、

「なんです。なんの用で女中を呼ぶんです。……お歸りの自動車なんですか？ まだ早いぢやありませんか？」

「早くもないのよ。」と、龍子は白金の腕時計を見て、「もう、九時二十分よ。」

「それぢやあ、まだ早い。十時までつきあつてください。」

「でも、そろ／＼歸らなければねえ。……今夜はIホテルの、或る晩餐會に出る筈なのをこゝへ來たのだから……」

「さうですかねえ。大切な晩餐會に出るのをよして、わざ／＼こゝへ呼び寄せられる男と、苦心慘澹してやつとこゝでお目にかゝたかと思ふと、すぐ座を立つて歸つてしまはれる男と世の中はかうも、幸不幸の差が、ひどいものでせうかね。」

「それは嫌味？ 小宮さんにしちや、下手な平凡すぎる嫌味ねえ。」

「……下手で平凡すぎるかも知れませんが、これは小宮徹郎の、精一杯の怨みごとなんですよ。いや、本音なんですよ。」と小宮はいかにも眞面目らしくみづからうなづいて、「……いや、かうなればすべて

は昔話なんだが大學を出た當時の君塚君は、ほんたうに熱烈な心持をあなたに持つてゐたものですな……いや、すつかり白状して、僕もあなたを戀してゐた。一時は兩人とも競争者の形で、一生懸命だつたものです。だが、君塚君は日野比先生のお氣に入りで、あゝやつてあなたの英國留學に伴つて渡歐することになった。僕はあの時、たしかに敗北者としての悲哀を味はりました。まつたくみじめ過ぎ氣の毒過ぎる自分を見出しました。しかし、英國での君塚君が、まるであなたから問題にされず、いたづらに煩悶ばかり續けてゐるといふことを、風のたよりに聞いた時は、友人を呪つちやいけないことだけれども、僕は正直にいつて、實に愉快であり、それ見るといふ氣にもなりました。……そしてあなたは隈部さんと結婚した。あなたの結婚は僕にはなんともいへず淋しかつたけれども、しかし、戀の競争者である君塚君の方へあなたを奪はれたよりは、まだどれ位慰めになつたか、樂な氣持で見つてゐられたか知れやしない。……が、今のあなたが、かうして君塚君を夢中になつて……」

「夢中ぢやないわ。」と、龍子は自矜心を傷つけられたやうに苦笑した。「わたし、綺麗さつぱり、未練なしだといつてるぢやないの？」

「そりやあ流石に、今は未練なしといはねばならないあなたでせう。……しかし、今から一時間前までは、すくなくとも夢中になつて……」

位、頑固だつただけのことよ。」

「そんなら頑固にして置ませう。……ところで、そのあなたの我儘からでも、あんなに晩餐會をやめ、苦肉の偽手紙まで書いて呼び出される君塚君と、かうしてあなたにどこまでも忠實でありたいと願ふ僕とは、随分ちがった境涯ですよ。……いや、やつぱり僕は君塚君に對して敗北者だつたのでした。しかも、どうです君塚君は今、まるであなたを問題にしてはゐない。あなたは頑固かも知れないが、君塚君は別の意味でより以上に頑固ですぜ。君塚君は、以前の心持なんか、今はすっかり忘れてしまつてゐる。……だが……だが、僕はあの頃の心持を……忘れようとしたつて忘れることができせん……やつぱり僕は……」

小宮はいつの間にか、龍子のそばに摺り寄つてゐた。そして彼の手は……

「およしなさい。」と、龍子は叱るやうに笑つた。「それ以上の本音は、小宮さんをいよ／＼みじめに、いよ／＼お氣の毒にするばかりなのよ。ほ／＼／＼／＼／＼／＼！」

苦の谷

一つの道へ！ 一つの道へ！

——かう心に叫ぶ時、靖也の希望はいよ／＼燃え、信念はますます深まつてゆくのであつた。

彼はかうして、たゞ、眞一文字に、自分の道を進んで行つた。

彼の仕事には第三船臺があてられた。六百呎にちかいこの船臺に、やがて城壘の如く築かるゝ第一の雄康丸！——彼は塔形起重機や移動起重機によつて運ばるゝ大きな鐵材の、轟々と滑車の音をたて、捲き下さるゝ状を見る時、心臓の血の躍るやうな高鳴を、思はず両手で押へることもあつた。

敏速に、そして注意ぶかく——彼は仕事の能率に、すこしの支障を來すまいと計畫した。彼は部下をいたはつて、十二分の休息を與へたが仕事にとりかゝつた時は、嚴然として時間的な命令に服従させた。かうして工場に働くには書齋で組み立てる仕事の數倍も、氣骨が折れて油斷のならぬものなのである。相手は文字や製圖器械とちがつて、生身の人間である。彼等のその日の心持や、身體の條件やらに、一瞬の隙なく氣を配らねばならぬ。彼はみづから先頭に立つて働きながらも、船首から船尾までに部署に就いてゐる人數に、一々快活な勵ましの言葉をかけるのであつた。

職工達は、よろこんで彼のために働いた。

——たゞ一人、彼等にまじつて、妙に根強い反抗的な態度を示しながら、冷笑するやうな眼を光らせてゐるのは、例の庄太であつた。

彼は靖也の仕事を、陰に陽に妨害するやうな氣勢を示してゐた。移動機重機を運轉する彼の役目を

彼はことさらにノロノロやつた。靖也が仕事に焦れば焦るほど、彼は一層緩漫に動作した。

「そのZ鐵材を早くこつちへ！」

と、靖也がせき立てると、

「そんなことをいつたつて、器械がする仕事だ。おれ達が思ふやうに、ヒョイと持つて来てヒョイと置くといふ風にはいかねえ。器械にや神通力があるわけやあねえからな。」

と、香氣らしく煙草の煙をフーツと吐いて、そつほを向いてしまふのであつた。

時とすると、器械に油をさすのだといつて、運轉臺のわきにしゃやがんだまゝ、ものゝ三十分も氣の乗らぬらしい鼻唄をうたつたりすることもあつた。伍長の田島が見かねて叱りつけでもすると、

「大きにお世話だ。この器械はおれの所持だ。器械を大事に使ふのがおれの職分だ。誰だつて、飯も食はねえで働き通せるもんぢやあねえ。器械だつて、たまにやあ油もさしてやらなきあならねえやな。……へん、玩具の船をつくるのぢやああるめえし、そんなにおいそれと仕事にかゝれるもんか！」

と、なほさら圖ぶとく空うそぶくのであつた。

といつて、庄太の役をほかの人間に代へようものなら、彼はいよくどんな振舞をするかも知れない。靖也や田島に突つかゝらないにしたところで庄太の役を引受けた男が、彼から恐ろしい仇をかへ

されることは、ちよつとした彼の棄て臺詞からもわかりきつたことなので、他から人をつれて來ることもできなかつた。また、みんな庄太の烈しい氣象を知りぬいてゐるので、敢てこれに代はらうとする者もなかつた。——結局すかしたり、なだめたりして彼を使ふのが、策を得た方法であつた。

靖也は、それゆゑに、庄太が妙にねぢけ出す場合には、焦々する心を強ひて制しながら、彼の機嫌を取るやうにして、仕事をすゝめなければならなかつた。困つた者だとは思つたが、今はどうすることもできないのである。——實際靖也は悔いた。なぜ、あの時あたり觸りなく斷わらなかつたのであらう？——自分が、この仕事をはじめるとき、庄太は自分の製圖室へ來て、是非ともこんどの仕事の人数に加はりたいと申し出たのである。彼は、いかにも神妙らしく、熱意のある顔をして、自分の仕事にすこしでも役に立ちたいと、みづから志願したのである。自分は、かうした男が一旦氣を籠めたら、案外眞面目に、人並以上に働くであらうことを豫期したのであつた。それで快よく「難有う。よろしくお願ひするよ！」と、むしろよろこんで彼の申し出を受けたのである。それが、こんなにアテはずれな眞似をされるとは！——靖也は庄太を憎まなかつた。たゞ自分の不明を悔んだのであつた。

——そして、或る日のことであつた。

庄太は午飯後、十二時半の就業の汽笛が鳴つてからも、移動起重機の運轉臺に兩足を投げ出したまゝ、助手の高橋といふ男を相手に、煙草をふかしながら、いかにも香氣らしく高話しをしてゐた。

「兄貴、汽笛が鳴つたぜ。そろ／＼仕事にかゝらうかな。」

と、高橋は、それでも、みんなが働きはじめたのが氣になるらしく、庄太をうながした。

「まだ早えや。そんなに急つつかたあねえ。これから五時の汽笛までに、バルブとHセクションの七八つも運べば澤山だ。」

「さういふ譯にもゆくめえよ。今日は是非仕事の一區切までやりたいから、午後は骨も折れようが、なんとか豫定のものだけを運んで貰ひたいと、君塚さんが、さつき自分でわざ／＼頼みに來たのだぜ。」

「へん、いくらあいつが頼むといつたつて、こつちも生身の身體だあ。使へば疲れる生身の身體だあ。

……へん、なにをいつてやがる！」

庄太は睨めつけるやうに高橋を見た。

「なんだかおれが叱られてるやうだな。」

「お前だつて間抜けだぜ。そんなことをいつて來やがつた時に、さうは仕事ができるもんかつて、なぜ、いつてやらなかつたんだ？」

「だつて、さうもいへめえよ。なんといつても先方は主任技師なものな。」

「主任技師もへつたくれもあるもんか、できねえものはできねえと、きつぱりいひ返してやればいゝ

んだ。……手前はまるで意氣地なしでいけねえ。なめに構ふこたあねえ。そんなことをいやがりやあ、いよ／＼仕事をなまけとほしてやる分だ。」

——ちやうどその傍を、庄太とは馴染の、松山が重さうに穿孔錐をさげて、通りかゝつた。

「おい／＼松山！」

庄太は呼んだ。

「おい、庄太兄いか。」

「大層忙しさうだな。」

「あゝ、今日は船尾の縁板を取つつけてしまはなきやならねえんでな。」

「ふうん、さうか。……しかし、ちよつとこゝで話して行きねえ。」

「うむ、だが……いま、組長が急いでゐるやうだから……」

「まあいゝやな。手前一人が働かうがどうしようが、べつにどれほど仕事がおくれるわけでもあるめえ。……まあ、そんな重いものはそこへ投り出してよ。一服やつて行くがいゝ。」

と、庄太はポケットからバットの函を出して、松山につきつけた。

「うむ、難有う。……だが、組長も急いでゐるし、技師さんも焦つてゐるやうだから。」

「おや？ この野郎、人が折角一服すゝめてゐるものを、親切を無にしやがるな。……おい。なにか、

おれの出した煙草が気に入らねえのか？」

「いや、なにも、さういふわけぢやあねえよ。……どうも困るな、庄太兄はすぐそんなに怒り出すんだがら。……ぢやあ、一本貰ふよ。」

と、松山が手を伸して煙草を抜き出さうとするのを、庄太はピンリと拳で拂ひのけた。

「なんだつて？ ぢやあ一本貰ふよ？ ふん、なにがぢやあだ。おらあなにも、手前なんかにおためごかしで煙草を貰つて頂く覚えはねえ。なにをいつてやがんだい。手前は近頃、伍長や職長に胡麻あ摺りやがつて、すこし評判がよくなつたと思つて、變に小生意氣な眞似をするさうだが、憚んながら、おれの前ぢやあ、そんなことあ通させねえからさう思へ。やい、妙な口をたゝきやがると、そのまゝにやあして置かねえから、その積りでゐるがい。」

「なにも……なにも……そんなつもりで言つたわけぢやあねえよ。ねえ、庄太兄い。おれのいつたところが氣に觸つたら勘辨してくれ。なにもおらあ……」

「酒場へ連れてつてやるわけで、おらあ兄い〜と奉られたかあねえ。」

「いや、決してそんな……」

松山は庄太が氣色ばんだので、周章て手を振り首を振つて辯解しようとした。そこへ靖也が走つて來た。

庄太はツイと彼方を向いた。

「おい、松山君！ 早く來てくれたまへ。その穿孔錐はすぐ入用なんだから。」

と、靖也はいつた。

「は……」

「すぐだよ。すぐ持つて來てくれたまへ！」

「は……」

松山はちよつと庄太の機嫌をうかぶやうに、躊躇した。

「君塚さん。この松山には、わたし、すこし話があるんですが。」

と、庄太は意地悪げに口を出した。

「話？ なんの話だね？」

「え、すこし相談があるんで。」

「できることなら、その相談は後のことにして貰ひたい。松山君には、いま仕事を急いで貰はなければならんから。」

「さうですか。」と、庄太は猶更落ちつき拂つて、「しかし、こつちの相談もなか〜大事なことなんですがね！……」

「さうかも知れんが、松山君は、いま會社の仕事に従事してゐる最中なのだよ。」
さすがに靖也にも、穩かななかに、どこかムツとした調子があつた。

庄太はノツソリ、運轉臺から下りた。彼はグイと肩をそびやかした。そこには明らかに反抗的な表情があつた。

「技師さん。」と彼は無氣味な恭々しさをもつて呼びかけた。「この松山君は、實に感心な、忠實な男ですよ。松山君は、いま細君が病氣なんです。なんでもひどい熱で、今朝家を出る時も、卅九度いくらつてえ熱だつたのを、仕事の責任を感じて、その細君ひとりを家に残して置きながら、無理にかうして出勤してゐるんです。可哀さうぢやありませんか。」

「え？ 僕の嬢あが……？」

と、松山は庄太の意外な言葉に驚いたやうに、なにかいはうとするのを、庄太はグツとおつかぶせるやうにして、

「まあ、松山なにもそんなに、隠さなくつてもいいやな。君が家のことを心配しながら仕事をしてゐるのを見て、僕あ氣の毒でならないんだ。だからかうして技師さんにお願ひして見ようと相談してゐるんぢやあないか。」

「……しかし、そ、そんな……」

「まあ、黙つてゐるがいい。君の口からはいひ悪いことなだからね。」

「ふむ、松山君、ほんたうにさうだつたのか？」

靖也は松山に向きなほつた。

「え、その……」

松山は、あまりに無茶すぎる庄太の言葉に、どうしていいのかわからぬか、へどもどした。

「松山君、ほんたうにさうだつたのか？」

靖也は訊きなほした。

「技師さん。どうもをかしなお言葉ですねえ。ほんたうにさうかとは、なんだかわたしのいふことを疑つてゐなざるやうですねえ。」

庄太はすぐからんで來た。

「いや、疑つてゐるわけぢやあない。」

「お疑ひなさらなきあ、なにもそんなに松山君に押し問答しなくつてもいい筈でせう。」

「しかし、たとひ君が松山君に代つてさういつたからつて、僕は僕の職責から、一應松山君に訊き直す必要はあるのだ。」

「あ、さうですか。」庄太は、ことさら大きくうなづいて、「おい、松山君、僕が折角君に代つていつ

てやつたことが、技師さんにはなんだか腑に落ちなさねえらしい。まあ、君からすつかり、ほんたうのことをほんたうにいつて、今日はこれから休ませて頂くがいゝぜ。」

靖也は黙つて松山の當惑するやうな顔を見てゐたが、

「松山君、まつたく知らなかつた。どうもすまない。……君、細君がそんな熱なのにひとりではつて置いてはわるい。すぐ歸つて看護しておあげなさい。」

「え、しかし……僕は……」

松山はいよく面喰つた。

「おい、松山君、技師さんが御親切にあゝいつてくださるのだ。はやく歸るがいゝぜ。……え、おい技師さんは君を相當信用してくださるんだ。難有く思ひねえ。はつはつは！」

庄太は笑はないでもいゝことを笑つて見せるのだといふ風に笑つた。

松山はひとりで困つて、

「……えゝ……それでも……」

「おい、松山君、人の親切を無にするもんぢやあねえぜ。はやく歸るがいゝやな。」

「……えゝ……ではさうさせて頂きます。」

松山は穿孔錐を持つて、とにかく船臺のはうへ行かうとした。

「おい、松山君、すぐ歸つてやれよ。そんなものあ、そこへ打棄つときや、誰か持つて行つてくれらあな。」

「それでも、これだけは……」

松山は、庄太と靖也の顔を、半々に見ながら、まだ逡巡した。

「どうしてこの男は、人の親切を無にしたがるんだらう！」

庄太は強くいつた。

「あゝ、松山君、いゝよ、それは僕が持つてゆくから。」

靖也は、すべてを察したやうに、しかし、なに氣ない調子でいつた。

「それ見ねえ。技師さんは技師さんだけあつて、どこまでも部下を同情してくださらあ。……君はこゝからすぐ歸るがいゝ。」

「しかし……これだけは……」

「なに大丈夫だ。僕が持つてゆく。君は早く歸つて看護してあげてくれたまへ。」

「松山君、ほんたうに難有く思ふがいゝぜ。こんなに分りのいゝ技師さんは、世界中さがしたつて、滅多にあるわけのものぢやあねえ。」

「……それでは歸らせて頂きますが……今日は早退けつてことになるのでせうか？」

松山はまだ愚圖くした。

「それは、會社の規定なんだから。」

と、靖也はいつた。

「へえ、松山君は早退になるんですか？」

「どうも會社の規定は破るわけにはいかない。これは松山君ばかりのことではなく、僕だつて……いや、重役や社長だつて、規定にはどこまでも服従しなければならぬのだ。公私の混同はゆるされない。」

「しかし、松山君は、今朝から人一倍働いてますぜ。細君の病氣を心配しながらも、働くだけはちゃんと働いてゐるんです。いや、人一倍働いてるんです。それをこれからわづか四時間ばかり早く歸してやつたつて、早退けにするのはひど過ぎやしませんかね？」

「では、どうすればいいのだね？」

「わかつてるぢやありませんか。」と庄太はポイと指にはさんだ煙草を棄て、「今歸つてそれが早退けになるんなら、なにもあなたに願えせずとも、こつちの都合で勝手に出勤簿に時間を捺して貰つて歸ればいい譯です。さうさせたくないから、あなたに頭をさげて願え申してゐるんです。……なにか會社の外に用事を拵れてそれで門を出るつていふ風にして頂きてえのです。それでなきあ可哀さうですよ。ねえ、松山君は今朝つから人一倍働いてゐる。……すりやあ、もう今日は立派に一人

分の仕事をやつた譯ぢやありませんか。そこんところを考えて頂きてえんです。」

「僕は松山君に同情はしてゐる。しかし、會社の規定はどうすることもできない。また、僕は會社に對して嘘はいへない。」

靖也はキツパリ庄太の言ひ分を斥けた。

「……ふん、さうですかね！」と、庄太はベツと横へ唾を吐いて、「さうあなたが言つちまへば實も蓋もねえ話だ。……ふん、人のいふことを嫌にお疑えなさるくれえだから、嘘はいへねえと仰有るも無理はねえ。おい、松山君、早退けにして威張つて歸るがい！」

「なに僕は五時の退社時刻まで働くよ。そのほうがいよ。」

松山は周章ていつた。

「さうか……可哀さうだなあ！ こんな分らず屋の多い會社ぢやあしかたのねえことだ。へん、口先ばかりでなら誰だつて同情するつていつてやれらあ。へん、なんのこつた！……労働といふものがどんなもんだか、この會社の技師や重役にやあ分りやしねえんだ。」

「いや、わかつてゐる。——僕も労働者なのだ。」

靖也はさすがに腹を据ゑかねた。

「なんだと？」

「僕も労働者だ。この通り労働服をつけて働いてゐる。労働といふものがわからないといつて貰ひたくなう。」

「なにを、洒落つ臭えことをいやがんな！」

庄太は拳を固めて靖也に詰め寄つた。

すはとばかり、あたりは競ひ立つて見えた。松山も高橋も、仲に割つて入るほどの勇氣もなく、いたづらに傍観してゐるのみであつた。

そこへ伍長の田島が飛んで來た。

家に歸つて無言のまま座敷に入つた靖也は、ドツカリと、お加代のすゝめた座蒲團に坐つたが、なにか苦しく考へ込むやうに、空間の一點を見据ゑながら、身動きもしなかつた。

康子は買物に出かけたといふので、お加代がひとり靖也の洋服をぬぎかへさしたり、夕食の膳を整へたりした。

「今日は旦那さまのお好きな、鮎がございましたので……」と、お加代は勧めた。――が、靖也は、「あゝ、難有う。」と、唯うなづいたまゝ、箸を取らうともしなかつた。

お加代は、これまでに、かうして家へ歸るなり、黙つて考へ込む靖也を、屢々見たのであつた。食事することも忘れて、なにか一心に仕事の計畫に耽つてゐる靖也を、よく知つてゐる彼女は、別に今夜の彼の態度を、いぶかるでもなかつた。そしてこんな時に、こつちからまた何かいふと、煩ささうに叱られることもよく心得てゐるので、彼女は折角のフライが冷めるのを氣にしながらも、靜かにそこに控へてゐた。

ヂツと動かなかつた靖也は、ふとわれに返つて、お加代がゐることに氣がつくと、

「お加代、飯はひとりで食ふから、お前、ほかに用事があるなら、それをするがいゝよ。」

「は……でも、お給仕は……」

「なに、僕が勝手にやるからいい。」

「は……でも、いま召あがりますのなら、わたくし、お給仕を……」

靖也は黙つて茶椀を出した。

彼は砂でも嚙むやうに、飯を口に入れてフライをつゝいた。うまいともまづいともいはない。お茶をくれとも、ソースをかけるともいはない。彼は働き疲れた空腹をみたとはいふよりも、早くお加代をあちらにやりたいために、膳の物を片づけてゐるといふ風にも見えた。――軽く二度、椀をかへると、彼は箸を置いてしまつた。

「旦那さま……まだ二膳で……」

お加代は恐る／＼勸めて見た。

「あゝ、難有う。もうこれで腹一杯。」

口では難有うといつてゐるが、調子は甚だぶつきらぼうで、プツンと言葉尻を切つたまゝ、宵闇につままれて、見えもしない庭樹のはうへ眼をやつてゐる。

——お加代は膳をもつて、悄然とひきさがるより外はなかつた。

——十分、二十分——靖也は、柱にもたれるでもなく、そのまゝヂツと動かなかつた。

「……まだ、力が足りないのだ！」と、彼は低く歎じるやうに吐息した。「……まだ……まだ、僕の、人間としてのすべての力が足りないのだ！」

彼は今日、工場で、庄太と思はず争つた自分の姿を、われながら哀れとも、恥かしいとも、醜いとも見るやうに、壁にうつる自分の影を振りかへつた。

仕事の上に来る障碍——それが故意のものであらうと、避くべからざる當然のものであらうとも、「一つの道へ」の信念をもたねばならぬ筈の自分として、どうして唯、眞實と勇氣とによつて正しく進むことができなかつたのであらう？ 自分はこの信念によつて、天命にも悖らず、人事にも逆らはず、希望の彼岸に達し得ると思ひ込んでゐるではないか？ それが今日の自分はどうか？ 今日の自

分の、眞實と勇氣はどうか？ よし眞實に缺けてはゐなかつたにせよ、そこに、熱意を踏みはづした自己主張の感情に走つたものはなかつたか？ 仕事のために庄太と争つただけなら悔ゆるところはな

いが、そのほかに、勇氣をいたづらにした自制的ない興奮に似たものがありはしなかつたか？ どうして自分は、この眞實とこの勇氣とをもつて庄太の一人さへ服従せしめることができなかつたのか？

「……力が足りないのだ！ 人間としての力が……一つの道への信念が！」

靖也は、再び吐息した。

靜かに襖が開いた。

「旦那様、お風呂はいかゞでございます。ちやうどよく沸いてをりますが。」

良助が顔を出した。

靖也は振りかへつたが、

「あゝ、有難う。……さうだな。今夜はいゝにしよう。」

「お疲れのやうでございますし、それに工場の埃のまゝぢや、第一お心持が悪うございます。お入りなされたはうがよろしいと存じますか。」

「さうだな……」

「どこか、御氣分でもおわるいのでございますか？」

「いや、そんなことはない。」

「それでは、是非お入りなされたがようございます。」

「さうだな……」

「まあ爺はわるいことは申しませぬ。お入りなすつたら、御氣分がサツパリいたしますよ。それから御勉強なされますがようございます。」

「さうだな……」

靖也は動かうとしなかつた。

「ごめんくださいまし。」と、良助は、座敷に入つて来て、靖也のそばに畏まつた。「旦那様、お仕事は大分お進みでございますかな？」

「うむ……一生懸命にやつてゐるんだが、まだ三分の一にもいつてゐないのだ。」

「なにしろこんどの船は、前のよりもずつと大きなものだけに、なにかにつけて、お骨折りも大きなことゝ存じます。しかし、いよいよ出来あがつたら、それこそ旦那様の名譽になることで、それを思ふと、わたくし達も、心配のやうでもあるし嬉しいやうでもあるし、この頃は大奥様は申すまでもないこと、わたくしもお加代も毎日御出勤のあとでは、そのお噂ばかりして、御手柄なされるのをお祈り申してをるのでございます。」

「さうかね。有難う。いや、僕もきつと立派な船をつくつて見せるよ。……しかし、意氣込みばかりで、仕事はどうも豫定通りにいかないには閉口だ。」

靖也は淋しく笑つた。

「旦那様、それはなにごとにも、しかたのないことでございます。わたくしのやうな、毎日朝起きてお庭から門口のお掃除をして、植木鉢の手入れをして、夕方お風呂を沸すといふ、たつたこれだけの仕事でさへ、時とすると豫定のやうにはまゐらぬことがございます。まして大きな工場で、多勢の人を使つて、いろ／＼の機械の力を働かせてなさるむづかしいお仕事に、豫定が狂ふなどは、あたり前のことかと存じます。旦那様、そんなことにあまりお氣をお遣ひなされて、もしお身體にさはるやうなことがございましては、却つてお仕事に大きな支障ができると申しますもので、そこはもとよりお心にあることではございませうが、たゞ焦つてお氣疲れなさらぬやうに、ゆつくりお仕事を楽しんでおやりなされたがよろしうございます。」

「有難う。」

「お仕事がお大切だけに、お身體もお大切でございますよ。」

「うむ。さうだ。まつたくお前のいふとほりだ。」

「せめて工場から、家へお歸りなされた時だけでも、氣をおやすめなさつて、一日働きづめの手足に

すこしはお暇をおやりなさらなくちやなりません。

「そこでお風呂へ入れかね？ はゝゝ。」

「まったくそのとほりでございます。はゝゝゝゝ。」

「ぢや、良助の勧告に従つて風呂へ入るとするか。」

「それがよろしうございます。」と、良助はうれしげに、「さあ、すぐお入りなされませ。……お加代く。」

「はあい。」

臺所からお加代は走つて來た。

「旦那様が、お風呂にお入りなさるから、ちよつとお加減を見てくるがいゝ。ちやうどよかつたとは思ふが。」

「はゝ。」

お加代も、なにがなし嬉しげに、また足音も軽く縁づたひに湯殿のはうへ走つたが、すぐ、

「旦那様、ちやうどよろしうございます。どうぞ……」

と、暗い庭越しに、やゝはしやいだやうな聲で呼んだ。

x

x

靖也が湯殿に入つてゐる間、良助は臺所の土間から廻つて、罐の火を見た。いつものとほり、彼は靖也の背を流さうと思つて、外から聲をかけると、靖也は、今夜はちよつと入るだけだからと、内部の樞を開けようとはしなかつた。

良助は臺所へもどつて來た。

そこにお加代は、いかにも心配さうな顔をして立つてゐたが、彼を見ると駈け寄つて、

「お父つあん、旦那さまが……變だよ。」

といつた。

「變だ？ なにが變だ？」

「あの……わし、旦那さまが、お化粧部屋で、シャツをお脱ぎなされるところをちよつと見たら、右のお肩のところへかけて、赤く擦りむいたやうな腫れた傷ができてゐるんだよ。」

「なに、傷？ ふうむ……」良助は不審げに眼を見張つた。「今日工場で、なにか無理なことをなすつて、お怪我なされたのかも知れんな。それで旦那様は今夜は風呂をよさうと仰有つたのだな。わしはさうと知らんから、むやみにお風呂をお勧めしてゐるかつたな。」

「今日は、旦那さま、お顔の色もよくないやうだよ。それに御飯もあまり召しあがらんのなもの。」

お加代は膳を片づけながらいつた。

——靖也が、風呂からあがつて来たらしかった。

良助は、すぐ座敷へ行つた。

靖也は疲れたやうに、縁の柱にもたれてゐた。

「旦那様、いかゞでございましたか？」

「あゝ、いゝ湯だつた。氣持がすっかりよくなつた。やつぱり風呂へ入つたがよかつたよ。」

彼は笑つた。——しかし、そこに、なんだか笑ひきれぬ、淋しく苦しいものがあるやうだつた。

「旦那様……あなた、お怪我をなすつたのでございますね。」

「え？」

「いまお湯へお入りなされます時に、お加代が、旦那様のお肩に傷を見たと申しました。どうなされたのでございますか？」

「うむ、肩の傷か……」靖也は、ちよつと眼を閉ぢて黙つてゐたが、やがて思ひ入つたやうに、「良助、今日、僕は、工場で喧嘩をやらしたよ。はつはゝゝゝ。」

「へつ、喧嘩？……旦那様はそのやうなことはなさらぬ筈のお方でございますが……それは一體、どうなされた譯なのでございますか？」

良助は意外な面持をした。

「なに、喧嘩といつても、ちよつと仕事のことと興奮しただけなのだ。心配することはない。あとから考へて見れば、まるで子供のやうな、馬鹿々々しい唾み合ひなのだ。どうも僕はつまらんことに自分の感情を無駄使ひするからいけない。僕が悪かつたのだ。いまでは自分の心持を、をかしくも思ひ苦笑したくもなる。……ほんたうに仲愛のないことなのだ。はゝゝゝゝ。」

「しかし、一體、誰と喧嘩なすつたのでございますか？」

「それがね、僕の使つてゐる或る職工となのだ。だから馬鹿々々しいのだ。これが仕事の計畫とか、研究上のこととかで、大争論をやつたといふのなら、まだしも話し甲斐があるのだが、要するにたゞの喧嘩さ。どつちにも蟲のひどころが悪くつて、くだらんことを言ひあつたまでさ。お前達に心配をかけるやうなことならかくして置くが、實際、かくす必要もないやうなつまらん話なのだ。……だが阿母さんにはいつてくれないがいゝよ。無駄な氣遣ひをさせてはいけないから。」

「職工？ 旦那様、そんな者と喧嘩をなすつちま詰りません。御身分にかゝります。なんでも、そんな奴等には、こつちが堪忍してゐなくてははいけませんね。」

「だから、かうして自分を馬鹿々々しがりながら、苦笑してゐるのだよ。……まあ、こんな話はよさうよ。ほんたうに馬鹿々々しい話なのだ。」

「ですが、旦那様、そんな奴のことでございますから、これからまた、なにかに根をもつて、お仕事の邪魔になるやうなことはいたしませんでせうか？」

良助は、いよく心配らしく、膝の拳に力を入れた。

「なに、その男はそんな悪い人間ぢやないのだ。腹にたくみをもつたやうな男なら、あんなに喧嘩を吹っかけるやうなことはしないで、もつと陰險な他の方法をとるにちがひない。たゞ粗暴で、強がつてゐたいといふだけの男だ。……あんな男は實際は正直者なのだよ。」

靖也は却つて相手を辯解するやうにいつた。

「さうでございますか。それならまあ安心でございますけれど……」

「大丈夫だよ。心配することはない。僕はあの男によつて、ほんたうにいゝ教訓を得たやうに思ふ。

僕もこれから、僕のために働いてくれる人達に對して、或種の態度は變へねばならぬし、また一つの用心をせねばならぬことを感じた。この仕事を僕は僕一人の仕事だと思ひ過ぎてゐた。この仕事は僕一人の仕事でなくて、みんなの仕事なのだ。こんなわかりきつた點に氣づかなかつたことは、僕が愚かだつたのだ。しかし、大きな過ちを起さぬ前にかうして氣がついただけでも、今日の喧嘩は意義があつたよ。はゝゝゝゝ。」

「なるほど、大きにさうでございますか。」

良助は、はじめてホツとしたやうにいつた。

靖也は、しばらく考へてゐたが、

「……これを機会に、お前にもちよつと頼んで置きたいことがあるのだが……かうして仕事を進めてゆくについては、僕は東京から通ふことは、なにかにつけて不便だから、近いうちに横濱の工場の中の一室にすつと暮したいと思つてゐるのだよ。仕事が終るまでそこで勉強もするし計畫も立てる。いよいよ船の出來あがる時まで寝泊りすることになるかも知れない。その時には、お前にこの家のことを、よく願ひして置きたいのだ。」

「いや、そんなことをなさるやうでしたら、お役には立ちますまいが、わたくしなりお加代なりが、お身の廻りのお世話にまゐりたいと存じます。お家のはうは、わたくし達のどつちか一人がゐれば、大奥さまの御用に缺けることはいたしません。是非、さうさせて頂きたうございます。」

襖をすこしあけて、お加代が顔を出した。

「お父つあん、わしがゆくよ。わし、ゆきたいよ。」

「お加代か、聞いてゐたのか？」

「お父つあん、わしにゆかしてよ。わし、どんなことでもして、旦那さまに御不自由させないよ。」

「さうか……うむ、それもいゝな。」

「いや、難有う。なに、僕一人で澤山だ。しかし、場合によつては、横濱へ来て貰はなきやならんかも知れない。」

靖也はうれしく感謝した。

「わしをお使ひなすつて……」

「あゝ、お加代にも来て貰ふかも知れないよ。」

「わし、どんなことでもしますから……工場でも働けるならなにか働かして……」

「はゝゝ、お加代が工場で働く？」靖也は面白げに「お加代に何貫目もする鐵の棒が運べるかな？」

「わし、山で樹を切り出しに働いたことがありますから……わし、力が強いんだから……そんな鐵の棒位、わけなく背負つて運べる……」

お加代は思ひ込んだやうにいつてポツと顔をあからめた。

「さうかね。お加代がそんなに力が強いのなら、ひとつ手傳つて貰ふかな。」

靖也はじやうだんのやうに笑つた。

「どうぞ、わしを使つて見て……」

「そのかはり、あとで、仕事がつらいの苦しいのいつて、泣き出したりなんかしちやあ駄目だぜ。」

「わし、どんなことがあつても、その位の仕事ぢや泣き出したりなんぞしませんから……」

お加代は、一生懸命であつた。……仕事には泣かぬ代りに、仕事を断はられると泣き出しさうな表情が、彼女の眼にあつた。

そのひたすらな眞面目さに、靖也は良助と顔を見あはせて、ほんたうに他愛ない笑ひを笑ひ出したのであつた。

父 と 子

——それから工場では、別に事もなかつた。

伍長の田島が、それとなく靖也の用心棒といふ位置に立つて、なにか背後から眼をそゝいでゐるため、庄太は特別に荒つほい反抗的態度をとるやうなことはなかつた。彼はむやみな怠けかたをすることもできず、ただブツクサした不氣嫌な顔で、運轉臺で把手をにぎつてゐた。時々、頓狂らしく大きな聲で、なにか棄て鉢らしい鼻唄をうたうのであつたが、それに對して、靖也も田島もほかの職工も、言ひあはしたやうに知らぬ顔で聞き過してしまふので、彼は張り合ひぬけたやうに、その大聲に自分ながら馬鹿々々しくなつて、自然にやめてしまはなければならなかつた。

「……へん、馬鹿にしてやがら！」

庄太はグイと肩をゆすつた。

「これからちよつと船臺のはうへ行つて、もつとよく仕事のさまを見て来るが、お前今夜、例のところで會つてくれ。またすこしばかり相談があるから。」

「え、承知しました。」

「それでは、失敬するよ。七時半頃やつて来てくれ。いゝか。」

「えゝ、きつと行きます。」

「では、失敬。」

「左様なら。」

小宮は口早に低聲でわかれて、第三船臺のはうへ走つた。

そこには靖也が、鐵槌を振つて、元氣よく鐵材を撃つてゐた。

「やあ、君塚君！」

小宮は、すつかり他意のない快活な調子で聲をかけた。

靖也は振りむいた。

「おや、小宮君！……ようこそ。今日はどうして？」

「ちよつと限部の用務でやつて来たのさ。」

「あゝさうか。」

「どうもいつかのバルブとHセクションの取引上の齟齬以來、君の會社と僕の鐵工所とは、とかくに心持のこたはりが出てきて、お互の連絡が面白くないから、今日は一應の諒解を得るために、室田榮藏氏と會談しようとして来て譯なのさ。いま面會を申込んだら、來客と應接中なのださうで、その暇に君の仕事を見に来たのだが、なか／＼仕事がかどつてゐるのに驚嘆してゐるところなのだよ。」

「いや、どうも豫定通りに進まないで困つてゐる。」

「なに、さうではない。こゝまでゆけば充分だよ。どんな経験のある技師だつて、かう能率をあげるには、なか／＼骨なのだ。よつほど部下が君のためによく動いてゐるのだね。」

「あゝ、みんなよく働いてくれる點は、僕、心から感謝してゐるよ。」

「君の徳化だね。」

「徳化……？ いや、僕にそんな力はない。むしろ僕、みんなの熱心に勵まされてゐる形だよ。はゝゝ。」

「……かうして、すべての人間が心一つにして働いてゐるのを見ると、實に愉快だね。」と小宮は船臺を見あげながら五六歩あるいて、「こんな心持のいゝ仕事を見てゐると、僕もなんだか、一緒に働い

て見たくなるよ。君塚君、僕でお役に立つことなら、どんなことでもお手傳ひしたいな。」

「君にまでさういつて貰ふと、僕はまったく嬉しい。この方面では君は僕よりも多くの経験と研究を重ねてゐる人だ。是非また、なにかの知識を貸して貰ひたくも思ふし、いろいろ忠告を與へて頂きたいのだ。お願いするよ。」

「いや、さういはれると恐縮だ。君に知識を貸すの、忠告を與へるといふことはできないが、それでも、僕の微力でお間に合ふことなら、なんなりとやらせてくれたまへ。これはこつちからお願ひするのだ。」

「難有う。……まだ仕事はやつと三分の一だ。これからが骨なのだからね。なにかと教へを受けたい。ほんたうにお願ひする。」と、靖也は軽く頭をさげて、「……しかし、君の鐵工所と僕の會社とが、かうして妙な疎隔を見るやうになつたのは、なんといつても遺憾だね。」

「實際だよ君！——これは、たしかに隈部側にも手落ちがあつたのだ。いままで事業の交渉の任にあつてゐた清水といふ男が、すこしたちが悪くつてね。その男は今度鐵工所でも首にしてしまつたが、君の會社に迷惑をかけたばかりでなく、實は隈部にも悪辣なたくみを行つて、いろんな損害をかけてゐたことが曝露したのだ。今度から、僕が専らこの會社との交渉の責任を負つて、従來の不始末に對する賠償もしたいと考へてゐる。……まあ、今日はこれから室田さんに會つて、徹底的に諒解を

得たいと思つてゐるのだが、室田さんは君の叔父さんでもあるし、一つ、君からもなにぶんよろしくお口添へ願ひたいね。」

「室田氏は、僕の叔父さんにはちがひないのだが、この會社の門をくゞれば、室田氏は會社の重役、僕は一使用人としての技師なのだから、そんな話に僕が口添へなんてことはできないが、しかし、室田氏からなにかさうしたことに關係した話でも出たら、その時は、僕の意見として、君のいふところも、充分お話しして見よう。」

「いやそれで結構だ。なにぶんお願ひするよ。」

そこへ、機械工場の横を走りぬけて、本社のはうから給仕がやつて來た。

「小宮さんと仰有るのはあなたでございますか？」

「あ、僕、小宮です。」

「室田様が、お目にかゝると仰有いました。」

「あゝさうですか。」と、小宮は靖也を振り返つて、「では君塚君、失敬する。これから室田さんに會つて、種々懇談して見るつもりだが、なにぶん君……お願ひするよ。」

「あゝ、できるだけは……」

「ぢや、左様なら。そのうちまた君の仕事を拜見に來るよ。」

「どうぞ……や、左様なら。」

小宮は給仕に伴れて、鐵屑の小さな堆積を飛び越えながら、本社のはうへ足早やに進んで行つた。

——暗い廊下を通つて、重役室の前になると、給仕はドアをノックした。

「お入り。」

室内から聲があつた。

小宮は帽子をとつた。

「どうぞ……」

「や、難有う。」

彼は給仕に禮をいつて、靜かに入つて行つた。

書類を積み重ねた大きなデスクの前に、榮藏がやゝ氣むづかしげな面持で、彼を見迎へながら、

「生憎來客で、お待たせしました。さあ、どうぞお掛けください。」

「失禮いたします。」と小宮は頭をさげて椅子を占めながら、「御多用中をお伺ひいたしました……」

「いや……で、早速御用件を承はりませうかな。」

「はい、用件と申しますのは、御社と私の——隈部鐵工所との問題で……實は隈部棟吉の命をうけ

まして、本日ありがとうございましたわけでございます。」

「はあ、なるほど。」

「あの、バルプとHセクションの納入問題以來、どうも御社と隈部鐵工所との意志が、とかく圓滑を缺きまして、お互に面白くない立場にありますやうなことで、これでは折角今まで相提携してやつてまゐりました兩社に、單に利害關係の上からでなく、甚だ……」

「いや、大方そのやうな話でいらつしやつたことゝは思つておりました。」と、榮藏は軽く突つ放すやうに、「しかし、あの問題は、まだすこしも解決されてゐないので、まづその點から確實に具體的なあなたの方の處置を示して頂かない上は、要するに、いくら懇談するとしても、それは唯の話し合ひといふだけのことで、わたしの會社ではどうにも方法がつかない。あんな不良品を納入されて、そのまゝには濟まして置くことはできない。或はこれが訴訟事件をひき起すことになるかも知れないのです。

たとひ仲に立つた清水氏に罪が嫁せられたとしても、當會社ではどこまでも隈部鐵工所の責任を問はなければならぬのです。……一體、あの事以來、隈部氏の態度に、どうもわれ／＼の腑に落ちない點が多い。當方から再三の交渉を重ねたのに、いつも隈部氏は一時を糊塗するやうな煮え切らない御返事ばかりなるので、既に當會社としては一切を顧問辯護士の手に委任してしまつた譯なのです。」と

がりましたので……」

「なるほど、それは大變結構です。ではあの納入品を、全部そちらにお引き取りくださるやうお願いしたい。」

「それは……」と、小宮はちよつと相手の鼻息をうかがふやうに、「それは甚だ困ること……あの納入品全部が不良品だとは、隈部は考へて居りませんので……あの納入品のうち、十分の一は、御社と隈部との間に立つた男が、勝手に某所の製作品を混入してお渡ししたことで、全然隈部鐵工所の製作品ではなく、また、全然隈部鐵工所の關知しなかつたところで……」

「甚だ失敬な言葉だが、そんな話は、あまり子供だましに過ぎる。中に立つた清水氏なる人物は、今はその罪惡の名のもとに、誣首されたとき、なにといつても當時は隈部鐵工所員で、立派にそれを代表して來られたわけなのです。わたしのほうでは、それを清水氏一個人の行爲と見ることはできないのです。これはわかりきつたお話しやありませんか。」

「いや、それは一應御尤もです。しかし……」

「まあ、お待ちなさい。あなたは、あの納入品の十分の一が不良品だと言はれるが、當會社では、あの全部が不良品だつたことを認めてゐるのです。いつでもお目にかけるが、納入品全部はそつくりそのまゝ積み重ねて、使用しないのである。いや、使用するに耐へないものだから、使用しないで抛り出

してゐるのです。」

「納入品全部が不良品だと申されますと、當然隈部鐵工所の信用問題にかゝはることですが……」

「無論、信用問題に關する事だと思はれます。榮藏は極めて明瞭にいつた「あなたは兩社の關係に、圓滑な理解を得たいやうに仰有るが、圓滑な理解を得ようとするには、まづこの問題を一日も早く解決せられなくてはなりません。つまり納入品全部を引取つて頂くことです。——この點に、隈部氏はどうも面白からぬ態度を示してゐられる。自己の當然の責任を回避してゐられるやうに思ふ。當社から再三交渉申しあげたのに、いつも隈部氏の御返事は煮えきらない。煮えきらないどころか、或る時のごときは、むしろ挑戦的な言葉さへ發せられたやうである。だから當社としては止むを得ず、これを顧問辯護士の手に移してしまふことになつたのです。」

「いや、そこが今日御相談にあげりました點で……あなたは全部不良品だと仰有いますが、あの鐵材の質は、はじめから御註文の際、確とした口約が取りかはされてあつて、御指定の豫算に對しては、これだけの質のものより作れぬといふことを、鐵工所からも申しあげて、その御承認を得たことになつてゐるのでございますが……それが、あの、仲に立つた清水といふ男の……」

「清水といふ人物の名は仰有らぬはうがいい。なんといつても隈部鐵工所を代表しての交渉だつた以上、そこに、その人にどれほどの過失なり罪科なりがあつたとしても、わたしのほうでは隈部鐵工所

の責任として見るべきだと思ふ。清水といふ男の名を繰返されると、あなたが今かうして隈部鐵工所を代表して來られて、私とお話なされることも、無意味なことになりはしないですか。隈部氏はまた後日、他の人をよこされて、あれは小宮といふ男の話だからといはれるかも知れない。——あなたが隈部氏の意志を代表する、以上は、清水氏もまた隈部鐵工所の責任を代表するべき筈のものではないからうか。どうでせうな？」

「……はあ。」

理窟につまつたやうに、小宮は眼をバチ／＼させた。

「とにかくもう一度御相談なすつて、清水氏の過失とか罪科とかいふのではなく、隈部鐵工所の責任といふことにして、解決の一途を御考慮願ひたいのです。」

榮藏は嚴然と言ひ渡した。

「いや、それでは致し方ございません。」

「ふむ仕方がないと仰有ると？」

「わたくしのはうでは、従前の御交誼上、お互の信義を重んじて、いつも口約で仕事を取引をいたしてゐたのでございます。この點、或はわたくしの方に多少の不利はあるのですが、しかし、隈部鐵工所の威信にも關することでございますから、法律の手段によつて争はうと仰有るなら、それにお應じ

するよりほかはございません。」

「さうですか。それではこゝで、私とあなたの話は打切つて置ませう。」

「しかし、これまで相提携して來た兩社が、このまゝ反目しなければならぬ立場に立たなければならぬとは、實際お互に不利益の上の不利益でございますな。」

「いや、正しい利を得たい当社としては、かうしたことを不利益とは考へませんからな。はつはゝはゝゝゝ！」榮藏はまるで小宮を問題にしないやうに、軽く笑つてのけてしまつた。「……では、どうぞ隈部さんによろしく。」

「……はあ」

小宮は澁々、椅子から立ちあがらざるを得なかつた。

——設計部の宿直室の一つが空いてゐるので、靖也はそこを借ることにした。

トランク一つに寢臺一脚といふ簡素な生活がはじめられた。一日の仕事を終へて、自分の部屋へ歸ると、彼は手拭をブラさげながら、廣い鋼材置場を横切つて、鑄造工場の裏の、職工用の風呂に出かけた。汽罐の蒸氣をひいてあるので、湯はふんだんにあつて氣持がよかつた。そこで職工達に出會つ

て、元氣のいゝ鼻唄や、屈託のない世間話を聞くのも、生活が變つて面白かつた。午後七時頃にもなると、夜業の残りか宿直員しかゐないので、五萬坪といふこの大工場内は、晝間の騒音をひそめて、シーンと静まり返つてゐた。彼は一本の煙草を快くふかすと、すぐデスクによつて、明日の豫定を考へたり、またこんどの仕事を基礎に、英國留學時代の研究をまとめようとした。ノートや必要な参考書などがうづ高く床板の上に積み重ねられてあつた。

良助は二日おきにやつて來た。康子の心づくしの料理の蓋物や西洋菓子などが届けられた。洗濯物や家の用事や、ことに書齋への急用——突然必要を感じた書物の持ち運びなど、一切を彼は忠實にやつてのけた。洋文字の讀めぬ彼は、靖也が心おぼえのままに話す書棚のどの邊か、本の厚さはどんなだか、表紙の色はどんなだかをよく聞いて、ちやんとあやまたず探して來た。

「そのうちお加代もよこします。さぞ御不自由だらうと心配してをりますから。」と彼はいつた。

「あゝ、さうかね。まあ一度來るがよい。船を見せてやるから。」

と靖也は微笑しながらうなづいた。

「旦那様、わたくしにも旦那様の船を見せて頂きたうございますよ。」

「さうかね。ぢや、見せてあげよう。」

——靖也は自分の船臺へ良助をつれて行つて、夕闇の中に城樓のやうに巍然とそびえてゐる船體を指した。

「へえ！ 大きなものでございますな！」良助はたゞ驚いて、「こんなに大きな、こんなに立派なものとは思ひませんでしたよ。こんな大仕事は旦那様の頭一つできあがるんだから、えらいもんだ！ お家へ歸りまして、いゝお土産話ができました。」

彼は船の長さや費用や、どの位の人數がのせられるかといふことなど訊き立て、ひとりしきりに感心した。そして喜び勇んで歸つてゆくのであつた。

或る日、それは正午ちかくであつたが、靖也は事務室に用があつて出かけると、そこに、正門脇の守衛詰所のところに、辨當包みをかゝへた十二三ばかりの女の子が、なにかオド／＼したやうに立つてゐた。洗ひざらした木綿の袴を着て、薄よごれた手足をしてゐたが、顔は淋しいなかにも妙に人懐つこい、口もとの惻愴げなのが眼についた。

女の子は守衛に頭をさげて、門の中に走り入らうとした。

「おい／＼、お前は誰だ？」

と、髯だけはいかめしく扇狀に生やしてゐる老守衛が呼びとめた。

「あたい、お父ちゃんのお辨當持つて來たの。お父ちゃん、今朝、お辨當の出來るのがおそいつて、

怒つて會社へ出たんだもの。」

「お前のお父さんは、なんていふ名だ？」

「矢島庄太つてのよ。」

「矢島庄太？」と、守衛は札場の名札を調べて見て「うね、矢島庄太……それはいま、第三船臺に働いてゐる。」

「そこはどこ？ あたい行つて来るから。」

女の子は、また走り出さうとした。

「おい／＼、お前行かなくつてい／＼。こゝへ置いておけば、あとから序に届けてやる。」

「お父ちゃん、すぐ持つてかないと怒るんだもの。お正午までに持つてかないと、歸つて来てお母ちゃんをひどい目にあはせるんだもの。」

「……だから、すぐ届けてやるよ。」

「あたい、お父ちゃんにこれ渡して、それからお父ちゃんにお家まで送つて貰ふの。……だつて、この邊の子が、あたいの歸りを待ち伏せして、いぢめてやるつていふんだもの……」

「辨當はこつちで届けてやるよ。お前は場内へ入つちやいけない。……なに、もう歸つたつて、どこの子も待ち伏せなんかしてやしないよ。」

「いゝえ、みんな、あすこの塀の蔭にかくれて待つてんのよ。……だつて、みんなが、歸りにきつと待ち伏せしてやるつていつてるんだもの……」

女の子は今にも泣き出しさうな顔をした。

靖也はツカ／＼と歩み寄つた。

「あすこの塀の蔭に、子供がかくれてゐるんかね？ 小父さんが追つ拂つてやらう。」

「……あたいのあとからついて来て、石を投げたり、棒で背中を突つたりするんだもの……よその街の子は、黙つて通すことはならないつていふんだもの。」

「よし／＼、小父さんが行つて、そんなことをしないやうにいつてやらう。」

靖也は門を出て、板塀の角を曲つて見た。そこに、四五人の男の子が、意地悪るさうに目白押しながら、なにかまかせた流行唄をうたつてゐた。

「お前たち、弱い女の子をいぢめちやいけないよ。」

と、靖也はものやさしくいつた。

子供たちは、靖也をデロ／＼見て、互ひになにかコソ／＼耳つこすりをやつたが、

「なんにも、いぢめてやしないや。あの子が悪いんだ。あの子がおいら達の前を、馬鹿つ小僧やあいといつて逃げてゆきやつたんだ。」

と、なかでも一番身體の大きな、鼻のひしやげた男の子が、強ひて威張るやうに頭をつき出した。「さうだ、あの子が悪いんだ。女の癖に、おいらに馬鹿やいつていやがつたんだ。」他の一人が應じた。

「あの女の子が、お前たちの前でそんなことをいふ筈はない。あの女の子はお前たちがうしろから石をなげたり棒で突いたりしたといつたよ。」

「そりやあ、あの子が小父さんをだましてゐるんだ。おいらそんなことした覚えはねえや。黙つておとなしく通る子に、おいらなんにもするわけはねえや。」

鼻つびしやげの男の子は、理窟をこねた。

「……さうか、そんなら小父さんがあの女の子をよく叱つてやるから、お前たちあの子ひとりをいぢめるのは許しておやり。」

靖也は押しなだめるやうにいつた。

「……ふん、馬鹿にしてらあ。」と、男の子はひしやげた鼻を、不平らしくクフンと鳴らした。「あんな女の子に馬鹿にされて、おいら、黙つちやあゐられねえんだ。」

「さうだ。」
他の子供たちは同音に加勢した。

「だから、小父さんがあの子にかはつて、お謝罪してゐるのじやないか。許しておやり。男の子があんな女の子一人をいぢめるのは見つともない。……さあ、これをお前たちにあげるから、みんなで菓子でも買つてお食べ。そして、その代り、あの女の子をゆるしておやり。」

と、靖也は白銅二枚を掌にのせてさし出した。

子供たちは、互ひに顔を見あはせて、また耳つこすりはじめた。そして靖也の掌をデロ／＼のぞいてゐたが、鼻つびしやげの子が、いきなり黙つて白銅をつかんだかと思ふと、

「みんな行かうや！」

と、駆け出した。

他の子供たちも、バラ／＼とあとをついて逃げて行つた。

靖也は微笑しながらひつかへした。

「もういゝよ。男の子は、みんな小父さんがあつちへ行かしてしまつたから。」

「有難う。」

女の子は頭をさげて、嬉しげに上眼で靖也を見た。

「お前は矢島君の子供かね？」

「ええ。」

「なんといふ名なの？」

「おみきつていふの。」

「さう、おみきちやん。いゝ名だね。いくつなの？」

「十二。」

「學校へ行つてゐるのかね？」

「……………」

「え、學校はどここの學校？ 何年生？」

「……………」

おみきは、悲しげに眼を伏せてしまつた。

「大きにお世話だよ。」

うしろから怒鳴るやうにいふ者があつた。靖也は驚いて振りかへつた。反抗的に肩をゆすつて立つた。庄太の姿がそこにあつた。

「學校へ入れようといれまいと、誰の世話も受けねえ。くだらねえことを訊いて貰ひますめえ。」

「いや、このおみきちやんが餘り可愛いから、それでついいろいろなことを訊いたのだよ。」

「あんまり可愛い子でもありません。どうせ貧乏な労働者の子だ。道つばたに落ちた團栗かなんぞのやうに、乾からびて、人の靴の先に蹴られながら、一生を小さくイヂ／＼暮さなくつちやならねえ子なんだ。可愛いなんてお世辭には及びませんよ。」と、庄太は飽まで嫌味にいつて、おみきを睨めおろしながら「やい、辨當をこんなにおそく持つて来て、どうしやがるんだ。」

「だつて、あのう……………この邊の子があたいをいぢめようとしたんだもの……………あたい、だから、廻り道して来たんだもの……………」

「嘘をつけ、なにか道草食つて、どこかで遊んで来やがつたに違えねえ。」

「嘘ぢやない。ほんたうだよ。ほんたうだよ……………あたい、どんなに逃げ廻つても、どこまでもついて来て、いぢめようつてするんだもの……………この小父さんが知つてるよ……………この小父さんが、その子たちを追つ拂つてくれたんだもの。」

「いや、それはほんたうだよ、矢島君。」と靖也は引きうけて、「いま僕が、あすこの塀の蔭にかくれてゐる子供たちを、追ひかへしてやつたところなんだから。」

「へえい。それは御親切でございましたね。お禮申しますよ。」と、庄太は頭をさげるでもなくかういつたが、おみきにはなほ慳食に、「手前がいつもボヤ／＼あるいてゐるから、ほかの子に馬鹿にされるんだ。……………なんだ。すぐそんなに泣きつ面あしやがつて、だから駄目だつていふんだぞ。」

「だつて……」

「なにがだつてだ！」

庄太は手を伸して、おみきの肩をグンと突いた。

よろける彼女を靖也はさへへて、

「なにをするんだ。こんな小さな子を……亂暴ぢやあないか？」

「わたしの子供をわたしが叱るのだ。うつちやつて置いて貰はう。わたしの勝手だ。」

「なんぼう君の子だつて、亂暴はゆるされない。叱るなら叱つていい。無抵抗な者にそんな亂暴をする法はない。」

「無抵抗な者に……？」庄太はフンとうそぶいて、「無抵抗な者に亂暴する……わたし達は自分で始終この経験には馴らされてゐますがね。世の中にやあ富とか地位とかを振りまはして、わたし達を手も足も出ねえやうに痛めつける恐ろしい奴が澤山ゐるんだ。そんな人間の口から、こんな言葉あ聞きたくねえと思つてるんですよ。」

靖也は餘りの言ひ草に、ムツとしたが自ら制して、

「まあ、とにかく、お父さんとしての君に、せつかく辨當を持つて來たのだ。時間はすこしおくれでもゆるしてやりたまへ。」

「時間はおくれても、會社の規定の時間は嚴重ですからなあ。もうちき就業の警笛が鳴らあ。もう五分と時間がねえ。警笛が鳴りやあ、それこそこつちは無抵抗に腹をペコ／＼させながらも働かなかあならねえのだ。」

「いや、それは僕が承認さへすればいい。ゆつくり食つてくれたまへ。」

「あなたはいつかわたしの友達の松山が、嬢あが病氣で困つてゐるから休ませてくださるやうにつてお願えしても、會社の規定はどうすることもできないと仰有いましたかね。會社の規定に對して、嘘はいへないと仰有いましたかね。はゝゝゝゝ。」

庄太は兩腕を組んで、肩をそびやかすやうに笑つた。

靖也は黙らされた。

「え、君塚さん。あなたはわたし達に二枚舌を使つたんですか？」

庄太は傲然と詰め寄つた。

「——この、馬鹿野郎！」

突然、彼はうしろからかう罵られたかと思ふと、力まかせにグンと突き飛ばされた。さすがに不意を喰つて前のめりに倒れようとするのを辛くもこたへて立ち直ると、拳が飛んで、彼の頸筋をピンヤリと強く撃つた。

「な、何をするつ！ 誰だつ！」

怒つて振りかへる彼に、武者ぶりついた老人――

「……あ！ お前は！」

「貴様はこの顔を忘れとりやすまいな――この顔を！」

「お、良助！ どうしたのだ？」

靖也は叫んだ。

庄太は呆然として立つた。

「……お、父つあんぢやあねえか。」

「なにが父つあんだ。貴様の口から今更父つあんなどと、しら／＼しく呼ばして置きはしないぞ！

このお方はわしの大恩のある旦那様だ。さあ、このお方に指一本でもさして見ろ。貴様の手はヘン折られてしまふぞ！ さあ、もう一言なんともいつて見ろ。その息の根はとめられてしまふんだぞ！」

「良助！ どうしたのだ？ 良助！」

靖也は猛り立つ良助をさへながら庄太を見た。

釘づけされたやうに、庄太は黙つて動かなかつた。

「良助、まあ落ちついて……一體、どうしたのだ？」

「旦那様……面目次第もございませぬ……こいつは……こいつは……」

「……」

「こいつは……わたくしの……」

良助は喘ぐやうにいつた。涙がハラ／＼と彼の頬に流れた。

「君塚さん。これはわたしの親父なのです。」

庄太はいつた。

「なに、親父だ？ わしは貴様のやうな不孝者を、子とは思つちやをらんぞ！」

「……さうかね。」庄太は、強ひてまた傲然として、「子と思つてゐないなら、しかたのねえ話だ。は、い。」

「うぬ！」

良助は飛びかゝらうとした。

「まあ、待て、良助……」靖也は制して、「ぢや、矢島君はお前の息子さんだつたのか？ あの、むかし家出をしたつていふ息子さんだつたのか？」

「こんな不孝な奴……わたくしは自分の子だとは思ひはしません。」

「思はなけりやあ、思はねえがいいや。別にこつちから、思つてくださとお頼みしたわけぢやあね

え。」

「うぬ……」

「まあ、まあ待て……」と、靖也は良助を押しなだめながら、「矢島君、君が良助の息子さんだつたとは、實に不思議な縁だ。良助は僕の家にはズツと長く働いてゐる人だ。良助が君のお父さんなら、君の妹さんのお加代も僕の家に来てゐる。みんな仲よく楽しく暮してゐるのだ。僕はよく二人の口から、以前北海道にゐる時分に別れた息子さんなり兄さんなりの話を聞いたが、その人が僕の仕事のために働いてくれる君であらうとは夢にも知らなかつた。實に不思議な縁だ。奇遇だ。……まあ、良助も興奮してあんなことをいつてゐるが、それは一旦の怒りで、心の中は嬉しさと懐しさに、躍りあがるやうな思ひでゐるにちがひない。十幾年振りかの、實に不思議な、そして目出度い會遇に、ほんのその場限りの感情で、お互に氣まづく別れてはならない。これは君塚靖也が、個人としてのお願ひだ。どうか父として子としての、眞實の心持眞實のよろこびをよろこんでくれたまへ！」

おみきはひとり妙な顔をして、庄太の傍に寄つて良助のはうを見てゐた。靖也はその小さな手を取つた。

「さあ、矢島君！ 君は子だ。なんといつてもこの良助の息子さんなのだ。どうか君から折れて……」

そしてこのおみきちやんを、君の娘さん、良助にはじめて見せる可愛い孫娘として、君の口から名乗

らせてくれたまへ！」

「おゝ、この女の子が……」

良助は思はず両手を出した。

就業の警笛が鳴つた。

「や、もう時間だ。會社の規定には、わたし達は無抵抗だからな！」

庄太は、かういつたかと思ふと、パイと脊中をむけて、工場のはうへズン／＼歩いて行つた。

靖也と良助は、黙つて眼を見あはせた。

その夜、庄太の住居である狭い長屋の奥の家に、良助はお加代をつれてたづねて行つたのであつた。彼は靖也のいつた言葉のとほり、決して庄太を憎んでゐるのではなかつた。……庄太が傲然と立ち去つた時、彼はゆくりなく出會つたわが子に、むかしのまゝの左肩をあげて、心持ち首をつき出しながら歩く癖が、そのまゝまだ残つてゐるのを、なつかしいとも嬉しいとも、形容のつかぬ情に驅られつゝ、見送つてゐたのであつた。

——あんなに大きくなつた。家を飛び出して、どんな世渡りをしたか知らぬが逞しく健やかに育つて筋骨も立派に、眉も凛々しい一人前となつた。頼もしげな若者となつた。そしてあの惻愾な可愛い娘——どんな嫁をとつたか、その女にも會つて見たい。それから後の話も聞きたい。かうして父子と

も旦那のもとに働くといふ因縁は、實に奇しく深い。しかし庄太が旦那にそむいて、なにかに突つか、つてゆく男だとは知らなかつた。この點は憎い。憎いとはいふものゝ、これはきつと庄太が旦那の眞實の心を知らないでゐる結果にちがいない。幼い時から俐口さでは誰にも劣らなかつた。よく説いてきかせれば、そののわかない男ではない筈である。いや、きつとわかつてくれる。わしの口から話せばわかつてくれる。わしの顔を見た時の庄太の驚きと困惑には、たしかに或る恥と悔いの心持を混ぜてゐるやうに見えた。手にをへぬ、我武者羅な奴だつたが、なんといつてもわしの子だ。わしの正しい血は庄太にも通つてゐる。わしのもつ義理人情が、庄太の胸の底に動いてゐぬ筈はない。庄太に會つて話せばわかる。あの圖太さうに見える一本氣は、一旦わかってくれば、悪から善へ、邪から正へ、天地がへしにガラリと變つてくれるにちがひない。——話さう。話さなければならぬ。會つてわしが受けたすべての恩義を説いてきかせば、庄太にこれが聞きわけのつかぬことはない。そして、親子が一心同體になつて旦那様のために働けば、それこそどんなに楽しく、どんなに嬉しい日が來ることであらう。わしは決して庄太を悪い奴とは思はない。いや、庄太はわかる子だ。わからなければわしの力でわからせてやる。わしの眞實でわからせてやる。——話さう。話さなければならぬ。會つてすべてを話さなければならぬ。——

良助はキツと思案をきめた。彼は涙ながらに靖也に自分の心持をうちあけて、今夜にもお加代をつ

れて、是非もう一度庄太に會つて來たいと願つた。靖也は快くそれをゆるして、庄太がなにか自分への誤解があるやうだから、そこをよく話し合つて來てくれと頼んだ。——かうして父娘は早速支度して庄太の住居をさぐりあてたのであつた。

ちやうど夕飯をすましたばかりで、庄太はなほ膳の上の徳利を、飲みつゞけてゐるところであつたが、入口から、早くも涙にくもつた良助の聲をきくと、さすがにあわて、徳利をかくし、口をぬぐつておのづから居住を改めたのであつた。

「……わしは昨日あゝしてお前にわかれたが、どうしてもあのまゝお前にわかれることはできない。なんといつても……なんといつても、わしとお前とは親子だ。この鎖は、どんな斧でもたちきることではないのだ。……だからわしは來たのだ。庄太！ わしの心をよく察してくれ。今夜は、こゝにお前の妹のお加代もつれて來てゐる。お加代はいつも、どんなにお前のことを戀しがつてゐたことだらう？ どんなに會ひたがつてゐたことだらう？ ……庄太、わしは今夜、また東京からひつかへして來たのだ。お加代をつれて來たのだ。途中でお加代はどんなにお前のことをいつて、嬉しがつてゐたことだらう？ さあ、庄太！ 久しぶりだ。お加代に會つてやつてくれ。そしてまだちかづきにならないお前の嫁にも、改めてわしをひきあはせてくれ。わしはお前のことで、嫁に禮をいひたいのだ。」

良助の聲はふるへた。

庄太はなにかいはうとして、なにもいへなかつた。

「お父つあんでございますか。わたしは兼と申しまして、庄太の案内でございます。」
髪をいぼじり巻きにして、世話女房らしいお兼は、喉をつまらせるやうにいつて、庄太のうしろから頭をさげた。

「お、お前さんが庄太のおかみさんか。わたしは良助といつて庄太の父です。長いこと音信不通で、かうしてはじめて會ふのだが、庄太をいろ／＼面倒見てくださつて、ほんたうに難有くお禮いひますよ。」と、良助は柔和な眼で、お兼から、また庄太を見やりながら、「庄太、なんとかわしにいつてくれ。晝會つた時には、あゝしてお互に角立つた言葉もいひあつたが、わしは見つともないことをしたと思つてゐる。しかし、あんなことは親子の間でなんでもない話だ。今夜、かうして久しぶりに親子兄妹が會つたのだ。わしは嬉しさが先に立つて、氣がワクワク／＼してゐる。お前にも話があらう。わしはそれを聞きたい。また、わしにも話がある。それを聞いて貰ひたいのだ。なあ。なんといつてもわしとお前とは父と子だ。お前もきつとわしのやうに嬉しいにちがひあるまい。さあ、庄太。もつとわしの近くへ来てくれ。ほんたうに親子が十幾年振りかで、不思議にめぐり會つたのだ。いや、不思議ではない。親子の間には、神様がちやんとつないでくださつた、きづなといふものがある。このきづ

なを手繰寄つて、會ふべきものがかうして會つたのだ。不思議ではない。あたり前の話なのだ。どんなに遠く、どんなに長い間はなればなれになつてゐても、親子なら會はねばならぬ。これが切つても切れない縁といふものなのだ。……庄太。これを見てやつてくれ。このお加代を！ お前の妹のお加代を！ ……こんなに美しく大きくなつたのだ。」

「兄や！」

お加代は半叫んで、庄太の前に膝行り寄ると、犇と彼の手を握つた。

庄太の手は、かすかに震へた。

「兄や！ わし、お加代だよ。お前の妹のお加代だよ！」

「……………」

「お前さん。」と、お兼は前垂を眼にあてながら、「お前さん。なんとかか……なんとかいつてあげないの？」

「庄太、なぜ黙つてゐるのだ？」

良助は半身を伸ばすやうに、庄太の堅い表情を見あげた。

「父つあん……おれが……おれが悪かつた！ ゆるしてください！」

「お、庄太！」

「おれは父つあんに、すまねえことをいつた。ひでえことをいつた……」
庄太ははじめて胸にこたえて、グツと聲を呑んだ。

「兄や！」

「お、お加代。……す、すまなかつたなあ。ゆるしてくれ！」

「う、うれしい！ 兄や！」

お加代は、咽び入った。

お兼はたまらず壁のはうを向いて、突つぶしてしまつた。

そこに、涙のない眼はなかつた。

おみきだけが、最前から怪訝さうに、このめづらしい客の顔と、自分の父と母の顔とを、マヂく見くらべてゐるのであつたが、これもなんとなく、胸のせまるこの光景に感じ入つたか、オロ／＼涙を頬にこぼしたのであつた。

「お、可愛い子だ、可愛い子だ！ わしはお前のお爺ちゃんだよ！」

いじらしさに思はず手を出して、おみきを掻き抱く良助。

「さう……あたいのお爺ちゃん？ あたのお爺ちゃんができてうれしい。」

「うれしいか！」

「お爺ちゃんは、あたいを可愛がつてくれる？」

「可愛がつてやるとも！ 可愛がらなくつてどうするもんか！」

「あたひ、うれしい！」

「うれしいか！」

尊い感動にみちた啜り泣きの聲が、しばらく言葉のないこの狭い一間に續いたのであつた。

——やつぱり親子であつた！

かうして會つて見れば、庄太の眼にも涙が光る。よろこびの餘りの悲しみか、恥の極みの悔いか。

——いや、そこに理窟はない。ただ人間と人間との、去つて去れない、そむいてそむけない、心の底にたまつた涙なのである。相寄る魂の涙なのである。

お兼の手で再びとゝのへられた貧しい膳に、良助と庄太の盃はかはされた。

おみきは早くもお加代のそばへ来て、縁のこわれたボール函から、リボンや紙雛や豆繪本を出していつしよに面白げに遊んでゐる。盆の餅菓子をお兼もその仲間に加はつた。三人の間には、活動寫眞の話やら、縁日の話やら、もうそんな、のびやかな話題で賑かである。横濱生れのお兼が話す、七月の獨立祭の夜の外人の花火の美しさは、お加代の耳にはめづらしかつた。またお加代が話すアイヌの熊祭りの傳説は、お兼の耳にめづらしかつた。

良助と庄太の間には、いつしかシンミリと、別れて後の互ひの生活や境遇やらが、聞かれ聞かされ
た。

「……まあ、なんでもいゝ。お互ひにかうして無事でゐたのがなによりだ。」と、良助は盃を庄太に
さして、「しかし、庄太。これからはどうか君塚の旦那様のことを頼むよ。親子がかうして旦那様に使
はれてゐるといふのも、こりやあ深い因縁事だ。なあ、庄太。今までのことはしかたがない。過ぎた
ことだ。わしは今夜歸つたら、お前に代つてわしから旦那様によくお詫をして置く。なにも知らな
つたお前——そして、ほんの思ひがちがひで、あゝしたこじれた氣持をもつたお前——みんなわしから
旦那様に申しあげる。旦那様はお前を、腹にたくみをもつた男でなくて、實際は正直者なのだとい
てゐらつしやつたよ。つまり自分の力が足りないのだ。足りないからあゝして職工から反抗をうけた
のだ。却つていゝ教へをうけたといつてゐらつしやつたよ。……そんなお心の廣い旦那様だもの、わ
しがお詫すれば、きつとおよろこびなさにちがひない。……お前との喧嘩の話を旦那様から聞いた
時には、實に腹が立つた。できるならわしが工場へ出かけて、喧嘩の相手になつてやらうと思つ
た。それが、眞實の自分の子だつたとは、今日はじめてわしも知つて驚いたのだ。……このことだけ
はわしがお頼みだ。どうか明日から、旦那様のために、まごころをつくして働いてくれ。」

「いや、父つあん。そりやあ言ふまでもない話だ。」と、庄太はニッコと笑つた。「みんなわたしが悪か
つたのだ。實は、わたしは君塚さんが餘り工場の職工仲間評判がいいので、わたし一流のすねた心
から、妙に反抗して見たくなつたのがはじまりなんだよ。そこへ小宮といふ男が出て来て、うしろに
まわつてわたしを突つついたもんだから……」

「え、小宮？ ふむ、その小宮といふ男は、隈部鐵工所の技師をしてゐる人間ぢやないかね？」

「あ、父つあんはよく知つてゐますね。」

「知つてゐるどころぢやあない。あの男なら旦那様の大學校時分からの友達なのだが、かねがね悪い
奴だといふことは、聞いて知つてゐるのだ。その小宮がどうしてお前に？」

「父つあん。なにもかも懺悔してしまひますよ。」

と、庄太は、自分と小宮との關係を残らず説明してきかせた。そして、この點もどうかお詫びをし
てくれるやうにと頼んだ。

「ふうむ！ それでわかつた。いや、小宮といふ奴は、なんといふ憎い悪漢だらう？ ——あいつは
わしの子まで、そんな悪いことにそゝのかしくさつた。旦那様にも敵だが、わしのためにも敵だ！
畜生奴！」

「いや、父つあん。明日からは心を改めたこの庄太が、君塚の旦那の第一の味方になるのだから大丈
夫だ。もうあんな奴には、どんなたくみ一つやらせることはないから安心しておくれ。」

庄太は強さうな腕つ節をたゝいて笑ふのであつた。

良助はそれを、頼もしげに見やりながら、

「しかし、あんな悪賢い奴だから、この上油断しちやいけないぞ。お前といふ味方を失つても、またどんな悪い術を使ふかも知れない。どうか油断なく旦那様のお仕事をお守り申してあげてくれ。」

「なに、そこに心配はいりません。わたしもかう魂を入れかへた上は、どこまでも君塚の旦那のために、身を粉にしてもお盡ししなくつちやならない。そこは父つあん安心してください。また小宮がどんなたくみをしようと、わたしの眼が黒い間は、どうする隙も與へない。油断なく八方へ眼をくばつて旦那の仕事を立派に仕あげさせるから、ほんたうに心配しないでください。」

「いや、さういつて貰へば、わしは千人力を得たやうな氣がする。……ほんとうに、こんなに嬉しいことはない。庄太、頼む！」

「大丈夫！ 大丈夫！」庄太は笑つて盃を父にさした。「おい、お兼、お酌だ〜！」

お兼は膳のそばへ來た。

「お加代もこつちへ來い。」

庄太はいつた。

「はゝ。」

「なあ、父つあん。お加代も大きくなりましたね。」

「どうだ。いゝ娘になつたらう？」

「なか〜別嬪だ。」

「あれ、あんなことをいつて……」

お加代は顔を赤らめた。

「ほんたうに美しくつて可愛い。」

お兼も感心するやうにお加代を見た。

「あれ、姉やまでが……からかつて……」

「からかふのぢやあない。ほんとにいい縹緞だ。これだけの縹緞なら、どこのお嬢さんとくらべたつて恥かしくはない。……幾つになつたかな。」

「十九だよ。」と、良助がこたへた。

「十九……さうかな。」と、庄太はやゝ酔つた眼で、ヂツとお加代を見て、「早いものだな。わたしが家を飛び出した頃は、まだこの、おみき位の小さな女の子だつたが、あの頃から、お加代の眼は麓の牧場の羊のやうに可愛らしくまるくつて澄んでゐた。かうして髪かたちは變つてゐるが、むかしのまゝに瞳は美しく可愛いな。……おい、お加代。もつとこつちを向いて見な。」

「嫌！」

「は、は、は。まるで子供だ。」

「さうだよ。まるで子供でいけないよ。ちつとも世間を知らんでな。」

「十九といへば、もうぢきお嫁だ。」

「さうだよ。もうそろそろそのことも考へなくちやならんだよ。それなのに、かうしていつまでも子供なんだから困る。」

良助は樂しみさうに、お加代を見た。

みんなの眼があつまるので、お加代はいよ／＼顔を伏せて、

「嫌だ！ そんなにわしのはうばかり見ちや！」

「だつて、久しぶりでこんなに美しい妹に會つたので、おれは誰にも自慢したいやうな心持で見てるんだよ。……これからは君塚の旦那の仕事が出來あがるのも樂しいが、お加代にいゝ婿を探してやるのも樂しみだ。」

「わし、お嫁になんぞゆかない。」

「庄太。……お加代はお嫁の話になると、いつもあゝいつてブン／＼怒るのだよ。は、は、は。」

「今に、お加代がブン／＼怒らなくなるやうな、立派な婿さんを、兄やがさがしてやるよ。お加代が

一目見ると、是非あの人のお嫁さんになりたいといふ男を、兄やがさがしてやるよ。」

「そんな男……そんな男……ないのだからいゝ。」

「ないもんか。ひろい世間だ。その中から一人撰りぬくのだ。」

「わし、お嫁になんぞゆかないからいゝ。」

お加代はムキになつていつた。

それがをかしいので、みんな笑つた。

親子兄妹の水いらすの膳がはじまつた。

おみきはひとりではしやいで、お加代の膝からはなれなかつた。

すべてはたゞよろこびとよろこびであつた。小暗い、まづしい電燈さへ、今はこの五人の頭上に輝き渡る、満足らしい愛の圓光をひろげてゐるかに見えた。

物言はぬ瞳

昨日までとはまつたく別人のやうに、靖也のために懸命に働く庄太の姿は、工場の人々を驚かせた。事毎に、反抗と嘲笑の眼を光らす庄太の態度は、眞面目な職工達からは、どれほどか憎くきたなく思

はれてゐたのであつたが、庄太の猛々しい性質と腕力とに恐れて、伍長の田島以外には、敢て彼を眞向からやつつける者はなかつた。それがかうした急變を見たので、誰しもあまりに奇怪な感にうたれたのは無理もない。はじめのうちは、誰も庄太のこの熱誠のこもつた働き振りを、かへつて不氣味に思つた。あんな眞似をしてゐる裏に、なにかまた或る計畫がめぐらされてゐるのではないかとばかり不安な念をもつて、遠くからソツと眺めてゐる者もあつた。兇惡な獸が、餌の前で軽く眼を閉ぢながら、實はどこかゝら不意の襲撃を、あやまたず遂行しようかと考へてゐるやうな、妙に落つて見えてはゐられぬ氣持が、どの職工にも期せずしていだかれてあつた。

——が、一日二日三日と、日を重ねても、庄太の態度は、ますます眞實さを示すばかりで、他意のないものであることがわかつた時、誰も彼も、次第に庄太を信するやうになつてしまつた。そればかりか、庄太は、工場の人達に、みづから馴れ親しんで行つた。ともすると陰險らしく威嚇的に見えた彼の眉宇の曇りも、いまは跡なく拭ひとられて、飽まで律氣な眞體なあかるさがみなぎつて來た。彼は會ふ人ごとに、自分からさきに帽子の底に手をやつて、従順な挨拶をした。粗暴であつた言葉使ひさへ改まり、トゲ／＼した粗野な動作さへ、今は神妙に輕快に見えるのであつた。

朝、七時半の始業の警笛が鳴る前から、彼はちやんと部署に就いて、靖也の仕事の豫定を、すこしでも狂はせぬやうに働いた。

460

461

一時の仕事が終つて、靖也が設計部の宿直室に歸つた後も、彼はまだ居残つて、明日の仕事に豫定された鐵材の配置から印づけやりに、抜け目なく立ち廻つた。

良助とお加代は、一日おきに交替して、夜の宿直室を訪うた。その掃除や、紅茶道具や新聞雑誌の片づけものや、それからまた靖也の所要の買物、製圖器械の手入れなど、いろ／＼の雜用をやつた。

お加代は、夜おそくなると、庄太の家に行つて泊つた。

西片町の靖也の留守宅には、お加代が出勝ちで不便だらうからといふので、美知子が自分の家から下女のおきぬを連れて來た。當分その女が下働きをすることになつた。——母に不自由のないといふことが、靖也を安心させた。で、しまひには、お加代がすっかり庄太の家に寝泊りして、専ら夜の靖也の宿直室の用をすることになつた。彼女はかうして靖也のそばに、なんなりと用事をさせて貰ふことが、たい嬉しさうであつた。夜、おそくなるまで、紅茶を沸したり、菓子すゝめたり、また靖也がまとめつゝある研究の大型洋紙を綴ぢ合はせたり、自分の手でかなふ用向きはなんでもするので、靖也はデスクによつて本を読み、ノートをひろげ、ペンを動かしてゐさへすればよかつた。あまりおそくなると、工場から西戸部の庄太の家までの歸り道が、暗く淋しいところばかりだからと危ぶんでも、大丈夫だからといつて、彼女は靖也がベッドに横になるまでは、そこを出てゆかうとはしなかつた。

時とすると、靖也には、かへつて彼女がうるさいこともあつた。

「もういゝからお歸り。今夜はほかに用事はない。僕はひとりで靜かに勉強したはうが、ずつと仕事
がはかどるから。」

と、靖也にソツケなくいはれると、彼女は妙に悲しさに、

「わし、この通り黙つて、靜かにしてゐますから……」

と、部屋の隅の、靖也の眼につかぬところにうづくまつて、火鉢の炭一つ動かす音にも氣兼ねしな
がら、湯を冷さないやうに、いつでも紅茶がすゝめられるやうに、次の用事を待つてゐるのであつた。
彼女は靖也が仕事に倦んで、ちよつと伸びをする時にも、こんどはなにか用事をいひつけて貰へは
しまいかと、靖也の言葉の漏れるのを、どんなにか心待ちに待つたことであつた。

ヤンシヨイサ、

ヤサソラエー、

雇ひは神さま、

神さまならば、

親方神主ありがたや、

ヤンサノエー、

ヤサホイ〜。

或る時、庄太が働きながら唄つた鯨魚漁の唄が、調子が面白いといふので、今では第三船臺に大流
行になつた。

漁夫が櫂で水をうち、また船端をうちながら囃す元氣のいゝ拍子は、そのまゝ鐵槌を振りリズムに
ちやうどうまくあふのであつた。素朴な蕪雜なこの歌詞に、勞働する人間の使命と服従とが、強くま
ともにあらはれてゐるので、靖也はこの唄の聲を聞いたたびに、なんともいへぬ満足の微笑がうかぶの
であつた。——さうだ、人間の仕事は神への奉公だ。神に雇はれて神のために働くのだ。勞働の掟は
神への誓約なのだ。會社の社長重役は、神主なのだ。その命令は神への祝詞なのだ。淳樸な漁夫は、
理窟もなしに、雇ふは神で、親方は神主だとうたつてゐる。面白い。潔よい。

「さうだ理窟なしだ。理窟なしの服従だ。——そこに理窟なしの自由と福祉とが與へられる。勞働の
神聖だといふのは、こゝのことだ！」

彼はそこになんの屈托もなく、たゞ自分に與へられた仕事に働いてゐる多くの人々に眼をやつた。
初夏の太陽は、新らしく張りきつた光線をクワツと一面に飛ばしてゐる。

カーン！カーン！と、青空の底まで響けと撃ちかけ撃ち繼がる、鐵槌の音。そして、彼等は唄ふのである。

ヤンシヨイサ、

ヤサソラエー、

雇ひは神さま……

靖也は、なにがなし、眠頭のうるむをおぼえた。感激の涙の一滴が、思はず堅くにぎつた手の甲に落ちた。

「おい、松山君！この球板は、どこまで運へばいいのかね？」

移動起重機を運轉しながら、かう呼びかけたのは庄太であつた。

「さうだね船尾のとこまでいよ。」

松山は、腰をたきながらいつた。

「どうしたのだい。疲れたのか？」

「なあに、これ位に疲れるもんかね。」

「だつて、變に腰をたいてゐるぢやあないか。僕にできることなら、なんでも手傳ふぜ。」

「難有う。」

「煙草はどうだい？」

庄太はポケットからチェリーの函を出した。

「難有う。……一本貰ふかな。」と、松山は笑ひながら手を出して、「兄貴あ、煙草を貰つてやらないと怒るからな。」

松山は、いつかの庄太に、煙草で因縁をつけられたことを思ひ出したのであつた。

「おい。むかしのこたあよしてくれ。」

庄太も笑つた。

「矢島の兄い。僕にも一本や。」

と、横合ひから手をのばしたのは、大阪者の宮野であつた。

「そらよ。」

「……もう、一本や。」

「なんだ、宮野。お前一本一度に吸ふのかい？」

松山は、燐寸をすりながらいつた。

「いーや、一本は耳にはそんどく……豫備や。」

「こいつ慾ばつてやがら。そんならついでにもう二本貰へばいそない。」

「貰うても、ポケットに入れときや折れよるがな。」

「だからよ。一本を口にくはへて一本を右の耳に、一本を左の耳にはさんで、それからあと二本を鼻の孔に突つこんどきねえ。」

「阿呆いふな！」

「はーはーはー！」

松山と宮野は、互にからかひながら、また仕事のはうへ走つた。

庄太も思はず笑はされた。

靖也も傍から見つて笑つた。

「矢島君、ちや、僕が一本貰ふかな。」

「どうぞ。」

「天気が續いてくれるので、實に仕事には難有いよ。」

「さうですね。」と、庄太は運轉臺から下りて、「みんな、實によく働きますなあ。」

「ほんたうによく働いてくれる。みんなあゝして一生懸命なのだ。僕はなんといつて感謝していゝか言葉がない位だ。たゞ嬉しい。嬉しくつてたまらない。」

「進水式の日が待ち遠くてなりません。」

「この調子ぢやあ、きつと豫定通りにやれる。いや、豫定以上に早くできあがると思ふ。……なんといつても一致團結の力だ。仕事はみんなの心持がピッタリ一つになつて、箇々の責任が全體の責任といふところまでゆけば、完全に遂行される。すべての人々のために一人が働き、一人のためにすべての人々が働く——この責任感さへあれば、どんな大きな、どんな困難な仕事でも立派にできるのだ。僕の船臺に働いてゐる人たちは、今それを實行してゐるのだ。ほんたうに一致協力だ。みんなの心がピッタリ一つになることだ。一人でも仕事の調子に乗り切らぬ心をもつてゐると次第にその隙間から錆が出て来るものなのだ。そして錆といふものはほんのわづかでも、それはいつの間にか機械全體の動きをとめてしまふ大きな原因になつてしまふ。」

「まつたく仰有るとほりです。」庄太は悔いる上にも悔いるやうに、「それを思ふと、わたしはその錆を故意につくらうとした悪人でした。」

「いや、悪人なんて言葉をいつちやいけない。もうそんなことを思つてくれちや困る。僕が君に理解されなかつたから、あんなちぐはぐな氣持になつたのだ。かうなつて見りやあ、ほんの笑ひ話ですむことなのだ。いや、あゝした氣持を君に抱かせるやうにしたのは、僕にも罪がある。……まあ、こんなわかりきつた話は、そして忘れてしまつていゝ話は、もうお互に繰りかへすまいぢやないか。もう君は僕の第一の味方なんだから。」

「難有う存じます。わたしはこれから罪の償ひをするために、働いてお目にかけるよりほかにしかたがありません。」

「それでいゝのだ。そして……」

「……おや、お加代が誰か女の方と一緒にやつて來ます。」

庄太は指した。

「え？」

靖也は振りかへつた。——取付工場と火造工場の間をぬけて、すこし前にかしげた緑色の洋傘が、恥かしげに、また物めづらしげに、あたりを見る風にくごきながら、お加代に随つて、こつちへ歩んで來た。

見おほえのある傘である。……靖也はハツとした。

その時、傘の下から、のぞくやうに白い顔が彼を向いて、軽く會釋した。

「旦那さま。朝倉さまのお嬢さまをお連れ申しました。今日、わしがこつちへ來ようとしたら、お嬢さまも旦那様の船が見たいいつて仰有るから。」

と、お加代はいつた。

「しばらくお目にかゝりませんものですから……そして、いつもお仕事を見せて頂きたいと思つてゐ

たところなりましたから。」

と、美知子は頭をさげた。

「いや、よくゐらつしやいました。」

と、靖也も帽子をとつた。

「大層お健康さうにおなりなさいましたのね。」

美知子は微笑んだ。

「毎日かうして働いてゐますからね。日に焼けて、御覽の如くです。」

「結構でございますわ。」

工場には、めづらしい女の訪問客。船臺に働く多くの職工達の眼は、みんなそこへ集まつた。

美知子はそれに氣がついて、一旦すぼめた傘をひろげて、彼等の好奇にみちた眼からのがれた。

庄太もはじめてなので、怪訝な顔をして突つ立つてゐた。

靖也が氣がついて、

「矢島君、このお方は朝倉美知子さんといつて、僕の——お友達なのだ。美知子さん、この人は矢島

庄太君——お加代の兄さんなんです。」

「おや、さうでございましたか、どうぞよろしく。」

美知子は丁寧ていねいに挨拶あいさつした、

「はあ、わたくしは矢島庄太やしましんたと申す者もので……」

庄太しんたはあわて、頭あたまをさげた。

「兄にいや、わしいつもお嬢ぢやうさまによくして頂いたてるから……この襟えりもお嬢ぢやうさまから頂いたたんだから、よくお禮れいいつて……」

お加代かよはうしろからいつた。

「どうも、お加代かよがいろく……」

庄太しんたは、またあわて、頭あたまをさげた。

「……これが今度こんどおつくりになる船ふねなんでございますか？」

美知子みちこは靖也せいやに訊きいた。

「あ、さうです。どうぞ見てください。」

「ほんたうに大きなものでございますのね。えまるで戦争せんそうかなんぞのやうに、多勢おほせの人が働はたらいてゐますのね。勇ましいものでございますねえ。わたくし、かうしてこゝに立たつてゐましても、なんだか、かう、拳こぶしに力ちからがはいつてくるやうでございます。ほんたうに、人間にんげんの力ちからといふものを、見みせつけられるやうな氣持きもちがいたします。」

四方よしかたから響ひびく鐵槌てつちの音ねや穿孔くわく錐すいの音ねに、彼女かのじよは強い感かん激げきをうけたやうに、頬ほのあたりをポツと逆上さかさせながらいつた。

「ほんたうに、かうしたお仕事しごとを見ると、わたくし、男おとこに生なれて來こなかつたのが、口惜くやしいやうな氣きがいたしますわ。」

「さうですかね。」

靖也せいやは微笑びやうした。

「わたくし、ずつと拜見はいけんさせて頂いたきたいのでございますが。」

「あ、ぢやあ、御案内ごあんないませう。」

「お忙しいのに、御迷惑ごめいわくぢやございませんか知ら。なんならわたくしひとりで見物けんぶつさせて頂いたて、あとで、お暇ひまができましたら、いろんな御説明ごせつめいをして頂いたきたいのございますが。」

「なに、今いま、すこし手がすいてゐるところですから、御一緒ごしよに参まゐりませう。」

「女おんなが、はうばう吞氣のんきらしく見物けんぶつして、よろしいのございますか？ 御迷惑ごめいわくぢやございません？」

「なあに、かまひませんよ。僕ぼくに用事ようじができれば、そこで美知子みちこさんをおつ放はなり出だしてしまひます。」

靖也せいやは笑わらつた。

「まあ、それぢやあ、わたくし、ウロ／＼して、工場こうちやうの方に、邪魔じやまな女おんなだつて、叱しかり飛とばされてしま

ひますわ。さうしたらわたくしどうしませう？」

「ごめんなさい／＼つて、あやまるんですな。」

「まあ。子供のやうに。」

美知子も笑つた。

「ちやあ、御案内しませう。」

「どうぞ。」

彼等のそばを、長い鐵板を四五人でかついだ職工が、互ひに懸聲しながら通りすぎた。

「はい、ごめんなさい／＼。」

先頭の一人がいつた。そして靖也にちよつと目禮した。

美知子は驚いて身をよけた。

ちやうどその時、ちやうどこの言葉を聞いたのが、二人にはをかしかつた。

「はゝゝゝ。」

「ほゝゝゝ。」

互ひに眼を見あはせて笑つた。

「ちや、矢島君、この方を御案内してくるよ。」

「は……どうぞ。」

美知子は、また軽く庄太に會釋しながら、嬉しげに靖也のあとに隨つた。

——お加代は黙つて、取り残されたやうに立つてゐた。

「お加代、お前も一緒にいつてゆくがいゝぢやないか。」

庄太はいつた。

「えゝ……だけど……」

お加代は、船臺のはうへ肩をならべてあるいてゆく靖也と美知子の姿を、チラと見たが、そのまゝ頸垂れてしまつた。

「お嬢さんは、君塚の旦那さまは友人だと仰つたが、どうした御友人なのかね？」

「あのお方は、華族のお嬢さまなんだよ。旦那さまはあのお方を助けようとして、大怪我をなされて病院にお入りなされたことがあるのだよ。」

お加代は、去年のクリスマス晩に、靖也が自動車の衝突から蒙つた奇禍のことや、それから美知子が靖也の家に、よく訪ねて来るやうになつたことを、くはしく話した。

「さうか、なるほど、それでお友達なんか……しかし美しいお嬢さまだね。やつぱり華族様だけあつて品が高いし、氣質もおつとりしたところがある。」

「わし、あのお嬢さま好きだよ。やさしくてあんなにお美しうて、わし、ほんたうに好きだよ。」
「なに、美しいのではお前だつて負けないよ。これはわしの慾目ばかりぢやない。誰だつてさう思ふにちがひない。」

「あのお嬢さま、學問もおありなさるし、藝事もお裁縫もお料理も、おできなさるのだよ。うちの大奥さま、いつも感心なお方だ〜つて、ほめておいでなさるよ。」

さういつたお加代はなぜか淋しさうだつた。

「そりやあ、さうした家の大切なお嬢さまだもの、どんなにでも思ひどほりのことが習はれらあな。お前だつて、これからあのお嬢さまに、なんでも教へて頂くがいよ。」

「わし、なんにもできんから……わし、駄目だ……」

「自分で駄目だつていつちやあいけない。なんでも他人のできることお自分だつてできると思はなかつちやいけない。お前は山で生れた娘だから、東京に育つた女たちよりは、すつと心も客態も汚れちやゐない。そこがなんといつても、ほかの女には見られぬいよとこなんだ。あのお嬢さまも立派な美しいお方だが、お前だつて、人間としての立派さや美しさぢやあ、ヒケをとることあない。わしはどんな人の前でも、お前を自慢することができるのだ。」
「だつて、わし、駄目だ……」

お加代は、ソツと船臺のはうへ眼をやつた。彼等とは數十歩はなれたところで、靖也はなにか指さしながら、美知子に愉快げに説明してゐた。——美知子の傾げる洋傘に、兩人の胸から上はかくれてこつちからは、ちやうどピツタリ重なりあつてゐるやうに見えた。洋傘の影から靖也の指が動いた。に、軽くうなづいてゐるのか、美知子の洋傘も靜かに動いた。

庄太は、ホツとお加代の口から漏るゝ溜息に氣づいた。

「わし……駄目だ……」

彼女はつぶやくでもなく、ひとり同じ言葉をくりかへした。

「なに、駄目でない。お前は誰にも負けない美しい心をもつてゐる。美しい姿をもつてゐる。どうしてなにが駄目なのだ？」

「わし、なんにも知らんし、なんにもできんし、駄目だ……」

庄太は、またヂツとお加代の顔を見た。

「お加代。君塚の旦那は、あのお嬢さまを、よつほど好きでゐらつしやるのかね？」

「あのお嬢さま、誰だつて好きだよ。わしも好きだよ。」

「いゝや、お前はどうでも、君塚の旦那が特別になんか好きだといふやうな噂をなすつたことがあるかね？」

「べつにそんなことはない……だが、旦那さまだつて、あのお嬢さまをお好きにきまつてゐるよ。あのお嬢さまがうちにおいでなされると、いつも嬉しさに急いでお座敷にゐらつしやるんだもの。」
「さうかね。」庄太は或る思惑の眼で、お加代の表情を読み取らうとするやうに「あのお嬢さまは、旦那の奥様におなりなさる人ぢやないのかね？」
「えつ！」

お加代の顔には、あきらかに強い混乱があつた。いちばん聞きたくないこと、いちばん聞いて苦痛なこと、不意に圖星をさゝれたやうだつた。彼女の唇はかすかに震へた。彼女は力なくまた頸垂れてしまつた。

庄太には、はじめてお加代の或る大事な心持がわかるやうな気がした。

「……さうだつたのか……やつぱり、さうだつたのか……」

彼は黙つて、妹の姿を見た。「わし、駄目だ」と歎息した彼女の胸の中が、彼には今すつかりわかつた。——美知子と彼女——あまりに隔りのあり過ぎるひけめである。身分と教養と、あまりに比較がつかぬ過ぎる。

「さうだ……たしかに駄目なのだ。可哀さうだが駄目なのだ……」
庄太は傷ましげにお加代を見た。

お加代はなにか言はうとした。が、また黙つて、すがり寄るやうに兄の胸のボタンをいぢくつた。うるんだ瞳、物言はぬ苦しい瞳が、つらく恨めしく、ヂツと動かすひらかれてゐる。

庄太の右手は、慰めるやうに彼女の肩に置かれた。

「お加代、お前はくだらんことを考へちやいかんよ。お前がさうして可愛い心をもつてゐる間は、誰だつて、お前を好きになつてくれるのだ。お前の心を大事に守らなけりやいけない。さうすれば、今にお前はきつと仕合せになる。嬉しいことが来る。わしも父つあんも、もつとお前を仕合せにせずには置かない。お前はなんでもわしと父つあんにまかして、安心してゐるがい。他人を羨んだり自分の身を恨んだりしてはいけないぜ。人間はたゞヂツとなにごとも耐へて、自分の心と自分にきめられた運さへ待つてゐれば、きつといふことが身體にめぐつてくる。それをおとなしく待つのだ。……いゝかね？」

「……あゝ。」

「自分で駄目だなんて思ひ込んぢやいけないよ。」

「……あゝ。」

「……お前、君塚の旦那が好きか？」

「あゝ、好き。ほんたうに好き。」

お加代はあくまで無邪気で正直であつた。

「さうか……で、旦那だつてお前が好きだらう？」

「あゝ、いつも旦那さまは、お加代が好きだつていつてくださる。」

「それ御覽。そのとほりだ。お前を好きでない人は、どこにだつてない筈だ。それで充分ぢやあないか。旦那がさういつてくださるだけで、お前は難有いと満足してゐなくつちやいけない。」

「わし、いつも、旦那さまはいゝお方だと思つてゐる。難有いと思つてゐる。」

「それでいゝ、お前はたゞさう思つてゐればいゝ。わかつたかね？」

「……あゝ。」

それでもお加代は、やつぱり淋しさうだつた。彼女は強ひて笑へぬ笑ひを笑つた。

庄太も——なにか笑つた。

「兄や、お前、お仕事があるのぢやないかね？」

「うむ。さうだ。」と庄太は腕時計をちよつと見て、「三時まで、一つ片づけて置かにやらんものがある。」

「わし、こゝにゐるから、兄やお仕事をしてくるといゝ。」

「さうだね。ぢやあ、わしは仕事にかゝるから、お前は旦那とお嬢さまのそばへゆくがゝいゝ。」

「いや、わし、こゝに待つてゐるから。」

「……しかし、お前がお嬢さまのお伴をして來たんだらう？ そんならどこまでもお伴してあげなくちやいけない。さあ、早くゆくがゝいゝ。」

「……でも、わし、お邪魔になると思ふから……わし、こゝで待つてゐる。」

お加代の言葉は、精一杯の、恨みごとのやうにも庄太の耳に響いた。拗るとかフテるとか、そんな捻けた氣持は微塵もあるのではない。たゞ彼女は淋しくつらいのである。なぜか苦しくせつないのである。

庄太は仕事にかゝらうとして、二三歩ゆきかけた足をとめて、また哀れなこの妹のために、なにか元氣をつけてやらなければならなかつた。——事もなげに彼は笑つた。

「おい、お加代、早く行きなよ。旦那にまたどんな御用があるかも知れないよ。」

「あゝ……」

「今日はお嬢様のお伴だから、東京へ歸らなくちやならないのだらう？」

「あゝ……だけど……わし、旦那さまの夜の御用をお手傳ひしたいつて思つてるの。」

「しかし、お伴して來たんだから、さうしてはわるくはないかね。」

「……お嬢さまを停車場までお送りしときやいゝと思ふんだけど……」

「ふん、それもさうだな。しかし旦那はどう仰有るか、やつぱり一緒にお伴して歸れと仰有るかも知れないぜ。だから、いまのうちに旦那の御用をきいて置いて、できる事だけして置くといふと思ふ。まあ、早く行つて来るがいよ。」

「あゝ、では、さうしよう。」

お加代は船臺のはうへ走つて行つた。

庄太は再び運轉臺にのぼつて仕事にかゝつた。

彼は機械工場の前の、ひろい鋼材置場から、必要な山形鐵材を、移動起重機によつて迅速にこの船臺まで移すべく、幾回となくレールの上を運轉した。パツ／＼と勢ひよく機關に煙を吐かせながらシャツがベツトリ汗に、じむまで働き續けた。

その間にも、お加代の氣持——今日はじめて知ることのできたお加代の氣持について考へ續けるのであつた。

……戀か？……さうだ。たしかに戀だ。……それは哀れな、物言はぬ戀なのだ。叶はぬ戀なのだ。たゞひとりせつない胸に秘めて、誰にも慰められぬ苦しみを苦しんでゐる戀なのだ。あの山の娘の筋の心を、言ふには恥かしく恐ろしく、言はねばつらく恨めしく、かうして日毎を思ひ惱んでゐるのであらう。

庄太には、美知子が靖也に對する心持も、どうやらわかつてゐる氣がした。そこには單に尊敬とか友誼とかのほかに、それ以上の親しさ喜ばしさがあるやうである。それはあれだけの會話と動作とでハツキリわかつてゐる。お加代は可哀さうだ。だが、美知子とくらべて、餘りにみぢめな懸隔がある。どんなことだつて、兄として及ぶだけは盡してやりたい。力になつてやりたい。——が、かうした世間で、かうした社會の階級で、しかもかうした主従の關係なのである。——

「……わし、駄目だ……」

お加代の聲が、また彼の耳の底に、かすれるやうに響いた。

「駄目じゃないぞ！ お加代、わしがついてゐる。兄やがついてゐるぞ！」

彼は心の中で叫んだ。——が、それは、どうすることもできない叫びなのであつた。お加代がひとりの胸で苦しめば、それに對して、庄太もたゞひとりで叫ばなければならぬ叫びなのであつた。意地を張らうにも、こればかりはあまりに力が及ばなかつた。どうすることもできなかつた。

庄太はいたづらに、運轉臺の床を蹴つた。

——なほさら元氣づいたやうな靖也と、ボツと軽い興奮に臉のあたりを赤くそめた美知子と、そのうしろに、いよ／＼淋しく物言はぬ顔をうつむけたお加代とが戻つて來た。

「お忙しいなかを、ほんたうに御迷惑かけまして……」

美知子は改めて禮をのべた。

「いや、簡単な説明で、失敬しました。」と靖也は帽子の底に手をやつた。「なんでしたら、お茶でもおあげしたいのですが……僕の部屋には、紅茶位は沸かせるやうになつてゐますから。」

「いえ、どうぞそのまゝお仕事におかゝり遊ばして……わたくしはこれで失禮いたします。」

「さうですか、では、朝倉様にどうかよろしく。」

「歸りまして父や母にも、今日のお話をいたすつもりでございます。ほんたうに、どんなにかよろこぶことでございます。」

「では、失禮、さやうなら。」

庄太は運轉臺から飛びをりて、恭々しく頭をさげた。

「お歸りでございますか……さやうなら。」

「あ、さやうなら。」

「お加代、東京までお伴するのかね？」

「いゝえ、お嬢さまがいゝと仰有るから……それに、わし、今夜また旦那さまの御用があるから……」

お加代は誰にも應へるのでなく、自分ひとりにきめていふやうに、かう頑固にかぶりを振つたのであつた。

滑稽な幽霊

龍子はデレきつてゐた。

彼女の驕慢や放縦や、極端な我慾は、もう事の善悪とか正邪とかの目標を越えてゐた。自分の望むもの、求むるものがかなはなかつた時、すべてが呪はるべきであり、復讐さるべきであつた。彼女にはなんの反省もなく自制もなかつた。

絨氈に兩足をなげ出すやうに、ゐぎたなく椅子に凭りながら、自棄的な嘲笑をひとりで空間に投げつけて、痾走つた眼であたりをイラ／＼睨めまはしてゐるかと思ふと、ブイと立ちあがつて室内をあるき出した。窓際のテーブルから細巻きの巻煙草をつまんで、燐寸をすつて見たが、火つきがわるくてシユツと消えてしまふと、すぐデレて巻煙草を床に投げつけた。化粧臺の前に行つて、ちよつと鏡をのぞいて髪をなほさうとしたが櫛が妙にひつかゝつて、それがまた彼女の焦燥を二重にさせた。彼女は櫛を壁にたゝきつけ、おまけにその花瓶に挿れてある花まで掴み取つて、バラ／＼にたゝきつけた。

また椅子に歸つても、彼女はヂツと落つかなかつた。スリツバが、重ねた足さきから落ちて、それ

を穿かうとしてうまく引き寄せられなかつたり、帯の工合がわるくて脊に妙な皺を感じたりすると、チエツと舌打ちしながら立ちあがつて、また無性にチレた氣持でひとり癩癩を起してゐた。——身體の周圍にあるすべてのことが、なんでも思ひどほりにゆかないやうに、たゞブリ／＼怒つてゐた。

「お姉さま。おひとり？」

菊江がドアを開けて入つて來た。

見ればわかるぢやあないか！ といふふうには、龍子は黙つてゐた。

菊江はそんなことには氣がつかず、あたりを見まはしたが、

「あら、こんなところに櫛が折れて……あら、花がめちや／＼になつて……この花、わたしが今朝活けておいてあげたのに……まあ、どうしたのだらう？」

呆れたやうにいふのを、龍子は知らぬ顔にすまじきつてゐた。

「どうなすつたの？ お姉さま。またお頭痛？」

「……………」

「變ね。黙つてばかりゐて……この頃お姉さま、むやみに癩癩を起していらつしやるのね？ どうなすつたの？ なにがお氣に入らないの？ え、お姉さま……」

「……みんな氣に入らないのよ。」

「え？」と、菊江はびつくりしたやうに椅子のそばへ來て、「わたし、なにかお姉さまのお氣に入らないことをしたか知ら。」

「菊江さんはなんにもそんなことはないのよ。たゞ、かうしてゐると、眼に見るものも、耳に聞くものも、なんでもかでも、片つばしから氣に入らなくて、不愉快でたまらないのよ。第一、わたし自身が、わたしの氣に入らないのよ。」

龍子は自嘲的に笑つた。

「お姉さまがお姉さまに氣に入らない？」菊江はいよ／＼呆氣にとられて、「なんだかわけがわからないわ。それはどういふ意味なの？」

「つまり、わたしがかうして生きてゐることが——かうして生きてゐなくちやならないことが——氣に入らないのよ。」

「えつ？ 生きてゐることが氣に入らない？ ……變ね。それはわからないわ。それは一體どういふ意味なの？ え、お姉さま。」

「意味もなにもありはしないわ。さう思ふからさういふまでのことなのよ！」

「生きてゐることが氣に入らないつて、それは厭世家のいふことだわ。お姉さまのいふことぢやないわ。」

部龍子つていふ美しい奥様をもつてゐる人だといふ點で、わたしのお友達仲間では知られてゐる位な
んですもの……わたしだつて、あなたをお姉さまにもつてゐることを、どれ位誇りにしてゐるか知れ
ないわ。」

龍子は馬鹿々々しげに聞いてゐたが、

「さう。それは難有う。」

と、ニコリともせずにつた。

「だから、お姉さまが、その美しいお顔を氣に入らないつて、どう考へてもほんたうでないわ。」

「しかし、わたしには、つくづくこんな嫌な、面白くない顔はないと思へてゐるからしかたがない。

……菊江さん、美しさといふものは、それが一つの力である間は随分嬉しいもの、誇らしいものにち
がひはないのよ。だが、一旦それに力がないといふことがわかつた時には、結局それがくだらない厄
介物邪魔物であることになるわ。なんだい、こんな嫌な顔！　なんだい、こんなに下手糞にできた顔
！　といつてやりたくなるわ！」

「まあ！」

「……あゝあゝ！　なんだかつまらない。なんだか馬鹿々々しい！」

龍子はグンと後頭部を椅子につけた。

菊江は、いよ／＼呆氣にとられて立つてゐた。

しばらくして、彼女は、龍子の前に椅子をひきよせて、腰をおろした。そして、なにか言ひたげに
モチ／＼やつてゐたが、やがて思ひきつたやうに、

「お姉さま。あの……わたし、今日はほんたうに、お姉さまにお話もしたいし、御相談にも乗つて頂き
たいことがあるの。……姉さま、聞いてくださる？　……わたし、一生懸命に考へて、どうにも自分
ひとりで方法がつかなくなつたから、お姉さまにいゝ忠告者になつて頂かうと思つてやつて來たので
すけれど……」

龍子は黙つて、チロリと菊江を見た。菊江はたしかに彼女がいふとほり一生懸命らしく、

「ほんたうに、わたし、考へて考へて、考へぬいて、それでも自分ではどうしていゝかわからなくな
つたので、苦しくつてしょうがないから、お姉さまの智慧を借りに來たのよ。……ほんたうに、どう
考へても自分では、わけがわからなくなつてしまふばかりですもの。」

「ほゝゝ、菊江さんにも、わけがわからなくなつたことがあるの？」

「えゝ、その點はお姉さまと同じよ。」

「同病相憐れむすかね。ほゝゝ。」

「ほんたうにお姉さま。相談に乗つてくださいな。お願いですから。……わたしを……わたしを助け

てください。お姉さまの力で、わたしを救ってください。」
「どうしたことなの？ 菊さん。」

「え……」

菊江はちよつと言葉につまった。そしていたづらに膝の手をやりどころなく摺りあはせながら、またモチ／＼した。菊江の言ひ出したいと思ふ心持は、もちろん龍子にはわかりきつてゐたが、彼女はかうなると、からかひ半分に、知らぬ顔をして澄ましてゐた。

「……お姉さま。」

やがて菊江は思ひきつたやうにいつた。

「はい。」

「あら、はいだなんて、そんなに改まつてこつちを向いちゃ嫌だわ。」

「むづかしいのね。おや、どうすればいいの？」

「もつと樂に、もつと親身に、同情して聞いて頂きたいわ。」

「なか／＼御註文が多いのね。役者もこれおや大變だ。」龍子は笑ひながら「では……さあ、どうぞ。」

「嫌なお姉さま。急にわたしの顔を見なほしたりして……わたしなんだかさうされると、言ひたいことを言ひそびれてしまふわ。」

「ちや、あなたの顔を見ないことにして……」

龍子はわざと眼をつぶつた。

「お姉さま。わたし……わたし、ほんとうに、一生涯のことでお話があるので……」

「……え。」

「わたし、いろ／＼考へて、どうしてもお姉さまに味方なつて頂いて、それから、いろ／＼お姉さまにお力を借りたいと思つてゐるのですけど……」

「……え。」

「わたし、あの……結婚がしたいと思つてゐるの……」

「……え。」

「わたし、ほんたうに、あの方を愛してゐるのですの……」

「……え。」

「あら、お姉さま、まるで他人の話でも聞くやうに、平氣なお顔をしてゐらつしやるのね。」

菊江は恨めしげにいつた。

龍子はパツチリ眼をあげて、

「困るわね。わたしに顔を見るなといふから、かうして眼をつぶつて聞いてゐるのでせう。眼をつぶ

れば、あなたがどんな嬉しい顔をしてゐるのか、悲しい顔をしてゐるのか、わたしにはサツパリわからないから、自然に機械的に首を振つて返事をするよりほかないぢやないの。」

「わたし、どうしたらいいでせう……わたし困つた。」

「聞いてあげるわたしだつて困つてゐるわ。」

「わたし、ほんたうに、あの方を愛してゐるんだけど……あの方、わたしをどこまで愛してゐてくださるか知らず？」

「……………」

「どうでせう？ お姉さま。」

「……………」

「え、お姉さま。」

「……………」

「あら、黙つてゐらつしやるのね。それぢや、あんまり同情がないわ。」

「無理をいふ人ね、あの方つてどの方だか名もいはないで、勝手にひとりごと見たいなことをいつてわたしに同情がないのなんのつて責めるのは、菊江さんが無理だわ。急に謎をかけて、すぐその謎が解けないから同情がないつていふのは、そりや無理つていふものよ。」

「だつて……だつて、お姉さま。わたしの言葉で、大抵は察してくださいさる筈なのに。」

「そりやあ、あの方つていふ人が、わたしのお友達の、小宮徹郎つていふ人だつたら、すこしは話の見當もつきませんがね。」

龍子は、いさゝか嘲笑ふやうにいつた。

「それよ！ そのことなのよ……お姉さま。その小宮さんのことなのよ！」

「はあ、小宮さんのことなの？ そんなら今更らしく、そんなにグヂ／＼いふ必要はないぢやないの？ 菊江さんが小宮さんを愛してゐることは、わたしもうちゃんと知つてゐることぢやありませんか。……菊江さんが、急に事々しげにいひ出すから、わたし、小宮さんぢやないのかと思つた。ほかに、新しい愛人でもできて、それで改めて相談があるのかと思つた。」

「まあ、姉さま。自分が眞に愛する人つて、そんなにフイ／＼と變つたのができるわけではないわ。」

「さうですかね。」

あまり龍子の返事が亂暴なので、菊江はすっかり氣を抜かれて、黙つてしまつた。

龍子は笑つて、

「菊江さん。あなたは眞に愛する人つていつたが、眞の愛つていふものは、この世の中にあるものでせうか？」

「まあ！……ぢや、お姉さまは、ないつて仰有るの？」

「菊江さん。あなたは軽々しく眞の愛なんていふが、言葉でこそ、眞の愛といつても、その眞の愛つていふ本體は、どう説明ができるの？ わたし、ローシユフーコオ——十六世紀時代の佛蘭西の有名人な道徳家なのよ——支那ならば孔子とか孟子とかいつたやうな人なのよ——そのローシユフーコオつて人の言葉で、一つだけ記憶してゐる言葉があるの。それは、眞の愛つてもものは、幽霊見たいなもので、誰もこれを口に語らないものはないが、誰も實際にこれを見たものはないつていふ言葉なの。大變面白いと思つたから、ちやんと記憶してゐるの。するとその後、亞米利加の詩人、ジョージ・エチ・ポーカアつていふ人も、その詩に、愛人同士なんてものは、いつも彼等の間違ひ失策の個所にさまよつてゐる、二つの幽霊に過ぎない、とうたつてゐるのを讀んだことがある。おや／＼、同じことをいつてゐるなと思つたら、英吉利にゐる時、シェークスピアの芝居で、戀といふものは飛ぶ影にすぎない、追つても／＼駄目な掴めぬ幻影にすぎないつて、いつたやうな臺辭を聞いたことがあるの。……だから、眞の愛なんてものは、ほんたうは幽霊なのよ。わたし達がお互に言葉でいつてゐる愛は、實際は一つの滑稽な幽霊なのよ。馬鹿々々しい幻影なのよ。ほ／＼／＼。」

「……しかし、わたし……これこそほんたうの愛だと思つてゐるんだけど……」

「だから、さう思ふならさう思つてもいゝわ。ローシユフーコオがなんていはうが、シェークスピア

がなんていはうが、菊江さんは菊江さんの言葉として立派にさうした意義が確められてゐるのならいゝわ。たゞ眞の愛なんていふ言葉を、言葉以上に本體を突きとめようとするとうつと失望するから、ちよつと念を押しただけのことなのよ。」

「……え／＼……だけど、お姉さま……」

「わかつてよ。小宮さんをあなたが愛してゐることはわかつてよ。たゞそれを、滑稽な幽霊話位でいふのなら、わたしどんなにでもわたしの力で、菊江さんに加勢してあげるわ。しかし、あとになつて眞の愛はこんな筈ぢやなかつた。眞の愛はまだほかにありはしないかと悔いたり惑つたりされると、折角加勢してあげても、つまらない結果になるから、わたしの助力の仕甲斐がなくなるから、それにかうして駄目を押して置くだけのことなのよ。」

「しかし……わたし、あの方よりほかに、結婚したくないのですもの……」

「それはいゝわ。結婚したいつて希望はいゝわ。わたしどんなにでも話は進めてよ。たゞ、菊江さんが、眞の愛なんていつてゐると、そこによほどの危険が伴ふから、その用心をいまからして置くだけの話なのよ。」

「……え／＼……だけどわたし……あの方よりほかに愛する人はないのですもの……」

「まあ、御執心ね。小宮さんもこんな思はれる人があるとは果報者だわ。……では、わたし、二三

日うち小宮さんに會つて、あの人の心持を確かめて見ませう。きつと大よろこびするでせうよ。ほ
ゝゝ。」

龍子の笑ひには或る皮肉があつたが、菊江はそれには氣がつかないで、

「ほんたうにあの方、よろこんでくださるか知ら？ さうだとわたし嬉しいんだけど……お姉さま、
ほんたうにお願ひしてよ。どうかわたしを救つてください。その代り、わたしお姉さまの御命令なら
どんなことでもするわ。どんなお役にも立つわ。」

「さう、それは有難う。」

「ほんたうにどうか、お姉さま、よろしくお願ひいたします。」

「えゝ、大丈夫。」

「……小宮さんがよろこんでくだされば、わたしどんなに嬉しいだらう……ほんたうに小宮さんは、
わたしの心持を、よろこんで受入れてくださるか知ら……？」

菊江はやつと落ついたが、またひとりごとのやうに、かう心配するのであつた。

龍子は黙つて、また笑ひたさうな顔をしてゐた。

「……お姉さま……」

「え、なあに？」

「ほんたうに大丈夫でせうか……？ わたし、小宮さんに嫌だつていはれたらどうしよう？」

「そしたら、次の滑稽な幽霊をどこかの墓場から見つけて來るんだわ。」

「まあ！ ひどいわ！ お姉さま。」

「ほゝゝゝ。怒つちやいけない。戯談にいつたのよ。」

「戯談だつて、わたし一生懸命に、眞面目にお願ひしてるのですもの……わたしもし小宮さんに嫌だ
つていはれたら、わたし覺悟してることがあるんですもの……」

「覺悟？」

「えゝ。」

「どんな覺悟？」

まさか尼さんになるんぢやありませんまいね……と笑つてやりたい言葉を呑み込んで、龍子はわざと
驚いたやうに訊いた。

「そりやあ今こゝではいはないわ。でも、ちゃんと覺悟してゐることがあるの。」

「さう。」

「だからお姉さま、わたしの苦しい心に同情してくださいつて、どうかあの方に——小宮さんに、わた
しが感謝するやうな御返事を下さるやうに、あなたからよくお願ひしてください。……あゝ、わたし

かういつたけれど、心配だ。心配で心配でならない……」

菊江は落つけぬ風に椅子から立つて、室内をあるき出した。

龍子はケロリとした顔で、彼女の焦慮を見るでもなく見ぬでもなく、なにか口のなかに、英詩のやうなものを反誦してゐた。

菊江は壁際から、さつき龍子の投げつけた花の一つをつまみあげた。そして祈りごとでもするやうに、首を振りながら、花びらの一つ／＼をむしつて行つた。

「あら！ あら！ 諸だわ！ 諸だわ！」

飛びあがるやうに彼女は叫んだ。

「あゝ、びつくりした。なんなの？」

「お姉さま！ わたし今、花占をしたのよ！ さうしたら、否でなくて 諸でおしまひになつたわ。 諸！ まあ嬉しい！」

「ほゝゝ。この戀叶ふといふ譯ね。」

「えゝ、さうよ、さうよ。 諸なんですもの！ まあ嬉しい！」

菊江は指に残つた花びらを、ちよつと唇にあてゝ、大切に胸の内ポケットにしまひ込んだ。そして両手でそのうへを押へた。

「……ではどうぞ……お姉さま、お願ひしますわ。」

すつかり元氣になつた菊江は、さういつて頭をさげたとおぼしめし、躊躇るやうな歩調で、イソ／＼部屋を出て行つた。

ドアがしまつたあと、龍子はフ、ンと鼻先で笑ひながら、テーブルに手を伸して、巻煙草を一つかみ出した。

疑　　ひ

夜――

靖也はいつものとほり、設計部の宿直室で研究をまとめることに専心してゐた。

彼にはもとより單なる虚名への野心はなかつた。恩師の日比野博士から、博士論文といふ意味でなく、學界へ一つの貢献をすること奉仕をすることの意味で、是非留學當時の研究をまとめるやうにと忠告をうけたことが、彼の眞實な學徒としての心を刺戟したのであつた。彼はまだかうしたものを發表すべく、自分の知識も乏しく經驗も浅いことには氣づいてゐた。が、かうして習得し研鑽したものを、一つの報告として書いて置くには、今自分があらんかぎりの精神をうち込んで建造しつゝある第

二の雄康丸の完成するこの一箇年餘の日數の間の、緊張しきつた氣持の時が、もつとも適當であるやうに考へたのであつた。それで彼は書齋をこの造船所内にうつして、毎夜の課業をはじめることにしたのであつた。

一万二千噸級の貨客船——これはいまの自分には、或は大仕事すぎるかも知れない。しかし、自分の力を試すには實に屈強な仕事である。叔父の榮藏は、軍役會議で特にこの仕事に自分を推薦してくれたのだ。材料註文の約四箇月間、自分はあの奇禍のために病院に静養に暮してゐた。或は自分がこの健康を恢復しなかつたならば、この仕事は他の技師に振りむけられたかも知れないのである。いや、聞けば、この新造船の主任技師は、およそ或る技師にきめられてゐたさうである。それを特に自分の仕事として、かうまで素晴らしい晴れがましい力試しに振り向けてくれた榮藏の心事は、自分を飽くまで信じてくれたればこそである。第一の仕事に失敗して——（誰も自分の失敗だといつてくれぬが、自分はたしかに或る責任を感じてゐる）——失意絶望の淵に沈んでゐる自分に、捲土重來の意氣を示めせよと勵ましてくれる叔父の心に對しても、自分は必死の覺悟をもつてこの仕事に當面せねばならぬのである。また、船臺で骨身を惜しまず働いてくれる人々の心に對しても、自分は感謝しつくせないよろこびをもつて、立派にこの仕事を完成して見せねばならぬのである。そして僭越ながら、ひろく學界のためにも、自分の研究や體験を報告して、そこに、ほんの僅かな點でも貢献奉仕の實が擧

げられるなら、これにまさつた村懐はないのである！

建造日數を、彼は約十箇月と豫定した。五月から仕事にかゝつて、完成するのは來年の三月である。花も咲き鳥も唄ふといふ陽春を期して、めでたい進水式があげられる。そして自分の報告も、それま

ではなんとか是非まとめたい。まとめて日比野先生への、報恩の一つに呈したい。

靖也はたゞ、傍目もふらず、彼の「一つの道」に進んでゆくのであつた。
ノートや参考書をたどつて、彼が走らすペンは、一行々々彼の慎重な謙虚な報告の文字で埋められて行つた。

お加代は、毎夜のやうに十一時十二時ちかくまで、彼の部屋の間隙にうづくまつて、仕事の邪魔にならぬやう、また自分でできることなら、なんなりと手助けになりたいと祈りながら、黙つて控へてゐた。靖也がいよゝ熱中して、息もつまる位にデスクに乗りかゝつた時、彼女の息もおのづからつまつて來るのであつた。——靖也がペンを置く時、彼女もホツとして、紅茶の用意をするのであつた。

靖也の寢臺を整へて、庄太の家に歸る時、もしその夜の靖也の元氣がよければ、彼女の歩調も輕かつた。なにか難點にぶつつかつて、靖也の機嫌がよくなり、舌打しながらその夜の課程がうち切られた時、彼女は悲しげに、しよんぼりと足をひきずりながら、暗い造船所の門を出るのであつた。

——そして、今夜も、靖也の機嫌は悪かった。——

カラリと、彼はペンを投げ出した。

彼女はハッと、靖也を見た。

蹴るやうにデスクの脚に右足をぶつつけて、靖也はグツと椅子にもたれた。両手でむやみに髪をかきむしつて、つゞけさまに深い歎息をもらした。

「……旦那さま、お茶をお入れいたしませうか？」

彼女はオツ／＼いつて見た。

「うむ……」

靖也の返事は飲みたくもないやうであつた。

それでも彼女は手早く紅茶をついでさし出した。

靖也は一口飲んだなり茶碗を置いた。彼はデスクによるでもなく、また椅子に後頭部を投げ出して右手で額をたゝいた。

こんな時に、お頭が痛いのでございますかとかなんとか訊くと、きつと煩さがられるにきまつてゐる。お加代は、ものいひたい心持を押へて、黙つて遠くから見守るよりほかはなかつた。

「お加代。」

しばらくして、靖也はちよつと首をうしろにまげた。

「は……」

「?どうだ。こつちへおいで。すこし話をしようぢやないか。」

思ひがけない優しい言葉である。彼女は嬉しいといふよりも、ちよつと驚いた。——それから、やつぱり嬉しかつた。すぐデスクのそばへやつて來た。

「どうも今晚は蒸し暑いやうだ。そつちの窓もすつかり開けてしまつておくれ。」

「はい。」

彼女はガラ／＼と硝子戸を開けた。

二三日、雨氣をふくみながら、まだ一滴も落して來ぬ空の、厚く積んだ雲のどこかに月が潜つてゐるらしく、窓のそとに見らるゝ火造工場の一棟も、四五の桐の木も、材料陸上場の石垣を越して三角形に區切られた水面の一部も、みな錫箔を貼つけられたやうに、鈍い微光の中にしづまつてゐた。

彼女はデスクの脇の、ニスの剥けた曲木の椅子をチラと見た。そこへ腰をかけたかつた。そして五分でも十分でもいい、靖也になにか言葉をかけて貰つたら、どんなに嬉しいことだらうかと思つた。

——硝子戸を開けたまゝ、彼女はデツと立つてゐた。

「お加代、まあこゝへおかけ。」

靖也は、その椅子を指さしてくれた。

「はゝ。」

どうした有難いことであらう——彼女はこれだけでも涙ぐむほど嬉しかつた。が、かうなると、また不思議なほど、恥らひや氣おくれが來て、すぐ無態に椅子には近づけぬやうに思はれた。

眩しいものゝ前に出たやうに——それでも彼女はオツ／＼椅子に腰を下した。

「……旦那さま、今夜はよつほどお疲れのやうでございます。」
彼女はいつた。

「あゝ、すつかり疲れたよ。どうしたのか頭腦がボンヤリして、一向仕事に氣が乗らない。」

「毎日、朝からあゝ働いて、夜は夜でかう御勉強なされるのだから……ほかの人達はみんな晝間働いても、夜は家でゆつくり身體を休めてゐるから、あくる日はまた元氣が出るのでございます。……旦那さまはほんたうに無理なことをなさるだから……兄やも、いつでもそれを心配して居ります。」

「いや、これは僕の性分だからしかたがないよ。僕は仕事にかゝると、どうもやるだけのことをやつてしまはないと氣が落ちつかない人間なんだね。はゝゝ。……しかし、どうも今夜は頭腦がボンヤリしてゐる。まあお茶でも飲みながら、お加代の無邪氣な話でも聞かうかな。さうすればこの疲れた氣分がすつかりなほるかも知れない。」

お加代は、いよ／＼嬉しく靖也を見あげた。

「さあ、お加代、なんかお前の面白い話を聞かせておくれ。……山の話でもいい。また、なにかほかの話でもいい。お前の面白いと思つたことを、なんでもかまはず話しておくれ。」

「面白い話……わし、べつに面白い話ないのですけど……」
「なにかあるだらう。なにか思ひ出して御覽。」

「そんなに旦那さまに急かされると、どんな話がお氣に入るか、わし、わからないから……」

「僕の氣に入る入らないは考へなくつてもいいよ。そんな御機嫌取りを考へちやいけない。なんでも思つてゐることをいつて御覽。」

「思つてゐること……?」

お加代の眼は、妙に瞬きした。

「いや、これは僕がわるかつた。面白いと思つてゐる話をしると註文をつけたのがわるかつた。なんでもいゝのだ。お前の思つてゐることをなんでもいゝ、いつて聞かせて御覽。……面白いのがなけりやあ、反對に面白くないと思つたことでもいい。嬉しいと思つたことでもいい。悲しいと思つたことでもいい。なにか見たいと思つたことでも……食ひたいと思つたことでも……」
靖也は笑つた。

「まあ、わし、なんにも食ひたいと思つたことなんぞない……」
お加代は、靖也の笑ふのが恨めしかった。

「いや、どんなことでもいゝから、いつて御覽といふのだよ。山にゐた頃の思ひ出話でもいゝし、それでなけりや、今お前が考へてゐる話でもいゝし、それとも、これからさきに望んでゐる話でもいゝのだ。どんなことだつて、お前の無垢な心持にある、ありのまゝの話を聞けば、きつと僕は面白がるにちがひないのだ。」

「面白がる……旦那さま、わしが悲しい話をしたつて面白がるのでございますかね……」

「お加代もこの頃はちよつと理窟をいふやうになつたな。」と、靖也はその言葉すら面白がりたいやうな顔で、飲みさした紅茶をグツと乾しながら、「まあ、なんでもいゝぢやないか。悲しい話なら僕も悲しがつて聞くよ。きつとポロ／＼涙をこぼして聞くよ。はゝゝゝ。」

「旦那さま、ひとりで笑つてばかりゐて……わし、悲しい／＼話が一つあるんだけど……」
お加代はうつむいた。

「悲しい話？ 面白いな——ぢやなかつた。それは面白い話よりも聞きたい話だな。僕はまだ、お加代の口から、悲しい話なんか聞いたことがない。それでもいゝ、話して御覽。どんな話なんだ？ 山に傳はつた、悲しいメノコの話なんかね？」

「いゝえ、そんな話ぢやない……そんなことでなくて、……わし、今、ほんたうに……旦那さまが聞いてくださるなら、ほんたうに話したいことがあるんだけど……どんなに旦那さまに笑はれてもいゝ。ほんたうに聞いて頂きたいことがあるんだけど……」

「ほう！ そんな話があるのか！ それならばどこまでも、ほんたうに聞いてやるよ。話して御覽。どんなことだつて、まじめに、ほんたうの心持で聞いてあげよう。」

——しかし、靖也にはまだ好奇心に似た、呑気な心持はあつた。

お加代は顔をあげようとしたが、不思議に胸がせまつて、頸筋が痛くなるほど強ばるのを覺えた。
「なんだ。いつて御覽。……その悲しい話……？」

「どうしたのだ？」

「……」

「どうしたのだ？ なにを黙つてゐるのだ？」

「……」

靖也は驚いた。——お加代の膝の上に、ポタ／＼涙が落ちてはにじんである——

「おい、お加代、どうしたのだ？」

「え……」

「どうしたのだ？」

その時、ドアのそとで快活な靴の音がした。

「君塚君！」

「誰だ？」

「僕だよ。」

「え？」

「僕だよ。高柴だよ。」

靖也は椅子から立ちあがった。

「高柴君……？」

お加代はあはてし顔をかくしながら、室の隅へ走った。

ドアが開いた。

「お、高柴君か！」

「しばらく會はなかつたからね。會ひに来たのだよ。西片町のお宅へはちよくくお伺ひして阿母さんにお目にかゝつてゐるのだが、近頃は君はずつとこゝに立て籠つてゐるといふから、たうとうやつて来たのさ。晝間は忙がしいと思ふからかうして夜間突然の訪問をしたわけだ。」

高柴は遠慮なく入り込んで、デスクのわきの椅子を占めた。

「さうかね。有難う。わざわざよく来てくれた。」

「すつかり健康らしいな。また君塚一流の無理な勉強をしてゐると聞いたが、その顔色ならまあ安心だ。」

「難有う。健康は充分だ。」

お加代が紅茶を出した。

高柴は初めて心づいたやうに、

「や、お加代さんゐたのか。さつぱり氣がつかなかつた。君は毎晩こゝへ来て君塚君の手傳ひをしてゐるのださうだね。」

「わし、なんにもお手傳ひなんかできないんで……」

「高柴君、お加代はなか／＼よくしてくれるよ。僕の仕事のそばにゐて、製圖道具の手入れをしてくれたり、草稿を綴ちあはせてくれたり、お茶を用意してくれたり、よく氣をつけてくれるので難有いよ。」

「さうか、それは感心だ。……君塚君もかうして一生懸命なんだから、お前もできるだけ手傳つてあげるがいい。」

「……わし、なんにもできないんで……字一つ書けないし……」

お加代は悲しげであつた。

「は、字なんか書かけないでもいゝさ。君塚君の事は、僕だつてその意味では手傳へない仕事なんだからね。」

高柴は靖也と顔見あはせて笑つた。

しばらく兩人には心おきのない、愉快な會話が續いた。靖也はかうした仕事で溢つてゐる晩に高柴がフイとやつて来てくれたことは、どんなにか救はれたやうな気がした。いつの間にか彼の機嫌はなほつてゐた。煙草を高柴にすゝめながら、彼も思ふ存分煙を天井に吹きつけた。

お加代はまた室の片隅にうづくまつて、所在なげに紅茶道具を片づけた。……せつかくかうして旦那さまに久しぶりの優しい言葉をかけて貰つて、この嬉しさに自分も言ひたい一つのことがあるといふところまで聞いて頂いたのに……そして今夜の旦那さまは、たしかに自分の心の底にある苦しみを思ひきつてうちあけたら、きつとなにかこの上の優しい言葉で慰めてくださつたかも知れない旦那さまだつたのに……

彼女はなまけなく、たゞ遣る瀬なかつた。高柴が面白く話し、靖也が面白く聞けば聞くほど、彼女ははいよ／＼面白くなかつた。いや、それはどんなにか辛く恨めしいことであつた。——彼女はソツと

高柴がかけた、今までの自分の椅子を、果敢なげに見るのであつた。

「時に君、今夜は雑談ばかりでなく、大事な相談があつてやつて来たのだがね。」

と、高柴は指にはさんだ煙草を、忙しく灰皿に摺りつけながら、改まつたやうに椅子をひと揺り揺つて、デスクのはうへ近づけた。

「相談？」

「うむ、大事な相談なんだ。實は、昨日も今日もそのことで、君の阿母さんを御訪問したやうなわけなんだが……」

「なんだ。その大事な相談とは？」

「それは……」と、高柴はいひかけて、フトお加代の方を振りかへつたが「おい、お加代さん。僕はちよつと君塚君と内密な話があるんだがね。君、すまないが二十分ほどこゝを中座してくれないか。」

「は……？」

お加代には中座といふ意味が、ハッキリわからないらしかつた。

「中座——つまり、座をはずして貰ひたいのだ。ほんの十五分か二十分ほどでいゝ。この部屋から出て、そとにゐて貰ひたいのだ。」

「そとにゐるつて、この工場では別に行きどころもない。」と、靖也はお加代に同情して、「お加代、今

夜はもういゝから歸るがいゝ。そして明日の晩、また早くやつて来ておくれ。」

「はい……でも、お茶を……」

「いや、お茶なんか僕が出すよ。心配することはない。」

「……そして、お寢床をとつて行かにやならんから……」

「はゝゝゝ。寢床位僕がとるよ。大丈夫だ。」

「……でも……わし、やつぱり御用がございませうから……わし、そとに出て立つてをります。」

「いや、そとに出て立つてゐられちや困るな。君塚君が大丈夫だといふのだ。今夜はこれでお歸りよ。」

兄さんの家に泊つてゐるのだらう。毎晩おそく歸るのもなんだ。一晚ぐらゐ早く歸つて身體を休めるがいゝよ。」

高柴もいつた。

——さういはれるほど、お加代はなぜか歸りたくなかつた。このまゝ歸ることは、どうしても悲しいことであつた。

「わし、そこをあるいて來ますから……」

「こんな暗い夜を、工場の中をあるくなんて……」

「わし、ちつとも怖くはない。」

「いや、怖いといふのぢやない。つまらないといふのだ。」

「……でも……わし、やつぱり、そとでお話のすむまで待つてゐるから……」

靖也は、それ以上お加代を強ひなかつた。——それほど哀れなシヨンボリとした彼女の肩つきが彼の眼に映つたのであつた。

お加代は黙つて、うつむき勝にドアをあけた。ひきずるやうに靜かに廊下を去つてゆく彼女のスリツパの音が消えた時、高柴はいつた。

「あの女、なか／＼忠實だね。ほんたうに君のためにすこしでも働かうとしてゐるね。」

「うむ、實際難有いと思つてゐるよ。」

「……君の阿母さんは、今日も心配してゐられたが、あの女が、どうも君に盡す盡しやうが、唯ごとぢやないやうだといはれたが……?」

高柴は聲を落すやうに靖也の眉の氣はひを見た。

「阿母さんは、まだそんなことをいつてゐられるのかね。あの女を疑つちや可哀さうだよ。たゞあゝして純朴に僕に仕へてくれる女を、くだらない世間並の疑ひの眼で見てることは、あの女の清淨な心持に對してすまぬ氣がする。」

「さうかな。」

「さうだとも！ 疑つはならぬものを疑ふのは、疑ふはうの心がどんなに濁つてゐることかも知れな

So1

「君は阿母さんのお心持を濁つてゐるといふのかね？」

「いや、さうぢやあない。……だが、阿母さんがくだらぬことにまで、餘計な心配をすることは、どうも可笑しいのだよ。」

「しかし、僕だつても、ちよつとあの女の心を疑つてゐるんだよ。……どうもあの女は、君に戀してゐるのぢやないかと思ふのだ。戀でないとしても、とにかく、あの女の君に對する忠實さは戀に近いところまで進んでやしないかと思ふ。現に今の残り惜しげな出てゆきかたは……」

「はゝゝゝ。それは君が戯曲家だからだよ。」

「さうかな。さうだといゝんだが……」

「時に、大事な相談といふのはなんだね？」

「うむ、さうだ。大事な相談があつた——肝心な用向きがあつた。」

「なんだね？」

「君の、結婚問題についてなんだが。」

高柴は前の灰皿をのけて、腕をズツとデスクへ押し出した。

「え、結婚問題……？」

靖也は思はず身體を起した。

「時期が早い、まだその時でない——なんていふことは、まづ別の話にしてくれたまへ。それは後から君の意見を訊く時の返事にくれたまへ。」と、彼は言葉にシャンと區切りをつけて、「とにかく僕は今夜、一つの使命をもたらしたわけなんだよ。この使命は、勿論、君の阿母さんからの依頼もあるんだが、まだほかに、是非お願ひするとわざ／＼僕に頭をさげて、言葉を託されたお方もあるんだ。

……いや、そして、僕自身の心持も、この一つの使命のなかに入つてゐることなんだ……」

「……………」

「君塚君、君はあの伊豆山に轉地療養した時、僕に、美知子さんを愛するといつたね。」

「うむ……愛するといつた。」

「君は、君の最上の妻として、當然美知子さんのことを選ばなければならん筈だ。」

「……………」

靖也は強くうなづいた。

「だから僕は、君と美知子さんの結婚を勧めに来たのだ。……實は昨日、君の家へちよつと来てくれと電話があつたので行つて見ると、朝倉子爵夫人が来てゐられた。そして、その座で君の阿母さんと

夫人との話は、美知子さんと君の結婚問題だつたのだ。なんでも夫人のはうから、是非美知子さんを貰つて頂けまいかといふ相談が切り出されたのだ。さうだ阿母さんも非常なおよろこびで、それはこちらからお願ひしたい位に思つてゐたことなのだが、美知子さんはあの通り、地位、才力、性質、容貌と三拍子も四拍子もそろつた人だから、ほかからよい縁談が降るほどあるなかで、當方からお願ひするのは厚顔ましすぎると控へてゐたのだと應へられたさうだ。夫人は、これが子爵の希望であり、自分の希望であり、また美知子の希望であると述べられた。——いや、その希望は、また君の阿母さんの希望であり、かくいふ高柴元雄の希望であり、そして、もとより君自身の希望であることは確かだ。僕は嬉しかつた。自分のことのやうによるこんだ。あまり嬉しいので、あの伊豆山の君の口から聞いた言葉を、すつかりその場で公開してしまつた。すると夫人のよろこばれたことは！

「……あんなこと、君、いつてしまつたのか。」

靖也は弱つた顔をした。

「なにがあんなことだ？ まさにいふべき時だから、君に代つて僕がいつたのだ。夫人が君の心持を知りたいといはれたから、それはもう改めて君塚君に訊いて見るまでもない、僕が代つて明確にお答へします。——君塚君は、美知子さんを心から愛してゐますと、それから、君のあの時の思ひつめた言葉を、そして僕の祝福した言葉を、すつかり打明けてしまつたのだ。」

「……さうか。」

「勿論君に異存のありやうはないが、一應形式として僕が夫人なり阿母さんなりのお使者の役を引受けたのだ。そして今夜やつて來たのだ。……君は他分今は結婚の時でない、船が出來あがつてから後にして貰ひたいといふだらうと思つた。しかし夫人も阿母さんも話がきまればすぐにでも式をあげた位に思つてゐられる。その點だけの君の意見を今夜はたしかめに來たのだ、美知子さんと結婚したらどうだなど訊くのは今更、君の間違ひのないあの誓ひの言葉に對して、冒瀆だと思ふからね。」

「さうか、難有う！」靖也は靜かに頭をさげて「勿論僕はその結婚を希望してゐる。しかし結婚の時機は、今君がいつた通り、この仕事を完成した後のことゝしたい。」

「よろしい。君はきつとさういふだらうと思つた。だが婚約をすることはいゝだらうな。正式に結納をかはして置くことには異存ないだらうな？」

「それは異存はない。」

「よし。もうそれで僕の使命は濟んだ。これから君の友人の高柴としていふ。——お目出度う！」

「難有う。」

「明日僕は、阿母さんの代理をして、朝倉さんのお家へ結納を持つてゆくよ。明日は日柄がいゝのだ。昨夜、阿母さんと、ちゃんと手廻しよく曆を調べて置いたのだ。いふまでもないことだが、僕の復命を

聞かれたら、阿母さんはじめ朝倉氏夫妻も大満足だらう。美知子さんも大よろこびだらう。——や、お目出度うー」

高柴は靖也に握手を求めた。

ゴトリと、ドアによるめいて誰か軽く突きあたつたやうな音がした。

「おや、お加代さんが戻つて来たのかな。——お加代さんかね？」

高柴は呼んで見た。

——逃げ出すやうな足音が、廊下のはうでパタ／＼と聞えた。

……七月になつた。

靖也はこの頃のお加代の素振を、よほど可怪しいと思ひはじめた。

毎晩宿直室へ来て、彼の用事に氣をくばることは以前に變らないのであるが、どうしたのか妙に陰鬱に押黙つて、まるで釘づけされたやうに室の隅へうづくまつたまゝ、身動きもしないでゐる。以前は黙つてはゐるものゝ、靖也からなんとか言葉をかけて貰ふのを待ちかまへてゐたやうである。それは靖也にもよくわかつてゐた。なにか命じると、命じられたことが無暗に嬉しくて、急にイソ／＼と

き出すのであつた。それが、この頃では茶をおくれといつても、黙つて紅茶をソツとデスクに差し出したまゝ、すぐもとの隅へ歸つて、靖也の陰になるやうな暗い壁にもたれたまゝ、ヂツと深い、いつまでも沈黙に陥つてしまふのである。氣になるので、優しく「なにか話をしないか」と聲をかけてやつても、「えゝ」と尻ぎれな生返事をするばかりで、デスクのそばに來ようともしない。——そして、時間が來ると、黙つて寢床を整へて、「旦那さま、それではお休みなさいませ。」と頭をさげて、スツとドアを開けながら出て行つてしまふのである。

それに、彼女の、あの純情さをあらはしたあどけない顔も、近頃めつきり刺々しい陰影をもつて來た。なにも知らぬげに、あゝまで明るくまどかに開かれてゐたは眼は、魚油でもそゝがれたやうに、底冷たい靨ふやうな光を放つてゐる。それはたしかに、恨みとか憎みとかいつた心持とも見らるゝさまに、時々キラリと閃めく頬から願にかけた、ふくよかな潤味をもつた線は、今は削げたやうに角立つてボキ／＼したものに變つてゐる。——或る夜、仕事に疲れて、なに氣なしに椅子から振かへつた靖也は、壁際から鋭く自分のほうを見据ゑながら、血の出る位にキツと唇を噛んだ、妙に氣ぐんで凄しく感じられるお加代の表情さへ見たのであつた。

「どうしたのだ。お加代！」

さすがに靖也も咎めずにはゐられなかつた。

彼女は黙つて眼を伏せた。

「どうしたのだ？ ……此頃は變に考へ込んでばかりゐるやうぢやないか？ 身體の工合でも悪いのぢやないかね？」

「いゝえ……」

「お前は近頃、まったく妙に變つたやうだよ。ほんたうにどこか悪いにちがひない。どうだね、東京へ歸つてすこし身體を休ませて見ちや。」

靖也はどこまでも彼女に同情するやうにいつた。

「どうも變だ。まったく變だ。きつとお前はどこか悪いにちがひない。一度醫者に身體を診て貰ふがいゝよ。明日にも行つてよく診て貰ふがいゝよ。なんなら、この工場の醫者に頼んであげようか。」

「わし、どつても悪うはない。」

「いや、さうは思へない。この頃のお加代はまったく變だ。かうして毎晩の用事に氣を詰めてゐるので、すつかり身體と心を疲らせたのにちがひない。一種の神經衰弱といふやうなものかも知れないから、是非一度醫者にかゝるがい。」

「わし、ほんたうに、どつても悪いことはないから……」

「そんなことは、自分ではわからないよ。自分は元氣だ健康だと思つてゐても、人間はいつの間にか

よくない病氣に、とつつかれてゐることもあるのだ。明日はなんでも醫者に診て貰ふがいゝ。」

「わし、お醫者さま、嫌ひ……大嫌ひ……」

「困つた人だな。」と、靖也はやさしく微笑して、「お前は僕のいふことなら、今まではすぐ、はい／＼といつておとなしく聞いてゐたぢやないか。それをそんなに妙に頑固なことをいふのは、なんだか變だね。なにか僕に對して面白くないことでもあるのかね？ あればそれをいつて御覽。どうもこの頃のお前はすこし可怪しいよ。」

「……わし、なんにも面白くないことなんぞない……わし、旦那さまが好きだ……」

お加代は、突然、靖也への返事でもない言葉を、呟くやうに低くいつた。

靖也は、なぜかギョツとした。——今まで自分を好きだと率直にいつた言葉は、彼女の口から幾度となく聞いた筈だつた。しかし、そこには無垢な心の表白、あどけない氣持の不用意さがあつたが、今の彼女の調子には、形容のつかぬやうな、不思議に彼に襲ひ迫る力があつた。たとならぬ呪はしさを含んだ響きがあるやうにも思へた。

靖也は再びギョツとした。——壁に映つた彼女の影が、卓上電燈の傘の、薄青い絹の褶に漉された光りのせみでか、怪しい魔性のものゝやうに、ゆがんだ形に見えたのであつた。——それは、ほんの一瞬のことではあつたが——

——いや、そんなことはどうでもいゝ。お加代の態度の解しがたい變化ぐらゐはたゞ怪しいとばかりで棄てゝも置ける。が、こゝに棄てゝは置けぬ甚だ奇怪な一大事が、その翌朝發見された！

たしかにそれは、奇怪千萬な事件である。

靖也がいつものとほり、七時半の就業の警笛の鳴る前に、作業服と着かへて工場へ出かけると、いきなり伍長の田島が、妙に興奮した顔色をして、彼のそばへ飛んで來た。

「君塚さん。ちよつとお話があるんですが……」

田島は、お早うもいはないで、彼の耳にソツと私語くやうにいつた。

靖也は、すぐ、なにか容易ならぬ田島の氣色を感知した。

「なんだ。どういふ話だ？」

「實は……」田島はあたりを見廻すやうにして、「船に妙なことが起つてゐることを發見しましたので……」

……」

「妙なこと？」

「え、あの、船底栓が、ゆるめてあることを發見しましたので……」

田島は眉をひそめるとともに聲もひそめた。

靖也は驚いた。

「えつ、船底栓がゆるめてあるつ……？」

これはたしかに一大事である。船底栓がゆるめられてゐるといふことは、船の致命的な損傷である。そのまゝ氣づかないで海に浮べたら、船底から水が浸入してそれこそ取りかへしのつかぬ、破壊沈没をまぬかれないのである。田島が顔色を變へて飛んで來たのも無理はない話である。

「うむ。」と、靖也は急込みながら、「それは容易ならんことだが……あの箇所には僕も特別の注意を拂つてよく吟味して置いたつもりのだが……一體、どんな風にゆるめられてゐるんだね？」

「わたしは斷言します。これは誰かが故意にやつた仕事にちがひない。たしかに螺旋廻を使つてゆるめたと思はれる形跡があります。それで……」

「よし。」と、靖也は遮つて「僕が行つて調べて見る。……しかし田島君、このことは誰にも秘して置いて貰ひたい。でないと、船臺に働いてゐる人たちに或る不安を與へたり、心持になにか妙な動搖を與へることになる。これは君と僕との間だけの話にして置いて貰ひたい。」

「はあ、それは無論です。わたしもあなたのお耳にだけ入れて置いて、これから、それとなく注意してゐる積りでございます。」

「どうかそのやうに願ひするよ。」

靖也はかういひすてゝ、すぐ船臺のはうへ急いで行つた。

そこに働いてゐる職工たちに氣づかれぬやうに彼は船底を調べて見た。なるほど田島の言葉のとほり、船底栓に不可解なゆるみを見出した。たしかに螺旋廻を使つて、故意にこの船に障碍を與へようとした形跡があつた。

「これは恐ろしいことだ！一體かうしたことは誰の手によつて、またなんの目的があつて行はれたことなのだらう？……たしかに故意だ。仕事の手落ちとは思はれない。船の致命的な重大な部分だから、自分は特にこの部分には周到の注意と検査とを怠らなかつた。萬々こゝに遺漏のある筈はないのだ。自然でない、たしかに故意だ。故意だとすると……？」

靖也は深く考へながらあたりを見まはした。

そこには、彼のために、他意なく懸命に働いてゐる職工たちの、尊い顔ばかりがあつた。疑つてはならない人間の顔ばかりがあつた。

「さうだ。こゝにゐる誰一人も疑へない。間違つてもそんな心をもつては濟まぬわけだ……」

靖也は歩くともなしに、取付工場のところまで戻つて來た。

その亞鉛塀にもたれて、彼はヂツと、なほ深く考へ込んだ。

「……兄や、あのお船はいつ頃できてしまふの？」

「さうだね。十箇月の豫定だといふから、來年の二月か三月頃にはなるだらう。」

「來年の二月か三月……」

ふと、かうして男女の會話が靖也の耳に入つた。

それは塀の彼方で話し聲だつた。

靖也は妙に耳をそばだてた。

「……來年の二月か三月……」

女はまたひとり繰りかへすやうにいつた。

「みんなかうして氣をそろへて働いてゐるが、それより早くは出來まいと思ふ。しかし、おれにはその進水式の日が待ちどほしくてならないのだ。」

男の聲は元氣がよかつた。

女は急に黙り込んでしまつた。

靖也は彼等が、庄太とお加代であることを知つた。彼は塀の潜戸から、話しかけようかと思つた。

「が、次のお加代の言葉で、彼はちよつと足をとめた。」

「……わし、船が早うできんはうがい……」

まったく思ひがけない、不思議な言葉である。——庄太も驚いたらしく、

「え？……船が早くできないはうがい？……そりやあ一體どうしたわけなのだ。みんな旦那の

お仕事しごとが、一日いちにちも早く立派りっぱにできあがることを祈いのつてゐるのぢやないか？ ……をかしなことをいつちやいけないぜ。」

「……でも、わし、船ふねが早はやうできんはうがい。……船ふねが早はやうできたら……わし、どうしよう。」

「どうしよう？ いや、變へんなことをいふね。船ふねが早はやくできたら、なぜいけないのだ？ どうしてお前はそんな間違まちがつたことをいふのだ……」

「……………」

「おい、お加代かよ、なぜ黙だまつてゐる？ お前まへがそんなことをいふとは妙めづだよ。なぜそんなことをいふのだ？」

「……………」

「おい、どうしたのだ？ なぜ黙だまつてゐる？」

「……わし、船ふねができると……？」

「……………」

「船ふねができると……？」

「どうしたのだ？ 船ふねができると……どうなのだ？」

庄太しやうたの聲こゑは怪あやしんで問寄とまつた。

が、お加代かよは黙だまつて答こたへなかつた。

「……お加代かよ、お前まへはこの頃ころ、よつほど變へんだぜ。」やゝあつて庄太しやうたはいつた。「どうもこの一箇月いっかげつばかり、お前まへの様よう子すはおれの腑はらに落ちないことが多い。夜よる、家いへに歸かへつて來きても、いつものやうに旦那だんなの御ご勉強べんきやうのことなどを話はなして、明日あすのことを樂たのしみながら寝ねるぢやあなし。ひどく黙だまり込んで、浮うかぬ顔かほをしてばかりゐる。朝あさ、かうして旦那だんなの室むろを掃除さうじに來きる時ときなども、ちやんと前まへの晩ばんに旦那だんながお書かきになつた草稿さうかうを綴とぢ込んで、昨夜ゆうべは何枚なんまいお書かきになつた、お仕事しごとがよくはかどつてゐたから嬉うれしいなどと、おれにいつて聞きかせてはよろこんでゐた癖くせに、この頃はまるでそんな話はなもしない。……お前まへは、旦那だんなのお仕事しごとの進すすむのを、自分じぶんのこのやうに樂たのしみにしてゐたのぢやないか？ そして船ふねのできあがる日ひには、どんなことがあつても、父ちちつあんと一緒に見物けんぶつに來きるのだと、そればかり樂たのしみにしてゐたのぢやないか？ ……それを急にこんな變へんなことを云いひ出すとは、どうもおれにはわからない。ほんたうに、どうしたつていふのだ？ なぜそんな縁起えんぎでもないことをいふのだ？ ……おれだからいゝが、こんなことが旦那だんなのお耳みみにはひると、お加代かよは飛とんでもない不吉ふきちなことをいふ奴やつだと、どんなにお氣きに觸さわるかも知しれないぜ。氣きをつけなくつちやいけない。」

「……………」

「いゝかね。……誰だれもゐないからいゝが、この工場こうばで、そんなをかした言葉ことばを使つかつちやならないぞ。」

「……あゝ。」

お加代は幽かにうなづいたらしかつた。
しばらく話が途切れた。

ヤンシヨイサ

ヤサソラエー

雇ひは神さま

神さまならば

親方神主ありがたや……

船臺のはうから、例の勇ましい唄の聲が聞えた。

「兄や、ありや、鯨魚漁の唄ぢやないか？」

「あゝ、さうだよ。おれが流行らせたのだ。おれが一度唄つたら、みんなが面白い唄だといつて、あして誰も唄ふやうになつたのだ。」

庄太は笑つた。

「……さうかね……」

「あの唄を威勢よく唄つて、一日も早く立派に船をつくりあげたいと思ひながら、みんな一生懸命に

働いてゐるのだよ。」

「……わしばかり……わしひとりだけ船が早うできんやうにと思ふてゐるのだね。」

お加代の聲は沈んでゐた。

「おい、お加代……なぜまたそんなことを思ふのだ？ お前は誰よりもそんなことを思はない人間でなけりやならん筈だのに……なぜそんなことをいふのだ？」

「……………」

「……え、なぜ、そんな……」庄太は聲を呑み込むやうにして、「なぜそんな嫌な恐ろしいことをいふ？ ……お前はなにか考へちがひしてゐるらしいな。さあ、おれにすつかりいつてくれ。お前の心のなかに、今どんなことを考へてゐるのか、すつかりそれをいつてくれ。」

「……………」

「なにをそんなに黙つてゐる？ 兄やには、なんでもうちあけられ筈だ。さあ、いつて聞かせてくれ。」

庄太は強くやさしく問ひつめるのであつた。

塀のこなたで、靖也も思はず耳を澄した。

「……わし、あの……………」

「うむ。」

「……わし、あの……船ができると……」

「うむ。船ができると……？」

「……船が……できると……」

お加代の聲は悲しくかすれた。

「うむ。船ができると……？」

「……船ができると、旦那さま、お嫁さまをお貰ひなさるつていふから……」

「……？」

「……それで……」

聲は低く途切れてしまった。

庄太はなにかいほうとしたやうだつた。が、咽喉がつかまつたやうに、「ウツ」と息をひいた。

靖也も思はず息をひいた。

なにか、シク／＼す／＼泣きするやうな聲が漏れた。

「はつは、うむ、うむ！」庄太は急に、取つてつけたやうに笑ひ出した。「なにをいふのだ？ 君塚の旦那

がお嫁をお迎へになるからだつて？ そんなこと……そんなことが、どうしてわかる？ 旦那はまだ

まだいる／＼の仕事をなさらなきやならん人だ。旦那は今、この仕事で一生懸命なのだ。そんな……そんなお嫁のことなんか、考へてゐらつしやる暇があるもんか……」

「いゝえ、それはわかつてゐる。きつとお嫁さまをお貰ひなさるのだよ。わし、それをよく知つてゐる……」

「どうして、そんなことを知つたのだね？」

「わし、それを聞いたの……聞いちや悪いお話なんだつたが、わし、悪いと知りながら、その話をみんな聞いてしまつたの……」

お加代は途切れ／＼に、高柴がやつて来た夜の話を話した。

「……さうか」と、庄太は空唾を呑んで、「……しかし、旦那がお嫁をお迎へになつたつて、それはいゝことぢやないか？ え、ちつとも羨しいことぢやない。お前だつていゝところへお嫁にゆけるよ。

この兄やが、きつといゝところへお嫁にやつてやるよ。」

「わし、お嫁になんぞゆかない。」

「は、うむ、うむ。まだ子供見たいなことをいつてるね、お前は……」

「わし、お嫁になんぞゆかない。……いつまでも、旦那さまのお仕事を手傳ふのだよ。」

「さうか……いつまでも旦那のお仕事を手傳ひするつもりなのか……そんならそれでいゝぢやあな

いか。まあ、たとひ奥様がおいでなさるにしても、お前はお前の眞心で旦那のお役に立つのだから。きつと奥様におなりなさる方も、およろこびにちがひない。え、さうぢやあないか？」

「……………」

「まあ、いろんなことは考へないはうがいよ。お前はお前だけの眞心をつくせばいいのだ。」

「……………」

「奥様がいらつしやつても、お前の眞心を旦那が受けてくださらないことはあるまい。奥様も旦那に、奥様としての眞心をおつくしなさる。お前はお前としての眞心をつくす。そこには別の意味があるから、旦那がそれをよるこんでお受けなさらないわけではない。な……………」

「……………」

「もう、二度と、そんなうっかりしたことをいふのぢやないぞ。船が早くできんはうがいよ。なんて、そんな飛んでもないことをいふのぢやないぞ。お前は正直に潔白に、心に思つたまゝをいふつもりであつても、これが誰かの耳に入り、また旦那のお耳に入るやうなことがあつたら、それこそ誤解をうけることになるかも知れない。そんなことがあつてはお前が損だ。いや、お前が旦那に怪しからんことを考へる女だと、嫌がられるやうなことになる。いゝか、わかつたかね？」

「……………」

「わかつたら、これからもう二度とそんなことをいつちやいけないう。そんなことを考へちやならな

「……………」

「さあ、早く行つて、旦那のお部屋を掃除して来るがいよ。兄やもこれから働くのだ。」

「……………」

「さあ、早く行つて……………」

お加代はまだなにかいひたげであつたが、庄太にうながされて、悄然と歩み去る聲音がした。靖也は塀から離れた。潜戸をあけて、庄太が出て来た。

「おう、お早うございます。」

彼は靖也の姿を見て帽子をとつた。

「や、お早う。」と、なにも氣づかぬさまで靖也は挨拶した。「今日は君の仕事は忙しいな。」

「え、今日はなか／＼大變で……………」しかし、午前中が豫定どほりにゆけば、午後はすこしは樂でございます。」

「さうかね。しかしこの頃ずつと君の仕事は忙がしい續きだが、もう一人か二人、助手を殖やすことにしよう。」

「いや、そんな御心配には及びません。わたしのはうの仕事は、技術とちがつて、身體さへ小まめに動かしてありやあ事が足りるのでございますから、今のまゝで大丈夫でございます。」

庄太はすぐ移動起重機のはうへ走りながらいつた。

「さうかね。それちや、人が足りないと思つた時、遠慮なく僕にいつてくれたまへ。」

「はい。」

庄太は活氣にみちた顔をあげて、シャツを腕まくりしながら、把手を動かした。

靖也は船臺のはうへあるいた。

田島は、こゝに緊張した顔で、みづから鐵槌をとりながらも、なにか油斷なく或るものを見つけようとしてゐるらしかつた。彼は船底を幾度となく注意して見廻つた。

靖也も今日は、妙に興奮してゐた。冷静に／＼と自分の心を制してはゐながら、どこかに底知れぬ不安があつて、ともすると胸のうちに異様な鼓動を覺えた。

彼は船臺の端から端を、いつものやうになにか命令するでもなく、また愉快げに職工に話しかけるでもなく、黙々として幾十度かたゞ往きつ戻りつした。

——べつに誰を疑ふといふのではない。決してこゝにゐる人々の一人にでも、そんな心持は抱ていはぬない。しかし、事實はたしかに事實である。船底栓に、故意でなければ起らない管の故障が起つ

てゐたのである。自分が現在この眼で、間違ひなくそれを認めたのである。さうだとすれば——。

靖也は船臺にちかく積まれた鐵材に腰をおろして、なほ深く考へ込んだ。

——故意——たしかに故意だ。この仕事に恐ろしい障碍を與へようとする目的があつての仕事だ。

どうしてもさうよりほかには受取れない。だが、なんといつてもこゝに働いてゐる人間は、みんなひとつの心に力をあはせてゐる。仕事のなかに自分の正しい生命を見出さうとしてゐる。あの絶えず間に響きわたる鐵槌や穿孔錐の音は、彼等の正しい生命を撃ちかへし貫き通してゐる矢聲も同じなのだ。彼等は船を造つてゐるといふより、彼等全體の大きな姿をひとつにまとめてゐるのである。この船臺に聳ゆるものは、船ではなくて實は「彼等」自身なのである。それほどの立派な覺悟と信念を彼等は持つてゐるのだ。この仕事は自分一個のものではない。こゝに働くすべてのものである。彼等のなかの誰一人が、どうして自分自身を傷けることをしよう？ 自分自身に叛逆を企てるやうなことを敢てしよう？

——では、この恐ろしい故意の仕事は、誰の手によつてなされたものか？ この仕事に惡魔の呪ひを賭けようとしたものは誰なのだ？

「……わし、船が早うできんはうがい……」

靖也は耳の底に、かすれるやうな聲を聞いた。

ギョツとした氣持が、彼の身柱を堅く強ばらせた。

「……いや、いや！ そんなこと……そんなことはない！」

——まさか、あの女が！ あの女の性質、あの女の知識——それで、これだけのことができるか？
——そんなことを考へるのは餘りに馬鹿々々しい。餘りに不憫だ。あの女に船底栓のなにがわかる？ また螺旋廻を使ふにどれだけの力がある？

靖也は笑はうとした。

「だが……」

彼は、奇妙に笑へなかつた。

彼はいつか讀んだことのある、或る犯罪學者の、女性犯人に對する研究論文を思ひ出した。——女の惡魔的な粘着的な獸性は、たゞ辛うじて彼等の臆病と優柔と魯鈍とによつて緩和されてゐるといふばかりだ。戀愛と嫉妬、そして嫉妬と復讐は、彼等の飽くことを知らぬ血的私慾の本來の形式だ。彼等は極僅かな刺戟や衝動にも、原因に相應せぬ度外の不穩状態を示す。彼等はこの目的のためには、如何なる手段をもめぐらす。彼等はこの目的のためには、敢然として他より知識と力を求めてやまない。かうした彼等の魂は、むしろ一つの歡樂の焰なのである！ ——と、その犯罪學者は述べた。多くの例證がそこにあげられてゐた。十五歳たらずの少女すら、恐るべき爆發藥の使用法を自得し、

それを實行したことさへ記録されてあつた。

「……惡魔は、どんな小さな隙間からでも人間の心にその黒い影を射し込むものだぞ……」

彼の耳底に、また一つの聲がさゝやかれた。

「いや、しかし……」

彼は争つた。

「なにがしかしだ？ 惡魔は氣まぐれだぞ！」

「いや、しかし……」

「人間の無垢な心は、あてになるものぢやないぞ！」

「……しかし……」

靖也はひとり喘いだ。

たまらなくなつて、彼は立ちあがつた。頭腦の中に、渦巻くやうな昏迷があつた。

「や、うんとこさ！」

「や、どつこいさ！」

面白く道化た懸聲をかはしながら、庄太が助手と鐵板を肩にかついでやつて來た。靖也は彼等をよけた。

庄太はドスンと威勢よく鐵板をそこに投げ出した。

「船尾のはうへは豫定通りZバアを運びました。これから鐵板とHセクションです。」
彼は額の汗を、シャツの袖でこすりあげた。

「さうかね。御苦勞さま。まあちよつと一服やりたまへ。」

「は、有難うございます。」

靖也はポケットから煙草を出して、助手にもわけてやつた。

庄太が靖也とならんで腰をかけると、助手は、

「矢島さん、僕はこの間に、ちよつとHセクションに番號をつけて來ますよ。」

「あゝ、さうかね。頼むよ。僕もすぐゆくから。」

「ちや……」

と、助手は靖也に一禮して、急ぎ足に鋼材置場のはうへ去つた。

庄太はうまさうに煙草をふかした——が、ふと、

「今日はどうしたのかお顔色がよくないやうですね？」

彼は指さきで灰をはじきながらいぶかしげにいつた。

「さうかね。……いや、さうかも知れない、昨夜すこし仕事でおそくなつたから。仕事で一時二時頃

まで夜を更かすのは別になんともないが、どうしたのか充分睡眠ができなくなつてね。」

「それはいけませんな。旦那のやうな頭腦をお使ひなさる方は、よく眠るといふことが一番大切なことなんですから。」

「すこし紅茶を飲みすぎたせゐかも知れない。」

「さうだ。それは茶にお浮されなすたんだ。お加代が不注意に、分量を過したお茶をお茶をお勧めしたのでせう。紅茶がどんなに興奮さすものか、そんなことはから田舎者ですから、なんにも知らないのです。よくいつて置ませう。」

「いや、お加代を叱つて貰つちや困るよ。あんなに萬事によく氣をつけてくれるのだ。紅茶を勧めても、飲まなければよかつたのだ。度を過して飲んだ僕がわるいのだ。」と、靖也は手を振つたが、「……時に、お加代といふと、……お加代もこの頃は身體のどこかがよくないのぢやないかと思ふよ。あれこそ顔色もわるいし、いつもと違つて妙に黙り込んでゐて、なんだか可笑しい。醫者に診て貰へといへば、醫者なんか大嫌ひだといつて、プツツリ壁のはうを向いてしまふ。なんだか調子が變だ。……どうも毎晩僕のそばにゐて、遣はないでもない、氣を遣ふために、一種の疲れが出たのぢやないかと思ふ。近いうちに東京へ歸して、しばらく休ませてやりたいと思ふ。」

「さうでございますかね。しかしあの娘はあゝした山そでちで、身體もあれでなか／＼丈夫ですし、

毎晩のお手傳ひといつても、それほど身體を使ふわけぢやございませんし、なに、そんなことを御心配には及びませんが。」

「身體は使はなくつても、始終部屋の隅にゐて、僕がホツとペンを擱く時に、すぐなんか用事があるのではないかと立ちあがる。まるで、油断なくあたりに氣をくばつてゐる歩哨兵みたいな任務をやつてゐてくれるのだから、疲れることは却つて仕事をしてゐる僕よりも一倍だ。そんなにしないでもないといつたつて、お加代のあの忠實な性質では、どうしてもたと放心と僕の命じる言葉を待つてゐられないのだ。……で、とにかく僕のそばにゐさせてはわるいと思ふ。東京の家に歸らせてやれば、臺所のきまつた用事だけで済むのだから、そのほうが樂だらうと思ふ。」

「しかし、それでは旦那が御不自由です。」

「いや、僕はひとりでも充分だ。自分の身の廻りのこと位なんでもない。お加代をすこし休ませてやりたい。それにお加代は……いや、ほんたうにお加代は氣疲れがしてゐる。今すこし休ませてやりた

「……さうですか……お加代は旦那の御用のためには、斃れるまでやりたいと申してゐるのでございますが……」

庄太は沈んだ調子で、火の消えた煙草を口にあてた。——彼は妹を辯護したいやうな、また、な

にか或るものを哀訴したいやうな眼で、靖也をチツと見つめてゐた。

闇は叫ぶ

四五日前から、妙に蒸し續いてゐた天候は、この午後から果して雨を落して來た。灯ともし頃には風さへ加はつた。

靖也は、いつものとほり宿直室に入つて勉強しはじめたが、ともすると激しく吹きつけてくる雨がデスクの上まで飛沫をとばすので、仕方なく一方の硝子戸を閉めてしまった。暑い。背中から胸へ、ポト／＼汗がしみ出して、上着をぬいでシャツ一枚になつて見たがたまらない。手巾で幾度か額の汗を拭つた。それでも、製圖してゐるワットマン紙の上に、一滴二滴が、ポト／＼流れ落ちる。喉がか

「旦那様おいででございますか？」

ドアのそこから、叮嚀な聲がした。

「あ、誰だ？」

「良助でございます。」

「おい、良助か。おはいり。」

靖也は水差を置いた。

ドアを開けて立つてゐたのは、良助と庄太であつた。

「あ、矢島君も一緒か？」

「はい。わたくし今日庄太の家まで参りまして、それからかうして兩人であがつたのでございます。

……唯今、御勉強のおさまたげになりせんでございますか？」

「なに、そんなことは構はない。さあ、おはいり。」

靖也は兩人に椅子を與へた。

庄太は頭をさげたまゝ、黙つて良助のうしろに腰をおろした。

「や、すつかり濡れてしまつたね。」

「へい、風が強うございましてな。この工場の前の廣つばを通ります時は、まともに吹きつけられま
すので、傘もさゝれませんほどで……兩人とも、頭からズブぬれになつてしまつたのでございます。」
良助は庄太をちよつと振りかへるやうにして笑つた。

「さうだらう。この部屋なんかも、ひどい吹きつけやうで窓も開けてはゐられない。暑いのを我慢し
て、かうして閉てきつてしまつたのだよ。」

靖也もなにがなし笑つた。

「旦那様……庄太からも話を聞きましたが、お仕事がドン／＼捗どるさうで、およろこび申しあげま
す。」

「いや、これもみんなが一心になつて働いてくれるのでね。……矢島君も實によく働いてくれるから、
感謝してゐるのだよ。」

「さう仰有つてくだされば、わたくしも嬉しうございます。」と、良助は頭をさげて、「まあ、庄太もか
うして魂を入れかへたのでございますから、どうか此上とも御存分にお使ひくださいませ……」

「魂を入れかへたのなんのと、もうそんな話は出さない約束だつたよ。一時の誤解なのだ。誤解か
ら來た反抗なのだつたのだ。」

「旦那さま誤解ではございません。今夜はそのことであがりましたので……」
良助は思ひ入つた様にいつた。

「え？」

靖也は不審な眼をあげた。

「へい……此様なことを申しあげるのも面目ないことでございます。庄太から今夜はじめて恐ろしい
話を聞かしまして、まつたくびつくりいたしましたのでございます。これはなんでも早く旦那様のお耳に入

れて置かねばならんと存じまして、それでかうしてお邪魔いたしましたわけでございます。」

「え、恐ろしい話……？」

「わたしは、庄太が改心してくれました時に、なぜそのことをすつかり言つてはくれなかつたのだと、實はひどいこと責めたのでございます。……が、庄太が申しますことを聞くと、すこしは無理もないと許してやつて頂きたい心もあるのでございまして……」

「それはどういふ話なのだ？」

「旦那様……あなたは、お仕事になにか恐ろしい障害をした者があることを、御存じでございませう？」

「えつ？」

靖也はすくなからず驚いた。……田島と自分以外には漏れてゐないあの事件を、どうして良助が知つてゐるのか？

「旦那様、四五日前、お船に恐ろしい障害を仕掛けた者があることを御存じでございませう？」と、良助はいよ／＼驚く靖也を、濟まぬ顔でデツと見ながら聲を落とした。「……さあ、庄太、すつかり申しあげるがい。なにもかもよく申しあげるがい。……お前も疑はれてはならんことだ。そしてお加代も……可哀さうだ……」

さういはれて、庄太は椅子から立ちあがつた。彼の太い眉は、悲痛に強く結ばつてゐた。

「わたしは、旦那に御心配をかけまいと思ひまして……さうして、仕事の監督やら御勉強やらで、たゞさへいろ／＼に身體を使ひなされる旦那のお心を、すこしでも亂すまいと思つて……わたし一人が油断なく氣をつけてゐればよいと思つて……申しあげなかつたので……」彼は唾を飲みながら、「實は昨日すつかり田島さんに聞いたのです。わたしは旦那と田島さんの顔色が、この四五日ひどく緊張してゐるのを感じました。なにか、容易ならぬ事件が起つてゐるらしく、わたし達には笑つてお話しこそなされるが、眼は絶えず船底のあたりに注がれてゐることを知りました。そしてハツと或る事を直覺しました。この直覺し得たことには、わたしにも理由があることなので、わたしは田島さんに迫りました。田島さんは言はうとなさらなかつたが、こつちから圖星をさしたらびつくりして、どうしてそれを知つたんだといはれました。わたしは、わたしこそすべてを知つてゐるのだとお應へしたのです。」

「さうか。」と靖也はうなづいて、「その話を聞かしてくれたまへ。」

「旦那、わたしは、あの船底栓を誰がゆるめたか知つてゐます。無論これは、嚴密にいへば推測です。ですが、この推測は、はづれつこのない事實なのです。」

「誰だ、その、君のいはうとする人間の名は？」

靖也は意氣ぐんだ。

「小宮です。あの小宮徹郎です。」

庄太は、上官に對する一兵卒のやうに、姿勢を正してキツパリといった。

「えつ……？ 小宮！ あの小宮徹郎君……？」

「旦那。わたしは小宮にそゝのかされておりました。買収されておりました。わたしの今までの反抗は、みんな小宮の煽てと企みに乗つてゐたのです。今まではたゞ旦那へ反抗するための反抗——理由のない、たゞなんとなしに癢に觸るといふだけの反抗だと申しあげて、小宮のことはちよつともお話しませんでした。しかし、かうした恐ろしい事件が起つた以上、すべてを申しあげなければなりません。わたしは今までのわたしの悪業を自分ひとりで處置をつけて、自分ひとりで償ひをしようと思つてゐたのです。小宮は或る時わたしに恐ろしい交換條件を強ひました。わたしに旦那の仕事になにか妨害をするやうにと命じました。その方法は自分が教へるまゝにやればいゝ。うまく仕遂げたなら、どの程度までの報酬はすると約束しました。君塚の旦那！ わたしはその機會の來るのを待つてゐたのでした！ ……しかし、幸ひにわたしは救はれました。この父つあんから、そして妹のお加代から！ ……わたしが直覺と申しましたのは、この理由からなのでございます。そしてわたしの直覺ははづれませんでした。だから、小宮といふ推測も決してはづれるわけはないと信じてゐるのです。」

庄太は強い感動をもつて、すべてをまた改めて懺悔し告白するのであつた。彼はさうして言葉を續

けた。

「旦那！ わたしは小宮の企みを知つてゐます。しかし、知つてゐるといふだけで、小宮を取り押さへることはできません。あんな悪智慧に抜け目のない奴ですから、たゞ口先のしめしあはせたことだけをどつこにとつて、なんとすることもできません。わたしは油断しませんでした。小宮が、またどんな術で自分の謀みを遂げようとするか、その現場を取つて押さへないことには、動かぬ證據があがりません。といつて、これを旦那のお耳に入れて、旦那のお心をお仕事と小宮への防禦に、二重にお苦しめさすことはできません。せめて、自分が一度でもその悪業の味方となつた罪ほろぼしに、小宮への防禦は、わたし一人の力でひきうけるべきだと思つたのです。それで……」

「わかつた。よくいつてくれた。難有う。それで君の心持が、なほよくわかつた。感謝する。」

「しかし残念です。わたしはうま／＼出し抜かれました。わたしはあんなに油断なく注意してゐながら、わたしの知らぬ間にあんな恐ろしい仕事をされてしまいました。田島さんがよく發見してくださつたからよかつたが、もし發見されずなら……わたしは、やつぱりわたしの以前の罪を犯し續けたも同じことになります。」

「いや、そんなことはない……」

「いゝえ、さうです。小宮に味方したといふ罪は、わたしの手で償はなければ消滅したことになります。」

せん。そしてこの罪は、旦那に對してばかりでなく、一つにはわたしを救つてくれた父つあん、二つには妹のお加代に對して、立派に償ひをつけねばならぬ責任があるのです。……旦那！ お加代は可哀さうです。父つあんはこのことでお加代に疑ひをかけました。」

「え、お加代に……？」

靖也は庄太を見た。

「さうです。父つあんはお加代を疑つたのでした。」

「それはどうしてなのだ？」

「お加代が、船が早うできんはうがわしは嬉しいなんて、飛んでもないことを口走つたのを、今夜、父つあんが聞いたからです。」と、庄太は暗然として、「……父つあんに、この船の出来事をわたしが話してゐる時、お加代がそれを聞くとともに傍から聞いて、そんなに船に障りでも起きりやあ、船ができるのがおくれる。わしはそのほうがいゝなんて、飛んでもないことを口走つたのです。父つあんはびつくりしました。そして、お加代の仕事ではないかと、船の知識がないだけに、お加代の力のできる筈もないことを、ひよつと疑ひはじめたのです。そしてお加代を責めました。わたしはそれを見て、もう黙つてはゐられませんでした。わたしは、お加代のために、自分ひとりで處置をつける積りだつた小宮のことを、どうしてもうち明けねばならなくなりました。……で、すべてのことを話すと、

父つあんはそれは一刻も早く旦那のお耳に入れて置かねばならんことだといひ出したのです。わたしも、かうした出来事を旦那が御存じなさつた以上、小宮に關することを一切申しあげねばならん時が來たと感じました。それでかうして雨の中を父つあんと一緒に參つたのです。」

「實は……」と、良助は庄太の言葉をひき取つて、「お加代が手紙をわたくしに呉れたのでございます。自分の不束から旦那様にこの頃御機嫌を損じたらしく、東京の家へ歸れと仰有るから、どうかお父つあんからお願ひ申して、傍の御用をいつまでもしてゐられるやうにしてくれと、あの字もろく／＼書けぬ子が一生懸命に書いたらしく、鉛筆で長い手紙をよこしました。それで、どうして御機嫌を損じたのかと心配になつて、今夜庄太の家へ行つて見ますと、お加代はたゞシク／＼泣いてばかりゐるので、いろ／＼譯をたゞしてゐるうちに、庄太からお船に容易ならん障りが起つてゐることを聞き、驚いてゐるとお加代が飛んでもない言葉を口走りましたので、そんなことをいふなら、もしやこいつがと思つて、段々責め立て、見ますと、唯今庄太が申しあげましたやうなわけで……」

「お加代を、ちよつとでも父つあんに疑はせたのは、やつぱりわたしの罪なんです。」

庄太は辛さうにうなだれた。

靖也はデツと眼を閉ぢた。——自分も、彼女を疑つたのだ！ 疑ふには餘りに哀れな彼女をほんのすこしでも疑つてゐたのだ！

「いや、すつかりわかつた。矢島君、よくいつてくれた。」

「旦那様、お加代にどんなお氣に召さぬ所がございますか存じませんが……あのとほり山育ちで、なんにも知らない、馬鹿な飛んでもないことをうか／＼申しますほどの、羨のないやつでございますが、あゝして一生懸命に旦那様にお盡したいといふ心を持つてゐるのでございますから、どうかあいつの願つてをりますとほり、お仕事の御用にお使ひくだされたいのでございますが……」良助は誠心こめて頭を下げたが、「……庄太、しかしまあ、どういふ譯で、あんな埒ない馬鹿をいつたのだらう？あの子の口から、あんな言葉をいふとは、わしにはどうも合點がいかないが……？」

「……なあに父つあん、あれはたゞ……あれはたゞ、あの子がなにか感ちがひでもして、おどけ半分にいつたのだよ。」

と、庄太は、なだめるやうに、苦しい言ひわけをした。そして人知れずホロリとした氣持ちで顔をそむけた。

「おどけ半分……？なんほうおどけ半分といつて、おどけにも程がある。あんなことが他人様の耳にも入つて見る。ほんたうにどう間違へて聞かれるか……」

「いや、お加代がそんなことをいふ筈はない。もしいつたとすれば、それは矢島君のいふとほり、面白半分位の氣持だつたにちがひない。そんなことであの純なお加代を責めては可哀さうだよ。」

と、靖也も彼女のために辯明した。——彼もお加代の心持のすべてを、今はハッキリ知つてゐた。

——彼も、ホロリとした。

——風はます／＼狂つた。雨は大地をうがつやうに強さを増した。硝子戸ははげしく鳴つた。

三人はしばらく黙つてゐた。

「……旦那様……」やゝあつて良助はまた口をきつた。「旦那様、お加代をこちらの御用に使つて頂くわけにはまゐりませうまいか？あの子はお氣に入らぬところはどんなにもなほして、どこまでも旦那様のために働きたいと申してゐるのでございますが……」

「いや、僕は決してお加代を使はないといふのぢやない。たゞこの頃どこか身體や心持の工合が變に見えるから、氣疲れでも出たのだらうと思つて、すこし休ませてやらうとしたばかりなのだよ。」

靖也は他意のない調子でいつた。

「あの子は旦那様に御機嫌を悪くするやうなことをした、濟まない／＼といつて、ひとりで泣いてゐるのでございます。どんなことをしたのかと、叱つて訊いて見たのでございますが、自分が悪かつたのだとばかり、たゞシク／＼泣いてゐるのでございます。……一體どんなお氣に觸るやうなことをいたしましたのでございませう？」

「いや、なにも別にそんな譯はない。お加代はいつも相變らずのやうに、よく忠實に僕の世話をして

くれたのだ。」

「身體や心持の工合が變だとお氣づきになりましたのは、どういふところでございませう？」

「父つあん。」と庄太は口を出した。「そりやあね、お加代の調子がこの頃すこし變つて来たことはほんたうなのだよ。あの子はこの頃、どうかするとジメ／＼した陰氣な顔をして、わたし達が聲をかけても、妙に黙り込んでゐることがあるのだよ。それを旦那は氣疲れからだとお感じなすつたわけなのさ。」

「陰氣な顔をして黙り込んでゐる……？」と、良助はすこし考へたが、「さういへば、今日久しぶりで會つて見て、さうしたところはわしも感じた……なんだか變だとは思つた。お前はあの子に、なにかさうしたことがあるわけを、知つてゐないのかね？」

「そりやあ……」庄太はちよつと言ひ淀んで、「そりやあ……わたしにもハッキリしたことはわからな。まあ旦那の仰有るやうな氣疲れとはいはないでも、なにかあの子の身體や心持に、ポツと氣拔けのしたところができてゐるのかも知れない。」

これ以上を知つてゐながら、庄太にはこれ以上がいへないのであつた。

良助はまだ腑に落ちかねたところがあるやうに首をひねつたが、膝を進めるやうにして、

「旦那様、とにかくお加代はどこまでも旦那のお氣に入るやう働きたいと申してをります。そんなジ

メついた陰氣な顔をいたしますのは、大方死んだ母のことなどを思ひ出したかなんぞの、ほんの些細な娘心といつたやうなものに違ひございませぬ。……東京のはうは、朝倉様のお家から女中さんをお借りしてゐることではございませぬし、お臺所の御用に、なんの御不自由もないことなのですから、どうかお加代をこのまゝ、こちらのお役に立て、頂きたいのでございませぬが……」

「いや、そんなにお加代がゐたいといふなら、それはよろこんで僕の手傳ひをして貰はう。たゞ僕は今もいふとほり、お加代をすこし休ませてやりたいと思つたばかりなんだから。」

靖也はうなづいた。

「左様でございますか……使つてやつて頂けますか……」と、良助はホク／＼して、「やれ／＼これで安心した。お加代に使つて頂けるのだといつてやつたら、どんなに大よろこびすることだらう？」

「お加代は、どうしてゐるのだね？」

「庄太の家で、悄氣きつてをります。」

「さうか……今夜はもう時間もおそいし、こんな天氣になつたから、明日の晩からでも來て貰ふことにしよう。」

「はい／＼、有難うございます。」

良助はうれしく頭をさげた。

——この時である。

硝子戸を軋めかす暴風雨の彼方から、なにか、たゞならぬ叫び聲が聞えた。續いて凄じく物の崩れるやうな音がした。

三人はハツと顔を見合せた。

「なんだらう?……!」

靖也は椅子から立ちあがつた。

庄太は手早く一枚の硝子戸を開けた。

ドツと飛沫いて来る雨!

漆のやうな闇の中から、なにかはげしく争つてゐるやうな悲鳴がまた一つ! ……二つ! 三つ!

「船臺のはうからです。旦那!」

庄太は叫んだ。

「なに、船臺?……!」

靖也は急いでデスクの抽斗から懐中電燈をつかみ出した。壁にかけてある雨外套を頭からかぶると、そのまゝパツと窓から地面に飛び下りた。

庄太も續いて窓から飛び出した。

二人は息もつかず、闇の中を船臺のはうへ走つた。

まともに吹きつける風雨は、彼等の足を幾度か掬ひ煽つた。滑りがちな廣場をぬけて、瀧と注ぐ機械工場と火造工場の底合ひの落ち水を潜りながら、彼等は走りに走つた。

眞つ暗な中にも黒く、巨大な船體をさへた船臺が、つい眼の前にあつた。

呻くとも叫ぶともつかぬ聲が、船尾にちかい闇の底から切れぎれに聞えた。

靖也は走つた。

彼は手にした懐中電燈を、聲をたよりにパツとさしつけた。

黒いツブ濡れの二つのものが、折り重なつて倒れてゐた。

「……人だ!」

彼は息をはずませながら、飛ぶやうに駆け寄つた。

庄太も追つついた。

「……おゝ、人だ!」

二人は右に左に、黒いツブ濡れのものの傍らに立つた。

靖也がパツと再び照らした光りに……

「やつ、小、小宮!」

「お、つ、こゝにゐるのは、お、お加代だ！」

まったく仰天した。どこを烈しく撃つたか、眼を半ば白く剥き出し、齒を喰ひしばつた恐ろしい形相の小宮の蒼ざめた顔は、髪をおどろに亂して、肩から脊へ泥をあびたお加代の裂けた着物の下からのぞき出してゐた。

庄太は夢中でお加代を抱き起した。

「お、おつ……お加代！ お加代！ しつかりしろつ！」

靖也は外套をかなぐり棄て、ポケットの手巾を出すと、一刻の猶豫もなくその水溜にひたして、彼女の口に押しあてた。

「お加代！ どうしたのだ？ しつかりするんだぞ！ 僕が来たんだ。僕だ。靖也だ！」

「兄やもこゝにゐるぞつ！」

良助が走つて来た。

「父あん！ お、お加代が……！」

庄太は息をはずませた。

「えつ、お加代が……？」 ころがるやうに、良助は庄太の前に廻つた。「お、お加代だ。お加代だ！ ど、ど、どうしたのだ？」

「お加代！」

「お加代！」

「お加代！」

三人は聲をかぎりに彼女の名を呼んだ。

それが耳に入つたのか、彼女はすこし庄太の腕のなかで動いた。見る／＼苦痛にたへぬ表情が、彼女の顔に浮んだ。眉をかすかにピクリと動かしたのは、眼をあけようとする努力であるらしかった。唇を強くまげたのは、なにか言はうとする努力であるらしかった。

「お、お加代！」

「しつかりしろ！」

「大丈夫だぞ！」

三人は、またこも／＼叫んだ。

「……船……旦那さまのお船……」

お加代はなにか指ささうとするやうに、右手をあげたが、もう力なく息はかすれてしまつた。

「船……？」

庄太の眼は光つた。そこに倒れてゐる小宮の姿から、なにか見出さうとするやうにジツとのぞき込

んだ。

「……船は……旦那さまのお船は、わしが……」

「うむ、うむ、お前が……？」

良助は顔をすりつけるやうに、お加代を前から抱き寄せた。

「……旦那さまのお船は、わしが番をしてたから……わしが番をしてたから……」

「えつ、お前が番を……？」

「わし、番をしてゐたのだ。そして……」

お加代は息を切つた。

「……そして、この男がなにかしようやつて来たのか？」

庄太は意気込んで訊いた。

お加代は苦しげにうなづいた。

靖也は倒れた小宮を引き起した。

彼はもう呼吸がなかつた。懐中電燈の小さな光帯のなかに、いつまでも齒をくひしばつた恐ろしい

斷末魔の顔が、いたづらに雨に敲かれてゐた。

……ふと、靖也は、小宮の右手に犂とにぎられてゐる、大形の螺旋廻を見た。

「お、螺旋廻を持つてゐる！」

「うむ、螺旋廻だ！」庄太は叫んだ。「やつぱりおれの思つてゐたとほりだつた！ こいつだつた！

こいつだつたのだ！」

「お、お、お加代！ お加代！ しつかりしてくれ！ わしが来てゐるのだぞ！ わしが……父やが

……！」

良助は、氣も狂はんばかりに、お加代の兩手を堅くにぎり締めた。

「……わし……お船を……お船を番してゐた……」

お加代は囁語のやうにいつた。

「お、よく番してゐた！ よく番してゐた！」良助は泣きながら、「旦那様つ、お加代はやつぱり心

配で、家にゐられなかつたのです。……こゝへ来てゐたのです。旦那様のお部屋へもはひれないので、

こゝでお船を、お船を守つてゐたのです！」

靖也は小宮に人工呼吸を試みてゐたが、

「さうか！ お加代！ よく番をしてゐてくれた！ 有難う！ ……お禮をいふぞ！」

「旦那様が、お前に有難うと仰有つたぞ。……お、お、お加代！ わかつたか！ わかつたか！」

良助はオロ／＼聲で、お加代の耳に叫び込んだ。

お加代はうなづいた。……満足らしい微笑が、彼女の血の氣のない頬にのぼった。
庄太は思はず、ハラ／＼と涙を落した。

「小宮君！」

靖也は呼んで見た。が、もう彼には意識がなかつた。

「こいつめ、とう／＼やつて來やがつた。よくも……よくも妹を！」

庄太はお加代を良助にまかして、小宮に掴みかゝらうとした。

「待て！ 矢島君！ 今はさうした感情に驅られるべき場合でない。早く二人に手當をしなければならぬ。すぐ醫者を呼んで来てくれ。お加代は僕が部屋に運ぶから。」

靖也はいつた、彼は小宮を雨のあたられぬ固定臺の蔭に置いて、お加代をうしろから抱きあげようとした。

「あつ！ ……つ！ ……あつ！」

彼女は肩胛部にひどい負傷をしてゐるらしく、苦痛にたへやらぬ聲を絞つた。

「お加代！ 僕だよ、靖也だよ！ なんでもない！ 怪我は軽いのだ。僕の部屋へゆくのだから、苦しからうが辛抱するのだぞ！」
靖也はお加代の耳に口をよせた。

「……お加代！ お加代！ 旦那様だぞ。わかるか？ わかつたか？」
良助も聲を鬨ました。

「旦那さまお、僕がついてゐるんだぞ！」

「……旦那さまのお船……」

「船は大丈夫だ。よく番をしてくれた。お加代、有難う！ 有難う！」

「……わし……早うお船ができると嬉しい……」

「君塚の旦那！ ……あ、あんなことを……あんなことをお加代がいつてゐます！」と、庄太は咽喉をつまらせた。「お加代は、船が早くできないはうがいつていつたことを、こんな、こんな苦しいなかにも氣にしてゐるのです。旦那！ なんとか……なんとか、いつてやつて下さい！」

「お、お加代！ よくいつてくれた。船はきつと早く立派につくりあげて見せる。きつと早く！」

……さあ、僕と一緒に部屋へゆかう！ しつかりするんだぞ！ なんでもない……怪我は軽いのだ！
靖也は思はず、自分の顔をお加代の顔に摺りつけた。

醫者を呼びにゆかねばならぬとは思ひながらも、庄太はまだ去りかねてゐた。

「お加代！ みんなお前のそばにゐるんだぞ！ 安心しろ！ しつかりするんだぞ！」
彼はまた叫んだ。

「……わし……お船が早うできるはうがい……わし、旦那さまのお船、早くできると嬉しい……」
「お加代！」

あまりのいぢらしさに、良助はまた前から掻き抱かうとした。

「こんな雨風のなかで、かうしてはゐられない。早くお加代と小宮君とを、部屋まで運ばなくつちやいけない。矢島君、すぐ醫者を呼んで来てくれたまへ！ 工場の醫師の瀧田さんでい。一刻も手當をおくらせてはならない。すぐ呼んで来てくれたまへ！」

靖也はせき立てた。

「はつ。」

庄太は思ひきつて走り出した。

苦痛に身體を動かすこともできぬお加代を、靖也と良助はこもこも聲を勵まして、兩方から抱へながら、宿直室まで運んで行つた。

暗い雨を衝いて、靖也はひとり再び船臺へひつかへした。そして斃れてゐる小宮を背負つて戻つて来た。

取りあへず靖也の蒲團を床に敷いて、二人の身體を靜かに、その上に横はらせた。もう小宮には息がないといつてよかつた。

良助はお加代の胸に手をやつた。

「お加代！ お加代！」

彼は狂氣のやうに、たゞ娘の名を呼んだ。

「……お山……お山、きれいだなあ……」

彼女は、苦痛を越えて、ウツトリとつぶやいた。

「……お山？」

「……あゝが花が咲いた……お山、いつばいに花が咲いた……きれいだなあ……」

彼女は幽かに微笑むのであつた。

靖也と良助は顔を見あはせた。

「……わし、お山へゆくんだ……お山へゆくんだ……お山、花が咲いて、きれいだなあ……」
「お加代！」

靖也も叫んだ。思はず彼女の手をとつた。

「……お山には、カルシめのこがあるんだ。……カルシめのこ……」

「お、カルシめのこ！」

良助は聲を呑んだ。

——さうだ。山の祭の鈴蘭の花！それはあの哀れなカルシめの、この美しい戀心を宿して年毎に咲きみちるのではなかつたか？ 麓の若い男女は、この花が咲けば、カルシめのこが生きてもどつたといつて、よろこび祝ふのではなかつたか？ ——戀人のために斃れたカルシめのこ——その心こそ、このお加代の心ではなかつたか？

「カルシめのこ……あのお山に生きてゐるんだ……わし、お山へゆく……」

「お、お、加代！」

「……お山……花が咲いた……きれいだなあ……」

彼女は次第に息はしくなつた。その吸ふ息は、肩から脊へのはげしい打撲傷にこたへると見えて彼女は鋭い針にでも刺されるやうに、眉を動かし唇を震はせた。

「お加代！ なんでもないぞ。しつかりするんだ。すぐ醫者が来るからね！ 苦しからうが、すこし辛抱するんだぞ！」

靖也は彼女の額に亂る髪を、靜かに掻きあげてやつた。

——かすかに、力なく、彼女は臉をうごかした。

「お、お加代！ 見えるか……」と、良助はのぞき込んだ。「……それ、父やもゐるぞ……旦那様もおいでなさるぞ……」

「お父つあん……旦那さま……」

お加代は、首をもたげようとした。が、苦痛に堪へやらず、顔をしがめて、ガツクリ眩を落した。

「お加代！ お加代！」

良助は、身も世もあらぬやうに、また叫んだ。

ころがるやうにドアを押しあけて、泥まみれになつた庄太が、工場醫の瀧田氏を伴つて入つて來た。

瀧田氏は靖也に目禮する間もなく、すぐ小宮とお加代を診察した。

小宮はもう絶望であることが宣告された。

そして、お加代は——

瀧田氏の眼は、氣の毒げに、靖也と良助と庄太とに向けられた。

三人は、瀧田氏の黙つた眼から、黙つて或る傷ましい意味を聞き取らねばならなかつた。

「先生……」

良助の聲は苦しくかすれた。

庄太は父を制した。——お加代の唇が、またかすかに動かうとしたからであつた。

「……おつか……おつか……か……」

彼女はホツ／＼と荒く息づいた。

なにをいふのだらうと、三人はデットお加代を見つめた。

「……ゐる……ゐる……」

「お加代……」

良助は軽く彼女の胸を撫でてやつた。

「……おつか……お母さんが……ゐる……」

「えつ……?」

「……お山の上……お母さんがゐる……」

「お加代!」

「……お母さん……わし、待つてゐる……」

「お、お、加代!」

「……お山……お山……きれいだなあ……」

彼女のつく息は、切々に、次第に細つて行つた。

静かに閉ぢた臉の裏に、パツと燃えあがる美しい幻影を追はうとするがやうに、彼女の唇のあたりには、満足な、すべてのことをなし果て、今まで生きとほして來た世界を、淨らかに感謝するやうな微笑が、強く、刻み込まれた。

なにか探らうとするやうに、なにか掴まうとするやうに、彼女の兩手は、靖也と良助の手を、最後の力に握りしめた。

「お、お、お加代!」

「……お加代!」

良助と靖也は叫んだ。

庄太は頭を抱へて、床の上に俯伏した。

もう、彼女はなにごとも言はなかつた——應へなかつた。

瀧田氏は三人のうしろに直立したまゝ、嚴かに人の死を送るべく、頭をさげた。

「お加代! お加代! お加代!」良助は今更のやうに叫んだ。「お前……お前……もう一言……もう一言……」

「一言いひたいことはないのか? もう一言、わしに……いや、もう一言旦那様に、いひたいことはないのか!」

庄太は顔もあげないで、すゝり泣いた。——最後の息まで、なんにも言はないで——なんにも言へないで死んでゆくお加代の心持は、餘りに哀しく、餘りにいぢらしいものであつた。

瀧田氏は、醫師のなすべき手當と後始末をつけて、風雨の中を辭し去つた。

取りあへず、毛布で二つの死體を蔽つて、三人は疲れきつた身體を、椅子に凭るでもなく、床の上

に投げ出した。

午前四時。——一夜の暴風雨はやゝ風いで、窓の外は蒼白く明けそめた。

「……お、お、お加代は……お加代はとうとう死んでしまつた！」

良助は絶望的につぶやいた。

「旦那！ 庄太はいつた。旦那！ 今だからあなたに申しあげます。お加代は……お加代は心から旦那をお慕ひ申してをりました。旦那を戀してをりました！」

「……………」

靖也は石のやうに動かなかつた。

「旦那！ わたしはお加代にかはつて申します。お加代は、生きてゐる間、旦那にこのことがいへなかつたのです。だから、わたしは妹に代つて申しあげるので。それがわたしの妹への、なによりの同向です。冥福を祈る言葉なのです！ ……妹は、たつた一言、この言葉を旦那にいひたいばかりに生きてゐたともいへるのです。それだからわたしは、妹に代つて、これだけのことを申しあげるのです……………」

良助は涙とともに、庄太に摺り寄つた。

「お、庄太、よくいつてくれた！ よくいつてくれた！ わしもそれを旦那様に申しあげたかつたの

だ！ ……だが、わしいへなかつた。お加代と同じにいへなかつたのだ。よく……よくお加代にかはつていつてくれた！ これでお加代はきつとよろこんでゆくところへゆけるにちがひない！ ……

旦那様、お加代はあなた様に、いちらしいほどなんにもいへない戀の心をもつてをりました。もとよりお主と家來のこと、あの子は自分の心を、どうすることもできないで、ひとりさびしく胸のなかに收めてゐるよりほかはないのでございました。今だからわたくしも申しあげます。あの子はわたくしと部屋で枕をならべて寝てをります時に、なにを物思ひするのか、よく蒲團の襟に顔をうづめて、泣いてゐることがございました。わたくしはそれを知つてゐました。しかし、わたくしにも、どうすることもできないので、可哀さうだとは思ひながらも、たゞ知らぬ顔に寝入つた風をしてゐるよりほかはございませんでした。あの子の苦しい心のなかを知らぬ顔に寝入つた風をしてゐるよりほかは、どうか……どうかあの子の大それた戀の心持をお叱りなさらしないで、ほんたうに愍然な奴、哀れな奴と思召してくださいさるやう、お願ひ申します。……旦那様が、おたはむれにも、あの子に、お加代は好きだと仰有つてやつてくださった時に、あの子はその旦那様のお言葉を繰りかへしながら、どんなに嬉しがつてゐたこととございましたか？ ……旦那様！ どうかあの子の不埒な戀をお咎めなさらさないで、あの子が、たゞ真心から旦那様をお慕ひ申しあげながら、そのことは一言もいふことができない

で、かうして死んで行つたことを、どうか……どうか愍然だと思つてやつてくださいます……」
「わかつた！ 良助、僕はお加代の無垢な愛を、今、よろこんで受ける！」
靖也は情熱をこめて良助の手をとつた。

「あ、あ、難有うございます！ 難有うございます！ ……その旦那様の一言だけで、もう大よろこびでゆくところへゆけます。この上もない仕合せ者となつて、死んでゆけるのでございます！ ……」
庄太、お前から、旦那様にお禮申しあげてくれ……」

「旦那！ もうなんにも申しません。難有うございます！」
庄太は膝の拳を滑らせて靖也に頭をさげた。

「そんなことをしてくれては、僕がなんといつていゝか、苦しくつてならない。どうか、もうこれ以上をいはないでくれたまへ！ 僕にはなんにもかもよくわかつたのだ。お加代の心には、なんといつて感謝していゝか、言葉がないのだ。……もし、良助と君とがゆるしてくれるなら、僕は、せめてお加代を僕の家の人として、僕の家墓に埋めたいと思ふ。これは今、改めて僕からお願いだ。さうさせては貰へまいか……」

「そ、それは餘り……餘り勿體なうございます……」
良助はあわてゝ手を振つた。

「いや、願ひだ。是非さうさせて貰ひたいのだ。僕の家墓——それは、やがては僕も埋められるところなのだ。僕はお加代が好きだつた。その心持はむかしも今も、これから後、僕の一生涯も、決して變らないと思ふ。ほんたうに、君たちがゆるしてくれるなら、僕は是非さうしたいのだ。さうすることが、せめてものお加代への感謝のしるしだと思ふ。どうか、それをゆるしてくれたまへ！」
「あ、あ、難有うございます！ どんなにか……どんなにか、お加代はよろこぶことでございますう！」

「旦那！ 難有うございます！」
良助と庄太とは床に手をついた。

「お、それをゆるしてくれるかね！」

靖也は涙にぬれた眼で、二人を見た。

美しい情理と恩義と——感動の深い沈黙の數分が過ぎた。

三人は、たゞ死したる魂の永しへに安かれ、淨かれ、さきくあれと、祈念することくうなだれてゐた。

さまざまの追憶やら哀傷やらが、新らしく、更に新らしく、彼等の心に波紋のやうにひろがつては消え、ひろがつては消えた。

ことに靖也は苦しかった。

——あのいちらしい戀!

いまはじめてわかつたのではない。自分も時として、彼女の、泣くに泣けぬ、叫ぶに叫べぬ戀を、ふと強く感じないではなかつたのである。が、自分はそれを打消した。彼女の純情と率直と無邪氣さから、たゞ自分を好きだと仕へてくれ、自分も彼女を好きだと可愛がつてゐたのである。さうするところが、疑つてはならぬ彼女の、お山の雪に清淨に育まれた、真正正銘の乙女心に對する禮だと思つた。法だと思つた。母からも、また高柴からも、この點では、いろ／＼に警戒を與へられたのではあつたが、自分はいつも彼女を信じきつてゐた。それが、やつぱり、ひと向きの哀れな戀だとは、實際、かうして良助や庄太の口から説明されてこそハツキリ知つたのである。

不憫だと思つてやつてくれ——と、良助も庄太もいつた。自分も、胸に喰ひ入るばかり不憫だと思ふ。たつた一言、彼女の口から、自分を愛してゐるといふことを、言ひ得ないで死んだお加代! それだけに淋しく、つらく、果敢なく死んだお加代! そして最後まで、自分の仕事のために、身を犠牲にして死んだお加代! ——自分は謝するに言葉がない、道がない。しかし、その一言をいはないで死んでくれたことは、残酷なやうではあるが、まだしもよかつた。忝けなかつた。自分には愛する人がある。正しく誓ひかはした人がある。いまさらお加代が、そのせつない心を自分に打ちあけるやう

なことがあつたら、自分は——あの、すべてに「一つの道」をアンナ夫人から教へられて以來、それを堅く守りとほしてゐる自分は、哀れではあるが、彼女の申出でを斷乎として斥けねばならなかつたのだ。自分には、その場かぎりお座なりや誤間化しはいへない。そんな不純なことは、ことにお加代に向つてはいへない。お加代の淨い心を信すれば信するほど、そんな一時のがれの返事はできない。そして、自分の口から、キツパリ彼女の心を受け入れることができない譯を諭したら、彼女の恥ぢと苦しみは、どんなであつたらう? ——まだしも、まだしも彼女は、その心を言つてくれないでよかつた。自分に氣まづい恨めしい心を、ハツキリ持つて死んでくれないでよかつた。

たゞ自分は、彼女の冥福を祈り、彼女をいつまでも忠實な無垢な淨心な、生涯の想ひ出の女として難有く嬉しく感謝してゐたいのである。自分の肉親以上に親しめる女として、わが家の墓石の下に埋めることは、なによりの心遣りでありまた満足である。彼女も今は、きつとさう思つてくれるにちがひない。良助と庄太の口から、あの言葉を告げた瞬間から彼女の魂は一筋の煩惱から解脱してくれて、今は美しい佛果を得てゐるにちがひない。

お加代よ! 永しへに安らかにあれ!

——靖也は合掌した。

夜はすつかり明けはなれた。

窓外の暴風雨は名残りもなう晴れた。

大千世界のあらゆるすべてに平等に光を與へ、恵を垂れ、今日の日の裁斷のために、ゆるぎなく空の高檣に君臨する太陽は、クワツとあたりに眩耀した。

その青桐に、雀が五六羽、ものめづらしげに啼きかはした。

もう工場には、人の足音が聞えはじめた。

靖也はホツと息づきながら顔をあげた。

柱の時計が、五時を示してゐた。

この罪

暴風雨の夜の事件を知つた時、工場の人々は驚いた。

小宮の憎むべき行爲は、「悪人」「卑怯者」「畜生」の名をもつて、人々から罵られ呪はれた。なかに

は、小宮の背後に、まだ一人や二人の、同じ名を以て責め辱まねばならぬ人物があるとさへ、激越した言葉を放つ者さへあつた。

靖也は、今はすべてを警察權に委ねた以上、これについては、もうなにごとく感情的な批判や疑懼

をはさまぬやうにと、人々をなだめた。

反對に、お加代の忠實な可憐な行爲は、人々から、讚美と同情の、最上級の言葉をもつてむくいられた。彼等は庄太に會ふごとに、哀悼と慰めの聲をかけた。

庄太は黙つて、それに頭をさげた。彼はお加代の死の一日と、その翌日の葬儀の日と二日だけを跡仕末のために休んだが、翌日からは、相變らず勇ましく移動起重機の運轉臺にのぼつた。靖也から、せめて一週間は家にゐて、彼女の冥福のために祈つてくれといはれたが、彼は、お加代が、一日も早く船のできあがることを口にしながら死んだゆゑに、かうしてこの第三船臺のために働くことが、彼女の冥福を祈るなによりの手段だといつて聞き入れなかつた。

働きのながらも、彼はやつぱり強い自責の念に撃たれるのであつた。自分が小宮に一時でも與してゐたことが、かうした悲劇の原因になつたやうな気がした。たとひそれが直接の原因でなくとも、すくなくも自分がこの罪としてなにかを償はねばならぬやうに感じたのであつた。——君塚の旦那は、たとひそれが船長の不覺、乗組員の不運であつたにしても、自分のつくつた第一の船が沈没した時にあれほど強い自責の念に撃たれたのではないか？ その人の心を心として、かうして働いてゐる自分にこの罪を罪としないで、どうして安閑としてゐられよう？ さうだ。お加代の死には、すくなくとも自分の罪がある。自分の責任がある。自分はどこまでもこの罪を罪として、當然の罰をうけ、當然の

償ひをせねばならぬのだ。誰がなんといつて慰めてくれようと、この罪はお加代に謝さねばならぬ。父に謝さねばならぬ。君塚の旦那に謝さねばならぬ。——いや、自分の良心に對して、どんな手段を盡しても謝罪せねばならぬ！

彼は、キツと眉を一文字に寄せて唇を噛んだ。

良助が悄然としてあるいて來た。疲労と落膽に、彼の頬はこの二日の間に、ゲツソリ瘦せてゐた。深い皺が、暗く額のあたりに刻まれてゐた。

「おゝ、父つあん。」庄太は聲をかけた。「なにか用があるのかね？」

「うむ。旦那様のお部屋があつたのまゝになつてゐたから、お掃除に來たのだよ。……そして、お加代の包みもお前の家に置いてあるし、それをみんなひとまとめにして、せめて故郷のお寺へはそれを納めようと思つてな。」

良助はいつた。

「あゝ、それがいゝよ。なまじつかお加代のもつが——著物一枚でも残つてゐると、それが却つて思ひ出しの種になるからね……」

兩人は、しばらくジツと黙つてゐた。

良助は懷中から黒い、セルロイドの小さな櫛を出した。

「旦那様のお部屋を掃除してゐたら、こんなものが隅つこに落ちてゐたよ。」

「おう。お加代の櫛だな……」

「……これもお寺へ納めようよ。あの子が死ぬ時までさしてゐた櫛なのだから。」

「父つあん。その櫛だけはわたしに出来ないか？」

「え？ それはやつてもいゝが……しかしお前は、なに一つ残して置いても、思ひ出しの種になるからといつたぢやないか？」

「うむ……だが、その櫛は、わたしに記念に貰つて置きたいのだよ。お加代は寫眞にうつることが嫌ひだつたから……その寫眞代りに持つてゐたいのだよ。」

庄太はシンミリいつた。

「さうか……ぢや、これを……」

良助は庄太に櫛を渡した。庄太は大事に上衣の内ポケットにしまひ込んだ。

二人はまた黙つた。

靖也が來た。

「おゝ、良助。部屋の掃除を難有う。……お前は疲れてゐるだらうに……」
彼は痛ましげにいつた。

「いゝえ、旦那様はこのやうに仕事にかゝつてゐらつしやるし、庄太もかうして働いてゐるのでございますもの。わたくしなんぞは樂なものでございますよ。」

「だが、お前は僕達とちがつて年齢もとつてゐるし……」

「なあに、旦那様！ わたくしはまだ五十八ですよ。まだ……」

「父つあん、五十八にまだは變だね。」

庄太ははじめて笑つた。

「いゝや、まだだよ。まだ……だよ。」と、良助も、急に氣軽く笑つて、「わしは、まだ……これから旦那様のために、なにかお役には立つ積りなのだ。五十八だつても庄太、まだ……元氣はあるよ。山で毎日斧を振つて鍛へた身體だ。腕つ節なら、こゝに働いてゐる若い人達にやあ負けないよ。お家の御用さへなけりやあ、毎日でもやつて来て、鐵板の十枚や二十枚、朝飯前に運んで見せる。」

「さうだね。父つあんの腕つ節の強いには驚いたからね。いつか、わたしが旦那に喰つてかゝつた時だしぬけにうしろから父つあんの拳固を頂戴したが、あの時は随分痛かつたからね。」

庄太は子供のやうに笑つた。

「そりやあ強いさ！ まだ……お前なんかや凹ませやしないぞ。」

良助はいよゝゝ威張つた。

それがをかしいので、靖也も思はず笑はされた。

「いや、その元氣はなによりだ。……しかし、無理はもうきかなくなつた年齢だから……それに……」

「旦那様、もう今日からは、元氣のいゝ、威勢のいゝお話許りにいたしたうございます。わたくしもすつかり若返ります。これからは旦那様のお仕事一つです。それがわたくしの希望なのでございます。」

「難有う。僕は一生懸命に仕事を急ぐ——船が早くできあがるやうにと祈つてくれたお加代の言葉を、今日から胸に刻みつけて、一生懸命に仕事を急ぐよー」

「さうだ。お加代の言葉に對しても、わたしは一生懸命に働かねばならない。旦那のお仕事を、一日も早く完成させねばならない！」

庄太は自分で自分の身體に、命令するやうに、ひとりつぶやいた。

「……もう、もうお加代の名はいはぬことにいたしませう。あの子はお家のお墓の下で、ほんとうに嬉しく安心して眠つてゐるのでございます。わたくしは、もうあの子のことで、なにもいひたくはないし聞きたくもなく……たゞ、旦那様のお仕事だ！ それひとつの希望だ！」

「難有う！ 難有う！ 感謝する！」

「旦那、さあ、働ませう！」

庄太はいつた。

靖也はつつと手を伸して運轉臺の彼と握手した。
伍長の田島が走つて來た。

「君塚さん。わかりました。」

「え、わかつたか？」

「やつぱり、あいつの仕業でした。小宮の仕業でした。船底栓を一々調べて見たら、三箇所ほど巧みに、氣づかれぬやうに、旋螺廻でゆるめてありました。……一應、あなたに、ちよつと來て見て置いて頂きたいのです。それからすぐ、そこをなほしたいと思ひます。」

「さうか、ぢや、僕が行つて見よう。」

靖也は田島と一緒にゆかうとした。

「旦那！ ちよつとお待ちください。」

と、庄太は運轉臺から飛び下りた。

「なんだね？」

「旦那！ お願ひがあるのです。」

「え、願ひ？」

「はい。お願ひです。」

「改まつて……なんだね？」

「わたしにその船底栓を締めさせて頂きたいのです。」

「……え？」

「旦那！ わたしは、自分の手でその船底栓を直したいのです。……旦那！ なにもこれ以上申しあげません。わたしが旋螺廻をとつて、自分の手で、船底栓を締めなほすことは、わたしのせめてもの心やりなのです。申譯なのです。どうかお願ひです。わたしにその役目を果させて頂きたうございます。」

庄太は、不動の姿勢をとつて、熱意をこめていつた。

靖也はすぐうなづいた。

「よし、わかつた。ぢや、君にやつて貰はう！」

「難有うございます。」

「なるほど、矢島君の心持は僕にもわかる。」と、田島もうなづいた。「うむ、君の手で締めなほすことは意義がある。立派な意義がある。やりたまへ。是非やりたまへ！」

「田島さん。難有う。」

庄太は帽子をとつた。

「お、庄太、よくいつた。お前の手で、あの小宮のやつたことを直すのは、このお方のいはれるや

うに、意義のあることなのだ。それは……それはあの……わしはもうお加代の名を口にすまいと思つたが……それはあの、お船を守つたお加代の心を、全うさせてやるためにも嬉しい話だ！ わしも一緒に見せて頂きにゆく。庄太！ お加代とわしのぶんも、お前、しつかり締めなほしてくれ！」

良助は、涙を見せじと顔をそむけた。

靖也も田島も暗然とした。

「さあ、旦那、お伴いたしませう！」

「うむ、ゆかう！」

四人は船臺のはうへ歩んだ。

そこには相變らず、同じ心に働く職工達が、勇ましく、それ／＼の部署に就いてゐた。

ヤンシヨイサ

ヤサソラエー

雇ひは神さま

神さまならば

親方神主ありがたや……

彼等は聲をあはせて唄つた。

田島はさきに立つて、船底へ潜つた。

彼は調べた三箇所を、靖也に示した。靖也は仔細にそれを検査した。

「さあ、矢島君！」

と、田島は振りかへつて、庄太をさしまねいた。

庄太は緊張した顔で、無言のまゝ進み出た。

田島は彼に螺旋廻を渡した。

「さあ、こゝだこの栓を締めるのだ。僕も手傳はう。」

「いえ、わたし一人にやらせてください。なほに小宮の手でゆるめられたもの位、わたしの力で締め

なほされないことはない！」

庄太はシャツの袖をまくりあげた。

「よし。しつかり締めるんだぞ！」

「はい！」

庄太は螺旋廻を栓にはめこんだ。

「ウムツ！」

彼は満身の力を籠めた。

そして第一の栓は締められた。

「これはお加代のおんだ！」

ついでに彼は、田島に指さるゝまゝに、第二の栓を締めた。

「これは父つあんのおんだ！」

ついでに第三の栓——

「これは、おれのおんだ！」

庄太の額からは、タラ／＼汗が流れた。

ホツとして、彼は螺旋廻をそこへ置いた。

「……これでせい／＼した。思ひ残しがなくなつた！」

彼は笑つた。淋しい、燥びたやうな笑ひだつた。

良助はソツと袖を眼にやつた。

靖也は黙つて、また庄太に握手した。

「さあ、こんどはこつちの仕事だ。田島さん、難有うございます。では……」

彼は急いでそこを去つ

良助も靖也も田島に一禮して去つた。

「……矢島つて男は實に男らしい男だ！」と田島は感心するやうにいつて「いつかあの男が、わたし達に妙に反抗した時には、飛んだ人間を無責任に口添へして、この工場に入れたもんだと後悔しました。が、今ではわたしは、どうだ、自分の紹介で入れた人間は、まづこんなものだよといふ風に、組長へも職長へも、また技師としてのあなたへも、鼻が高いやうな氣がするのですよ。」

靖也も頼もしげに微笑した。

「まつたくだ。あの男は僕なんかより、ずつと偉い心をもつてゐる。僕はつく／＼敬服してゐる。」

「君塚さん。どうでせう矢島君は、もう立派に伍長——いや、伍長以上の値打がありますぜ。ひとつそのうちあなたから、社の重役さんに、口をきいて頂きたうございます。」

「それは僕も思つてゐるのだ。あの男の人物から働き振りから、是非、伍長に推薦したく思つてゐるのだ。そして君を組長に……」

「いや、わたしなんぞは、まだ／＼です。まだこのまゝで、勉強しなくちやなりません。——實際、この頃やつと、造船の仕事がどんなものであるかと、ボンヤリわかりかけて來た位のところですから、まだ、ウンと勉強しなくちやなりません。」

「勉強は、お互にだよ。」

「それに、悲しいことには、わたし達のやうな正規の學問をしなかつた者は、なにより大切な、語學

の力が無いので困ります。ちよつと圖式の説明かなんか読みたいと思つても、英語がまるで讀めんのだから。どうにもなりません。そいつが實に残念です。……一時は、英語の獨稽古といつたやうな本をたどつて、かなり一生懸命に自習して見たのですが、語學といふものは、どうしても振り假名や、名詞から動詞へ返へる番號の文字をたどつたのでは駄目です。そのうち、君塚さんの御研究でもましまりました、お暇ができましたら、一日に二三分でもいゝから、英語を教へて頂きたいと存じます平職のなかにも、なか／＼熱心家がゐて、なんとかして、せめて機械の本だけでも辭書にすがつて讀めるやうになりたいといつてゐる連中が、なか／＼多いのです。その連中と一緒に、一つ夜學の會みたいなものをつくりまして、あなたから教へて頂きたいと思つてゐます。」

「僕でよければ、その位のことなら、いつでもひきうけるよ。なかに、研究の時間は割いていゝ。よければ、明日の晩からでもその會を開きたまへ。」

「いや、難有うございます。實はお邪魔になると思つて、いまゞでお願いしたいところを、こらへてゐたのです。」と、田島は大喜びで、「これを、連中に申しましたら、希望者が、なか／＼多うございませうよ。」

「多いほどいゝね。」

「さうすると教場があるわけですね……教場は、製罐工場が、夜分はひろい空場ができますからあす

こにして、筵でも敷いて、そこに坐ることにいたしましたせう。……それから、黒板は、今夜有志の二三人で、板をついでつくることにいたしましたせう。……や、いゝ機會にこんなお願いをきいて頂きました。難有うございます。」

田島は嬉しげに、頭をさげて船尾のはうへ走つていつた。

靖也は愉快げに、そこに立ちつくしてゐた。

——「メリケン・バア」の片隅で、ひとり酒を飲んでゐるのは、庄太であつた。

彼の圓卓の上には、ビール罎が、もう五六本も空いたまゝ、ならべ立てられてゐた。

「おい。酒だ」

彼は怒鳴つた。

「はゝ」

と、例の厚化粧で首のながい女給のお花が、帳場でビールを抜かうとした。

「ビールは澤山だ。そんなものぢや酔へねえ。これへウキスキーを一杯だ。」

庄太は、ビールのカップを高く擧げた。

「それへウキスキイ？ そんなものでウキスキイを飲むのは亂暴だわ。」

「なんでもいゝ、これへウキスキイだ！」

「まあ、矢島さん、そんなに飲んでいゝの？」

「なんでもいゝ。客の註文だ。はい、といつてつけ。」

「だつて……そんなものでウキスキイを飲んで……身體にわるいわ。」

「早くつけ！」

「……つぐことはつぐけど……」

と、お花はウキスキイの角罎をとつて庄太の圓卓にやつて來たが、

「こんなもので飲むなんて、大丈夫？」

「大丈夫だ。早くつけ。」

「ひどく酔ふわ。いゝの？」

「馬鹿。ひどく酔ふために飲むんだ。」

「なぜそんなに酔ひたいの？」

「なにをつべこべいやがる。酔ひたいから酔ふんだよ。」

彼方の壁際の圓卓にゐる二三人の勞働者らしい客は、この會話を聞いてゐたが、

「お花ちゃん。お前野暮だぜ。おいこの酒をとめてくれるな。わたしの胸にさ、素面ぢやいへないところがある——つて、都々逸の文句にも、ちやんと極りがいつてあるぢやあねえかよ。」

と、一人の客が、せゝら笑ふやうにいつた。

「さうね。……ぢや、矢島さん、そんなことがあるの？」

お花は笑つた。

庄太は相手にならず、つがれたカップをグツと叩つたが、すぐブツと咽せた。

「まあ、そんなにひと息に強い酒を飲むなんて、亂暴よ、矢島さん。」

お花は庄太の脊を撫でた。

「よう／＼、御兩人！」

「妬けます／＼！」

客は口々に囁きたてた。

「いゝわよ。」お花はツンとして「矢島さん、そんなおつな話があるの？」

「馬鹿」

「ぢや、失戀、失戀の煩悶？」

「フ、さうかも知れねえ。」

庄太は淋しく笑つて、またひと息に呷つた。

「まあ、失戀なの？へえ？そして、相手はどんな女なの？」

「お前でねえことだけは、わかつてる。」

「御挨拶ね。……だが、どんな女？」

「美しい女よ。」

「美しい女はわかつてゐるわ。」

「縹緞がよくつて、初心で、すなほで、正直で……」

庄太は、ちよつと聲をつまらせた。

「あら、戯談だと思つたら、ほんたうだわ！矢島さんが、そんな顔をして物をいふのははじめて見た。」

「ほんたうだとも！」

「その女どうかしたの？」

「死んじゃつたよ。」

「へえ？」

「……死んじまつたんだよ！」

庄太は吐くやうにいつた。そしてまた呷つた。

「まあ！死んだの？」

「死んだよ。」

「どうして死んだの？病氣？」

「お花ちゃん。なか／＼熱心だね。」

客の一人が、またからかつた。

「大きにお世話よ。」と、お花は壁のはうへ頤をしやくつたが「え、矢島さん。病氣で死んだの？」

「……戀がかなはないつて、その男のために死んぢやつたのだ……」

「その男？その男が矢島さんの？」

「なんだつていゝ。その男がおれであらうとなからうと、なんだつていゝ。……その女は可哀さうだらう？」

「えゝ、そりやあ可哀さうよ。同情するわ」

「さうか……可哀さうだと思つてくれるか……」庄太はデツと空のカップを見つめたが、「おい、もう一杯だ！」

「そんなに飲んでどうするの？こんな強いお酒を……？亂暴よ。」

「いや、飲みてえのだ。飲ましてくれ。」